転生先は“ネギま”じゃなくて真恋姫！？

大喰らいの牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生先は“ネギま”じゃなくて真恋姫！？

【Ｎコード】
Ｎ４９５８Ｖ

【作者名】
大喰らいの牙

【あらすじ】
えー、この作品は現在連載中の“ネギまと転生者”の主人公が“ネギま”の世界に転生するはずが、間違って“真恋姫”に転生するお話です。

転生先は・・・（前書き）

ようやく形になったので投稿をしました。

イエーーーーーーー、（　。д。）人（。д。）ノーーーーーーーーィ

スマン、はちゃけすぎた。
これは小説のあらすじでも紹介しましたが、“ネギま”と思ったら“真恋姫”の世界に転生してしまうお話です。
原作をプレイしたことがないので、製作に時間がかかってしまうため、不定期更新になりやすいですが、それでもいいよ。という方は駄文ですが付き合っていってください。

転生先は・・・

キャラ設定

主人公　蒼騎　真紅狼　《あおき　しんくろう》

年　外見は２１歳だが精神年齢は６００歳越え。

身長　１８０ｃｍ

容姿は鋼殻のレギオスのリンテンスをイメージ。
ただ、眼の色は『直死の魔眼』発動時は蒼それ以外は真紅。

能力
ＫＯＦのオズワルドの戦闘術　“カーネフェル”を使える。
武器　トランプ

鋼殻のレギオスの天剣受授者の技全てを使える。（その他の剄技も使用可能）
武器　リンテンスの鋼糸と刀の天剣

戦国ＢＡＳＡＲＡ２の武将の武具と衣装に各武将の技が使える。

身体は「紅」に出てくる、『崩月流』の身体の構造となっています。
右手に角あり。

ＦＦ６ａｄｖａｎｓの召喚獣と魔法が制限なしで発動可能となる。
（詳しくは“ネギまと転生者”の設定２を見てくれ。）

死にかけたときに何故か「直死の魔眼」も持つことになる。
それに応じて、『七夜』の体術を使用可能になる。
召喚獣に関してですが、直接戦うことはありません。
ちょっと、素材を貰う程度。
あと、作中にＦＦシリーズである武器を手に入れます。
ヒント　ディシディアに出てくるキャラの武器。
一瞬でバレそうだな。ちなみにその武器は私の持ちキャラです。
こんな感じですがよろしくお願いしますｍ（__）ｍ
ではちょっと冒頭を入れます。

「無事じゃ、怪我ひとつない。」
「そうか、よかったよ。」
と言った後、俺は光に包まれ、新しい生を得た。
「む？しまった、送る場所を間違えてしまったわい。・・・まあ、あ奴なら大丈夫じゃろ。」
この一言により真紅狼は正規の手続きを踏まずに送られたため身体に異変が生じているとは思わなかった。
転生中・・・・
「・・・・っう！！いでででで！？何が起こったんだ？」

と目覚めはとてつもなく最悪だった。
だが、最悪なのはこれからだった。

「どこ、ここ？」
目覚めたとき森の中に居た。

「というか、俺の体が何故縮んでいる？」
２１歳ぐらいに設定してもらったはずなのに、今の姿はだいたい９歳ぐらいになっていた。

近くでなにやら物音がしたが、転生後の謎の激痛により再び意識を落としてしまった。

「・・・人が倒れている！？アナタ、その傷どうしたの！！母上！！」
「そんな大きな声を出してどうしたの、華琳？・・・あらあら。華琳荷物を持ってちょうだい。私はこの子をおぶります。」
「はい。母上。」
というやり取りをやっていたが、真紅狼には聞こえているハズがなかった。

真紅狼はこうして、後に「覇王」と呼ばれる少女と出会った。

転生先は・・・（後書き）

ようやく投稿だ！！
スミマセン、本当は二話一気に投稿したかったんですが、力尽きました。
主に、睡眠的な意味で・・・

“ネギま”じゃなくて“真　恋姫夢想”に転生?!（前書き）

二話目でーす。

熱中症になりかけました。・・・あぶねっ！

水分補給はこまめにやりましょう。

“ネギま”じゃなくて“真　恋姫夢想”に転生？！

～真紅狼ｓｉｄｅ～
「おう？！ここはどこだ・・？」
「神の領域じゃ。」
「よう、じいさん。あってすぐに言いたいことあるんだけど、言ってもいいか？」
「・・・それは勘弁してｈ「却下」」
「俺をどこに飛ばした？」
「スマン、転生先まちがえてしもうた。」
「・・・・どこに飛ばした？」
「“真　恋姫無双”っていう世界じゃ。」
「なにそれ？」
「三国志は知っとるじゃろ？」
「ああ、魏、呉、蜀のことだろ？」
「そうじゃ。お主のいるところはそれじゃ！」
「・・・は？」
「なんじゃが、それは本来の三国志とは少し違うようじゃ。」
「どこが違うんだ？」
「なんでも、その世界は“外史”と呼ばれているらしい。」
「“外史”ってなに？」
「異世界（パラレルワールド）というものらしいぞ、今回は有名な武将がすべて女らしい。」
マジかよ。全員女か・・・。男の立場低そうだな。
「じゃ、次だ。俺の体が縮んだのは？」
「うむ。正規な方法で転生しなかったのが原因で転生したときに法則が乱れたようじゃ。」
つまり、あれか。

宇宙の法則が乱れ始めた！！　　『アルマゲスト』！！

でも、俺はくらったのか？

「一応成長はするんだよな？」

「ああ、成長するが、２１歳までな。そこからは肉体の成長は止まるがの。」

「ああ、さいですか。」

「あと、そうじゃ。能力の一部が今使用不能になっておる。」

「え、どれが？」

「まず、鋼糸の使用が不可じゃが、刀の方は・・・大丈夫じゃ。あとは魔法じゃな。これは全て使用不可だ。１７歳を超えれば、鋼糸は完全に使えるようになるのじゃが、魔法は２１歳にならなければ無理だ。」

鋼糸が使えなくなるのは痛いな。

「まあ、しょうがねえか。使えないならしばらくは身体を鍛えながら、“カーネフェル”や“崩月流”に“七夜”の体術に専念するか。」

「あと、これは追加じゃ。“カーネフェル”で使用するトランプじゃが無限に出てくるから無くなるってことはないぞ。」

「おお、ありがたい。」

三国志ってことは漢王朝の時代だしな、トランプなんて代物あるわけないし、どう調達するか困っていたが、悩みが一つ消えた。

「む、そろそろ起きるがよい。長く寝過ぎると身体が固くなって動きを取り戻すのに大変じゃ。」

「うい。」

「じゃ、第二の人生楽しむがよい。」

「おう。」
そのあと、俺は目を閉じた。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～曹操ｓｉｄｅ～
母上が運んできた男の子は未だに目を開けなかった。
私より年はだいたい三つ上ぐらいであった。
見慣れない服を着ていた。

「・・・うぁ？」
「母上、意識が戻りました。」
「あらあら、目が覚めたかしら？」
と母上は安心できるような声で男の子に声をかけた。

「・・・ここは？」
「森の中では危険なので私の家に来てもらいました。」
「態々、すみません。」
「いいえ。大丈夫ですよ。」
「それでも助けていただいて有難うございます。」
と男の子は身体を無理に起こして、見慣れぬお辞儀をしていた。

「・・っぅ」
「無理はいけないわ。さて、華琳。私は水を汲んできますので、少しの間お願いね。」
「はい、母上。」
「では、いってきます。」
そういい、井戸の方に水を汲みに行った。
そのあと、一気に静かになる。
私はさっきから気になっていたので聞いてみた。

「アナタ、どこから来たの？」
「ここよりもずっと東から来た。」
「というと、呉から？」
「違う、それよりもっと東だ。海を渡った先に島国がある、そこからやって来た。」
「そんな国あったかしら。」
“日本”と呼んでいた。」
「ふ～ん。歳は？」
「九つだ。」
「私より三つ年上・・・。」
思っていた通り、年上だった。
また、新しい疑問が生まれたので聞いてみた。

「それじゃあ、アナタの服装はその国の物なの？」
「ああ。」
「随分と奇抜ね」
「・・・・・・・・・・」
「最後にいい？」
「なんだ？」
「アナタのｎ・・・「只今、戻りました」お帰りなさい、母上」
名を聞く直前で母上が帰って来た。
～曹操ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
目が覚めた俺は、いきなり声をかけられビックリしたが、その声の持ち主を見てみると金髪で“深窓のお嬢様”という感じの女性だった。
うん？金髪？
・・・・待て待て！
ここは三国志じゃなかったか！？

なんで、金髪なんてものがあるの？！
これが、ジイサンの言ってた“外史”ってやつか。
・・・改めて凄いと思った。
その女性の娘が色々と質問してきたので、嘘はなるべく付かずに答えた。
さすがに、未来から来たとかは言わなかったけど・・。
最後に聞きたいことがあったみたいだが、この娘の母が帰って来た。
俺は汲んできてもらった水を受け取り、水を飲んだ後「貴方のことを聞きたい」と言われたので話すことにした。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～彗琳ｓｉｄｅ～
水を汲み終え、家に着いたときには華琳と話していた。
だけど、痛みのせいなのかどこか、無理して喋っていることが何となくだけど、わかった。
そして、なによりも分かったことはおそらくこの子には家族と呼べるものが居ないことが分かった。
華琳が家族のことを話していると、彼はどこか羨ましそうで儚げな眼をしていた。

「只今、戻りました」
華琳は一旦質問を止めた。
私は汲んで来た水を竹筒に入れ、飲ませた。

「そろそろ落ち着いたなら、貴方のことを聞きたいのだけどいいかしら。」
「はい。」
「私から名を言うわ。彗琳よ。華琳の母です。」
「私は姓が曹、名は操、字は孟徳、真名は華琳よ。」
この娘があの曹操！？・・・・・マジ？

ちょっと、凄い現実を目のあたりにして呆けていたが、正気に戻りこちらも名乗ったが、真名ってなに？

「俺は蒼騎　真紅狼だ。」
「姓が蒼で、名が騎かしら？」
「いえ、違います。字が蒼騎、名が真紅狼です。」
「真名はないの？」
「その真名ってなんですか？」
「神聖な名とでも言っておこうかしら。真名はその人が認めた相手のみに教える名よ。勝手に真名呼んでしまうと首を斬られてしまうから気を付けてね。」
「はい。となると、俺の真名は真紅狼ですよ。」
「・・・！何も知らずに真名を教えていたの？」
「いえ、俺の国では真名というのは無く、字と名だけです。そして、名がある意味真名に当たります。」
「そう、変わっているのね。」
“変わっている”と言われたが、なんとも複雑な気分だ。

「じゃあ、真紅狼と呼ぶわね？」
「はい。俺は彗琳さんと呼びます。キミは「華琳よ」いいのか？神聖な名なんだろう？」
「貴方だって、真名も知らずに堂々と真名を教えたんだからこれで差し引きなしよ。」
「じゃあ、華琳でいいか？」
「ええ。よろしくね、真紅狼。」
「挨拶も終わったところで話を再開するわね。・・・いきなり失礼なことを言うのだけど真紅狼くん。貴方、家族いないでしょ？」
「えっ？」
「・・・・・！？」
真紅狼の目は見開き、「どうして分かった」という目でこちらを見

ていた。

「華琳が家族について話している時、貴方の目は羨ましそうに見ていたわ。そこから、考えると貴方は家族というものを知らないのでは？ってね。」

「・・・・・・・・・・・」

真紅狼くんは黙っていた。

「出来れば、貴方の口から話してくれたら有難いのだけど、ダメかしら？

もちろん、言いたくことの無いことは言わなくていいわ。・・・どう？」

「・・・・・ふぅ。いいですよ。お話します。」

「そう。有難う。」

「ただ・・・」

「どうしたの？」

「ただ、これを聞いた後が怖くて・・・」

「大丈夫よ。」

と優しい瞳で答えてあげた。

～彗琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～

「家族がいない」・・・・か。

俺はそんな目をしていたのか・・・。

親しいモノ程、未練を残しやすいっていうのかね？

吹っ切ったと思ったんだがなぁ。

「・・俺はどこにでもいる家庭に生まれました。父も母も心身ともに強くちょっとやそこらのことじゃ、負けないぐらいに。ですが、俺が四つのときに盗賊に殺されました。そのとき、両親はなんとか

俺だけ命がけで逃がしてくれました。ですが、そのあとの1年は親戚の者に次から次へとたらい回しにされ、挙句の果てには腫れ物扱いされたり、理不尽な暴力を受けた時もありました。・・・そして、六つの時に一人で生きるために“人”として生きるために、“殺す”練習を始めました。それから一年が経った頃に、その親戚の者を殺しました。そこから二年は力を付けながら、親戚の者を殺しまわりました。ささやかな復讐です。・・・これが全てです。」
まあ、時代と年、両親の死因は嘘だが、それ以外は事実だし。

「「・・・・・・・・・」」
二人は今の話を聞いてから一言も喋っていない。
やはり、拒絶するか。こんな話をすれば。
と自嘲気味に嗤っていると彗琳さんがいきなり抱きついてきた。

「!?」
え、ちょ、何故に!?

「辛かったでしょ?」
「・・・・・・・・・」
「泣きたいときに泣いた方が楽になるわよ?」
「・・・泣きたくても泣けないんですよ。俺。」
「えっ?」
「なんというか、両親が死んだときだって泣けなかった。多分俺は、“悲しい”という感情が欠落してんだと思います。俺は壊れてしまったんですよ。・・・辛いはずなのに泣けず、心の中に溜めていき、それが入りきれなくなり内側から破裂して修復不可能のところまで壊れた。」
「・・・ねぇ、貴方。私たちの家族にならない?」
「・・・話し聞いてました?」
「聞いていたわ、けど誰だって幸福を望んでもいいはずなのに貴方

にはそれがない。だからね、私たちが貴方に幸福を上げるわ。」
と拒否は許さないという目でこちらを見ていた。
最初は無視しようと思ったが、すごい見つめられていて居心地が悪くなったので諦めた。

「わかりましたよ。家族になります。」
「嬉しいわ～。では、改めてよろしくね。真紅狼？」
「はい。義母さん。」
「そう言えば年は九つって言ってたから、華琳の義兄ね」
「あー、そうですね。よろしくな、華琳？」
「はい、義兄さん。」
「不思議な気分だな。」
「兄弟はいなかったの？」
「生憎、一人っ子です。」
「そうなの。」
「おっと、いけない。忘れるところだった。」
「何を義兄さん？」
「まあ、挨拶をな。」
「挨拶？」
「・・・この度、本日から曹家の家族と成りました、蒼騎　真紅狼です。末長くよろしくお願いします。」
と礼儀正しく、正座をし、深く挨拶をした。
このやり取りに彗琳と華琳はポカンとしていた。

「真紅狼、それは？」
「俺の両親が教えた礼儀の一つです。「世話になる相手には必ず礼儀正しく挨拶をしろ」・・・と。」
「・・・いい両親だったのね。」
と言ってくれた。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

“ネギま”じゃなくて“真　恋姫夢想”に転生?!（後書き）

華琳の母親の名はオリジナルです。
スミマセン!!

最初は「星琳」にしようと思ったんですが、それだと星と被ってるのでこちらの「彗」に変えました。

ここで一つ報告があります。
私は『姓・名・字』が全く分からないんです。
分かっているのは『曹操』と真名の『華琳』とかはwikiに載っていたので分かるんですけど、正式の名は全然分かりませんので詳しく知ってる方いますか?

知っている人はメールしてください。
ついでに誤字脱字があれば、それも指摘してくれたら有難いです。

真紅狼、傷を負う（前書き）

スミマセン！
お待たせしました！
第三話をどうぞ！

真紅狼、傷を負う

～真紅狼ｓｉｄｅ～
家族になってから、四年が過ぎた。
時間圧縮されている？それはどこぞの魔女の技だ！
・・・スマン、なんか電波が入った。
四年が立ち、俺は１３になり、華琳は１０になった。
その間に、幼馴染というか曹家の部下をやっている者の娘ともいつの間にか遊ぶようになった。

「雅、お前もうちょいお淑やかに出来ないのかよ？」
「いいでしょ。真ちゃん、元気が一番だよ！」
「いや、まあそうだけどよ。・・華琳も何か言ってやってくれよ。」
「うーん。彼女の一番の売りだから私は何も言えないわ。」
「・・・味方がいない！！」
とこのような会話がほぼ毎日のように続いていた。
俺も飽きないな・・・。

しかし、この四年でだいぶ生活が変わった。
俺がこの世界の生活の仕方もあるが、一番の変わりは華琳だった。
華琳は曹家の後継ぎの為か、義母さんの家に来るのもまばらになっていき、俺と会うのも数カ月に二、三回だった。
まあ、それは仕方がないことなので別に気にしてない。
こんな感じなので、一度目の少年時代は裏の世界で過ごしているため二度目の少年時代ぐらい楽しく過ごしていきたいと思い、遊び相手を探していると見つかったわけだ。
彼女は義父の部下の娘さんらしく、家もこの近くにあるらしい。
ときどき、こちらの方までやってきて遊んでいたのを偶然にも出会った。

そこからは容易に想像できると思うが、仲良くなる→華琳が来た→紹介する→今に至るってわけだ。

しかし、今日は遊びに夢中だったのか森の奥まで入り込んでいた。
それが拙かった。次の瞬間、衝撃の出来事が来た。

ウオォォォォォ！！！

「「「！？」」」
餌を求めてやってきた巨大な熊が出てきた。
大の大人をゆうに超えるほどの大きさだった。
華琳たちは突然出てきた熊に怯えて動けていなかった。

「華琳！そこを動くなよ！！」
叫んだが恐怖のあまり聞こえていなかった。
雅は俺の近くに居たため、背に隠して守っていたが華琳は俺たちと離れていた為か、守れなかった。

「あ、ああ・・・」
華琳は必死に足に力を入れようとしている。
熊が一歩、また一歩と華琳に近づいていき残り１００ｍというところで華琳は恐怖に耐えられなくなり、熊に背を向けて逃げた。

「きゃあああああああああ！」
「止せ、華琳！今、熊に背を向けるな！ｋ「ドスンッ！」マズイ！！」
華琳が背を向けて逃げたのを見て、完全に熊の標的とされてしまった華琳を庇うように熊と華琳の間に割り込んだが、その時すでに樹木を一撃で薙ぎ倒す程の腕が振り降ろされていた。

ブォン！！
「グアァァ！！」
華琳を護るために背中で受けた。

「え？・・・に、義兄さん！」
「いい・か、華琳。一・・度しか言わな・いから・・よく聞け。熊・・・は背・を見せた・・奴を「っう。」本能的に・・・「ハァハァ」、襲う。だか・ら・・逃げる・・・時・・は背を見せ・ず、熊から意識・・・を逸らさず・・・・ゆっくり下がるんだ。分かったな？それと、・・・・・・・・・・・・れよ。」
「・・・・・（コクコク）」
「俺がアイツの・・・気を引く。その内に・・・逃げろ。」
「・・・・・（フルフル）！！」
「行くんだ！！雅！！華琳を連れて義父さんを呼んで来い！！」
雅は熊に背中を見せずに華琳のところまで来て、華琳の手を取ってゆっくりと下がっていった。
華琳は最後まで俺を置いて行きたくないらしく抵抗していたが、それも敢無く終わった。

「さて、華琳たちもいなくなったし、第二ラウンドといこうか。」
そう言って、右腕の肘から角が出現した。

「往くぞ！」
と言って熊の元に駆け寄った。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
私は熊に出会ってから、恐怖のあまり動けず義兄さんの声も聞こえてなかった。
頭を支配しているのは恐怖と死の二つのみだった。

そんなとき熊が私の方にゆっくりと歩み寄って来た。
怖い、怖い恐い怖い！！
私は怖さのあまり、熊に背を向けて逃げた。
義兄さんのところに。
熊は追ってきて、腕を振り上げていた。

私・・・・死ぬのかな？

と思って目を瞑った。だが、しかし一向に痛みは来ることがなく代わりに呻き声が聞こえた。

「ぐぅ！！」
恐る恐る目を開けてみると、義兄さんに護ってもらっていた。

「え？・・・・に、義兄さん！？」
何故？どうして義兄さんが？
そんな不思議な顔をしていたのか、義兄さんはこの場から去る方法と一言言った。

「・・それと、兄ってのは妹や弟を護るために先に生まれてくるんだ。俺は生まれてはいないが、お前の義兄だ。だからさ・・・護らせてくれよ。」
「・・・・（コクコク）」
そのあとは義兄さんが囮になるといい、置いていくことが出来なかったが先程言われたことを思い出し、ここは我慢して、雅と共に急いで家に帰った。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～雅ｓｉｄｅ～
真ちゃんが熊の一撃を受けた後、私は急いで華琳様に駆け寄り、手

を取った。

「行くんだ！！雅！！華琳を連れて義父さんを呼んで来い！！」

「・・・・」

私は無言で答えたが、真ちゃんが私を信じてくれてるということが分かり、私は華琳様の手を取って、その場を離れようとしたが華琳様はその場を離れたくないらしく最初は抵抗していたが、ほんの一瞬何かを思い出した後、抵抗を止め下がってくれた。

そして、私たちは急いで家まで帰り、父に「熊が出た。真ちゃんが私たちを逃がす為に足止めをしている。助けてください！！」と話したら急いで部下たちを呼び、救出と熊の討伐に向かった。

真ちゃんの場所まで案内したがそこで目にしたのは双方ともに倒れている姿だった。

～雅ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～

「往くぞ！」

俺たちは同時に走り出していたが、俺は『旋剄』で脚力を大幅に強化していた為、熊の繰り出す一撃よりも早く右腕を振るった。

ブォン！・・・ゴキッ！

ザシュッ！

「ぐぉ！？」

「グゥォォォォ！？」

当たった瞬間骨が折れる音がした。だが、熊も負けておらず当たる瞬間真紅狼の顔目掛けて前右腕が降り降ろされていた。

傷口からは血が飛び出ていて当たりに撒き散らかしていた。

「（これ以上“剄”の力を使うと出血多量で死ぬな、これは。あと

二回ぐらいだな。一つは移動用・・・あとは！）」
その後、両腕から剄を纏い始めた。

「剛力」・・・
ボゥ！

「徹破」・・・
キュゥン！

「咬牙！！」
ゴォウ！！

『旋剄』で熊の懐に潜り込み、そのまま腹に一発叩き込んだ。
『剛力徹破・咬牙』は外側から衝剄と徹し剄を同時に叩きこみ、内外同時破壊する技だ。
これが腹に決まり、熊は倒れた後動かなくなった。
同時に俺も力の出し過ぎと傷のせいで動かなくなった。
そのあと、遠くから声がしたが俺はすでに意識が途切れていた。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
義兄さんのところに辿り着いた時には熊は腹がへこんでおり、息絶えていた。
だけど、義兄さんも傷のせいで倒れており、急いで駆け寄った。

「義兄さん！！」
声をかけたが返事がなく、もっと大きな声をかけた。

「義兄さんっ！！！」
「・・・ぁ。」

「生きてる。まだ生きてる！！早く馬を」
そのあと、義兄さんは急いで村に戻り、偶然立ち寄っていた医者に治療され、命を取り留めた。
そのあと、私、雅、義兄さんは母上、父上に思いっきり怒られ、義兄さんなんかは目を覚ましたところを母上に顔を叩かれていた。

「真紅狼！！どれだけ心配させれば気が済むんですか！！」
「・・・・華琳達を護る為だったんだ。」
「それでもです！！貴方は私よりも先に死ぬつもりですか！！」
「・・・・・・・・・・・・。」
「・・・二度とこんな真似はしないでください。」
と母上は涙を浮かべながら、義兄さんを抱きしめていた。
そこに父上が声をかけた。

「・・・真紅狼、一発だ。」

ボコッ！

「ぐっ！」
「これだけだが、私の気持ちが分かるな？」
「・・・・・・ああ。」
「そうか。では帰るぞ。華琳。」
「はい、・・・父上。」
「・・・真紅狼。伝言だ。」
「・・・なんだ。」
「お前を治療してくれた医者の者からだ。」

【背中の傷と顔の傷は治らず、一生残るでしょう。】

「だそうだ。」

「・・・・・分かった。」
「義兄さん。では。」
「ああ。」
こうして、義兄さんは私たちを助けてくれた代わりに顔と背中に傷を負うこととなった。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～
その二ヶ月後、母上が病で亡くなった。

真紅狼、傷を負う（後書き）

新キャラの説明

姓：碧
名：羅
字：桜楼
真名：雅
年齢：９
武器：少し幅のある刀と小太刀
父親が曹家の部下をやっていて、真紅狼達を見つけ仲良くなり今に至る。

キャラ説明はこんなもんです。
というか今回の文ですでに登場する武器が分かったかもしれませんね。
顔に傷があり、かつＦＦの武器と言えば、アレしかねぇ。

母の死（前書き）

続けて投稿で～い。

母の死

～真紅狼ｓｉｄｅ～

今、曹家の親しい者だけ集めて葬儀を開いてる。
様々な人が来ていた。
生前、義母さんに世話になった者、義父さんの部下、近くの豪族などが来ていた。
その者たちは義母さんにお辞儀した後、義父さんそして華琳に礼をしたあと、俺に対してはひそひそと話していた。
内容は想像できた。

「奴を引き取ってから、彗琳さんの体調がおかしくなった」
「奴は疫病神だ」
「アイツが殺した」
のだと謂われの無い中傷だった。
が、別に何を言われようが俺は一向に構わなかった。
今から始まったわけではないのだ。この類は。
四年前から、謂われ続けてきたものであった。たまに義母さんの中傷もあったが、義母さんは「大丈夫ですよ」と優しい顔をしていた。
だから、せめて今日ぐらいは中傷も批判も無い一日を過ごして欲しかった。

だが、それをブチ壊すグズがいた。

地位がちょっと高い豪族だった。その豪族は以前義母さんに叱られたことがあってそれを根に持っていたらしい。義母さんが死んだことを良いことにたくさん暴言を吐いた。

「ようやく死んでくれたぜ、この女。」

「・・・・・・・・・・・・・・・」
「こいつが拾ったっていう、クソガキが不幸をもたらしてくれたおかげでよう。」
一気に視線が俺に集まるが別に構わない。問題はコイツをどうやって“殺す”かだ。

「だいたいこの女大した地位もないのに生意気なんだよ」
と言いたい放題だった。
義父さんも言い返せなかった。まだ曹家はこの豪族よりも若干位が低いためだ。
そこに華琳がその豪族の立ちふさがった。

「母上に謝れ！」
「あん？なんだクソガキ誰に口を聞いてるんだ！！」

バシッ！

「きゃあ！！」
華琳は豪族による裏拳で思いっきり壁にぶつかり、蹲っていた。
その後の行動でこの豪族の未来が決まった。

「子が子なら、母親も母親だな「ドガッ！」」
義母さんの棺に足蹴りを放った瞬間、俺はスイッチが入った。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
母上が死んだ。
皆は義兄さんのせいだと噂しているが、元より母上は身体が弱かったのを知っていた。だから、本来は義兄さんのせいではないのだ。
だけど、その内の一人の男が母上を侮辱し、故人に暴力を振るった。

それを私は許すことが出来なかった。

「母上に謝れ！」

「あん？なんだクソガキ誰に口を聞いてるんだ！！」

バシッ！

「きゃあ！！」

ひと思いにひっぱたいてやろうと思ったけど、敵わなかった。

さらに母上を侮辱した時、義兄さんが動いた。

・・・何かを纏って。

～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～

「・・・・・・・・・・・・」

ゆっくりと俺は歩み寄る。

片手には『七つ夜』と書かれた短刀を持ちながら・・・。

豪族は調子に乗っているせいか気が付かない、この場が一人の少年から溢れるほど滲み出る“死”のオーラで包み込まれていることを。

少年の顔を長く見てきた者しか・・・いや、それすら分からないかもしれない。

少年の眼が“真紅”から“蒼”に変わっていたことを。

「・・・・・殺す」

この呟きを聞きとれた者はどれほどいようか。

すでに真紅狼は姿を消していた。

気が付いた時には、豪族の目の前にいた。

「・・・斬る」

閃鞘・七夜

「・・・ハハッ・・ハ？」

ザシュ！

「ぐぁ！？」

そこからの光景は酷いものだった。簡単に人を殺せるほどの力があるのにそれをせず、豪族を嬲っていた。

「ぎゃあああ！！！」

「・・・・・・・・・」

もうすでに男の姿は満身創痍だった。

至る所に切り傷があり、全身から血が流れ出ていた。

しかも、片足のアキレス腱を切っており、まともに動けるものではないのに真紅狼の嬲りは止まらず、もっと加速していった。

・・・が、すでにコイツに興味が無くなったのか、仕留める気だった。

だが、そこに歯止めをかけたモノが居た。

「止めろ、真紅狼！」

「・・・・・・・・・」

「彗琳はそんなことを望んでいないハズだ！！」

「・・・・・・・・そんなこと俺には関係ない。俺が殺したいから殺す。ただそれだけだ。」

「・・・義兄さん」

「・・・・」

「義兄さん、もう止めてください。母上も怒ってくれたことには感謝してるはずです。」

「・・・・・・・（スッ」
真紅狼は構えてた短刀を降ろし、元に戻った。
「分かった・・・止めにしよう。・・・だが、ケジメは付けさせて貰う。」
素早く短刀を構え、痛みに呻いていた男の元に突っ込んだ。
「極彩と散れ・・・・」
たった一瞬だったが、その間の出来事は真紅狼本人しか知らない。
ただ、違ったとすれば、真紅狼の立ち位置だけだが、そのあと事が動き出す。
ゴトッ・・・・
「「「「「え？」」」」」
「ぎゃあああああああああ！！！！」
あまりの痛みにのたうちまわっている豪族。
「受け取れよ、アンタへの手向けの花だ」
真紅狼はそう言い残し、壁によっかかっていた。
「お、俺の腕がああああああ！！」
豪族の右腕は綺麗さっぱり両断されていた。
真紅狼は豪族とすれ違った際、肩の付け根からバッサリと「死の線」をなぞって斬ったのだ。
その腕は二度と使い物にならないように。
こうしたあと、豪族は急いで自分の土地に帰っていった。
騒然とした葬儀も終え、真紅狼は家に帰り、旅を出ることを決意し

た。

だが、その前に一週間ほどゴミ掃除に手間がかかり、出立するのに遅れ、華琳に発覚されることとなった。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

母の死（後書き）

ゴミ掃除とは言わなくても分かりますよね？
そして、真紅狼は旅に出ます。・・・ようやく。
前回は剄でしたが、今回は七夜インストールです。
さて、通り名をどうしようかな？

あ、しばらく真恋姫に集中するので他の三作品の投稿がまばらになりますが許してください。
勢いを殺したくないもので。

旅に行ってきます（前書き）

ヒャッハー！連日投稿だー。

旅に行ってきます

～真紅狼ｓｉｄｅ～
家の掃除も終え、義母さんに旅に出ると報告もして、いざ旅に出ようとしたら華琳にバレた。・・・チクショウ。
なんでも、雅が女の勘という物で分かったらしい。
こんなときに働くんじゃねーよ！！
そして、現在正座中・・・。

「義兄さん、そんな荷物持ってどこに行こうとしてたんですか！？」
「いや、あのな先週斬った豪族が死んだから、俺追われる身となったし、ほとぼりが冷めるまで、旅という名の諸侯を回ろうかと・・・」
「ダメです。」
「なぜ！？」
「そんな残念な顔をされても、無理なものは無理です。」
「雅、お前は俺の味方をしてくれるよな！？」
「ごめんね、真ちゃん。今、私華琳様の部下だから味方できないんだ。」
「くっ！だがしかし！！ここで華琳は夢を終わらせたくないだろう？」
「！！」
「俺が出ていかなければ、朝廷の官軍がやってくる。今の曹家じゃ太刀打ちは出来ねぇ。俺が各地を転々と移動していくうちに朝廷が手出しできないほどの勢力を持てばいいじゃないか。」
と打開策を持ちかける。
「・・ですが。」
「確かにそうですね。」

「雅！？」
「確かに真ちゃんのことも一理あります。どうでしょう？華琳様ここは一つ真ちゃんの案に乗ってみては？」
「・・・分かりました。だけど噂などが消えたら必ず戻ってきてください。」
「ああ、必ず戻ってくるよ。」
こうやってうまく道を切り開いた俺は荷物を持ち、この世界に来た時の姿で許昌を出た。
出る途中、二人の双子とすれ違ったがそれが曹操の部下である、夏侯惇と夏侯淵だとは真紅狼はまだ知らなかった。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
行ってしまった、義兄さん。
少しでも早く戻って欲しい為に戦力を増強することや政策を創りださなきゃ。
「雅。・・・頑張るわよ」
「そうですね。真ちゃんが少しでも早く戻ってこれるように頑張りましょう。」
とお互い意気投合した後、侍女から「謁見をお願いしてきた者が来た。」という知らせを受け、行った後なかなかの武だったので部下とした。
二人の名は夏侯惇と夏侯淵で真名は春蘭と秋蘭だった。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
旅に出た俺は、まずどこに行くかで迷っていた。
「西涼か呉か・・・。まあ、西涼から回って、そこからはどうにでもなるだろ。」

道中移動しながら、体を鍛えながら、野盗を潰したりして路銀を稼いでいた。
中には、技の実験台になってもらったりした。
極死とか極死とか極死とか。
しばらく経ち、西涼に行く途中で寄った陳留で鍛冶屋があったのでそこに寄ってみた。
この時代の武器の情報が欲しかったからだ。
曲刀から槍、斧、剣など色々あったが俺はそこでとんでもない物を見つけた。

「・・・なんで、これがこんなところにあるんだ・・・!?」
そこで見たのは銃と剣が複合されたモノだった。

「“ガンブレード”!!」

～真紅狼side out～

旅に行ってきます（後書き）

短いですが、次回はメッチャ長いです。・・・多分。

その武器の名は・・・（前書き）

今週は真恋姫週間です。
しかし、ちゃんと他の作品も創っていますので待っててください。

その武器の名は・・・

～真紅狼ｓｉｄｅ～

「“ガンブレード”！！」

奥の方に飾ってあった武器をよーく見たが、どこからどう見てもあの“ガンブレード”だった。

その発した言葉に興味を示した鍛冶屋の主が訪ねてきた。

「・・アンタ、この武器を知ってんのかい？」

「ああ、知ってる。コイツの正式名称も。」

「・・・・・・・なら、持ってみろ。」

「え？」

「アンタがコレを知ってるなら、持ったときに何かしら起こるはずだ。だから持ってみろ。」

と鍛冶屋の主はガンブレードを棚から取り出し、俺に渡してきた。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～親方ｓｉｄｅ～

今日も客が来ないから店を閉めようと思ったら、入口に小僧が立っていた。

普段なら追い返しているが、この小僧からは何かしら追い返すことが出来ず、むしろ「何かが起こる」とどこかで言っていた。

その小僧が奥の棚を見た瞬間、目を開き、その武器の名？なのか分からないが呟いていた。

「“がんぶれーど”」

と意味は分からなかったがどうやら知っていたみてぇだ。

ほんの出来心だった。「コイツにあの武器を持たせてみたい」とい

うのが頭の中で囁いた。

「アンタがコレを知ってるなら、持ったときに何かしら起こるはずだ。だから持ってみろ。」

そして、俺は小僧に武器?を渡した。

その後起きた光景は、死ぬまで忘れないものとなった。

～親方ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～

鍛冶屋の主から渡されて、持ってみた。

シャラン・・・

そんな音が鳴り響いた。

聞くだけで、緊張が高まった。

俺は、あの言葉を言ってみた。それで姿が変わるかどうかを知りたかったからだ。

「獅子の心！！」

その瞬間、ガンブレードは鈍い銀色の光沢から澄みきった蒼と変った。

「・・・やはりな」

「はは、これはすげぇ。・・・持っていけ。」

「は?」

「その武器を持って行け。代金はいらん。」

「・・・いいのか?」

「ああ、いいモン見れたしな。それを代金とさせて貰う。」

「感謝する。」

「良いってことよ。そうだ、お前さん名は？」
「・・蒼騎　真紅狼だ。」
「そんじゃ、真紅狼。また会えると良いな。」
「ああ。そうだな。」
そうして、俺はガンブレード『ライオンハート』を手に入れた。

夜、寝ていたら予想通り、ジイサンが呼び起こした。

「要件は分かっておるな？」
「ああ、『ライオンハート』のことだろ？」
「うむ。」
「なんでこの世界にあるんだよ？」
「知らんが、たまに別世界の物が流れてしまう時があるのじゃ。」
「それじゃ、コレもその一環ってことか？」
「そうじゃ、しかも流れついてしまった物は二度とその世界から持ちだすことは出来んのじゃ。」
「じゃあ、元の世界に戻せないってことか。」
「そうじゃ。」
元に戻せないって届くか分からんがＦＦ８の皆さん・・・スミマセン。
あ、でもアルティミシアからは感謝されるかもしれん。

「分かった、ジイサン。コレは俺が使わせてもらう。」
「お主の手にあれば安全じゃろ。」
「じゃ、帰るわ。」
「うむ。済まなかったの」
そうして話しを終えた俺は再び目を閉じた。

次の朝から俺はガンブレードを使った戦闘法を練習した。
なんせ、“フェイテッドサークル”を試しに撃ったところ凄まじい

轟音と衝撃が俺の体を襲った。
そのときの反動でまさか肩が外れるとは思わなかった。
そこから五年間みっちりとガンブレードの戦闘法を体に染み込ませていた。
さらには、スコールの服も再現した。
素材には一日一分だけだが、召喚獣の召喚になんとか成功出来た俺はちょっとずつだが体毛や鱗、牙などを分けてもらうことにした。
ただし、やった後の反動は凄まじく、その後はぶっ倒れていた。

キング・クリムゾン！！

五年後・・・
時間が飛んだ？
話すことなんか無いよ。修行の一点のみだし。
未だに役人は俺を追ってるらしい・・・ご苦労様です。
俺はガンブレード専用のホルスターを創り、格好もあの『スコール・レオンハート』のような格好をしてる。
だけど、その格好の生地などは全て召喚獣の一部を分けてもらい製作した。
腰の辺りの白い毛はユニコーンの毛を分けてもらい、ズボンやジャケットはバハムートの古い鱗やカブトレパスの皮、ゾーナ・シーカーのマントなどで創っているため、そこらへんの服よりも強靭でかつ丈夫な防具となってしまった。
冗談抜きに鎧がいらないレベルの性能だ。
さらには妖術なんか常に無効化する。

「さて、さすがにここの地に留まるのはもう危険だな。・・・最初の目的地、西涼に向かいますか。」

移動中・・・

目的地、西涼に着いたのは良かった。
だけど、街に行くには森を通らなくてはならなかったので横断していたら、いきなり横の茂みから槍を突き付けられた。
なんでも、この辺りに熊が出現するらしい。
熊かぁ、良い思い出はないな。

「で、俺を熊と間違えたことに対しての謝罪は？」
「だから、済まなかったと言ってるだろ！」
「お姉さま～、何をしてるんですか～？」
と茂みからさらにもう一人出てきた。

「蒲公英、コイツをどうにかしてくれ！！」
「え・・・。この人って確か～。・・・あ！」
と何かに気が付いたらしい。

「この人、曹家の人間じゃない？噂では顔に傷があり、目は真紅だって！」
「お、お前曹家の人間だったのか？！」
「一応名乗っとくか、蒼騎　真紅狼だ。」
「・・・蒲公英、“曹”とは一言も言ってないぞ？」
「アレ？おかしいな～？」
「確かに俺は曹家の人間だが、まだ“曹”の名を貰ってないんだよ。取り敢えず、どこか休めるところに西涼に連れて行ってくれないか？・・・目的地がそこなんで。」
「なら、ウチに来い。礼もする。」
「そうさせてもらおうかな」
ようやく西涼に着いた。
あー、長い旅だったな。

「お姉さま、謝んないの？」
「持て成しをすれば、許してくれるだろ。」
となんか俺に聞こえないようになんか喋っていた。
なんだろうね？
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

その武器の名は・・・（後書き）

イエィ！！ようやく出ました。
作者の持ちキャラはスコールです。

ビートファングが弱くなりましたが強いことには変わりないです。
ちなみに戦闘法はディシディアの戦闘法ですのでその辺は突っ込まないでください。

西涼で馬を貰う。（前書き）

今回は真紅狼専用の馬が貰えます。

西涼で馬を貰う。

～馬騰ｓｉｄｅ～
娘たちが帰って来たと思ったら、どうやら曹家の兄に刃を向けたらしい。
しかし、曹家の兄と言えば今、朝廷から追われている身ではなかったか？
その真偽も確かめるべく、私は会ってみた。

「どうも、私が西涼の領主をやっている、馬騰と申します。」
と軽く挨拶をした。
さあ、どう反応する？

「ご丁寧にどうも。俺は蒼騎　真紅狼だ。」
「『蒼騎』？・・・私の記憶が確かならば、貴方は『曹家』の人間のはずでは？」
「ああ。確かに俺は曹家の人間だが、“曹”の名を貰ってないんだよ。」
「・・・そうですか。もう一つ聞きたいのですがよろしいか？」
「どうぞ」
「貴方は今でも朝廷に追われているのでは？」
「まあ、な。・・・だから、こうして旅をしながら逃げているんじゃないか。」
なにやら言葉が途切れた。
訳ありだなこれは。

「出来れば、追われている理由をお話してくれませんか？」
「・・・・・・・・」
「重要な部分は省略しても構わないですよ。」

「簡略に言うと、近くを治めていた豪族に喧嘩売った。」
なにか含みのある言い方をしていたが、聞き出すのも失礼にあたると感じたので追及はしなかった。
～馬騰ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
ここで待っていてくれ。と言われたので待つことにした俺は辺りを見てみると馬が治めている土地というだけにあって。馬が多い。
そんなことを考えていると、領主が出てきた。
名は馬騰というらしく、あの二人の伯母に当たるらしい。
自己紹介をしてきたが、・・・これは試されてるな。
試されているということが分かったので、至って“普通”に対応した。
その後、まあ追われている理由を聞いてきたので、メッチャ簡単にまとめた。
一から説明するのも面倒なんで。
そんなやり取りを終えた後、馬騰がこんな提案をしてきた。

「して、真紅狼殿。一つ頼みがあるんですがよろしいか？」
「俺に出来ればですが。」
「なに、ウチの娘と手合せをお願いしたいんですよ。」
「手合せねぇ。・・・何考えてやがる。」
「・・・ウチの娘はいかんせん怖いもの知らずでしてね。世の中はもっと広いことを教えてやりたいんですよ。」
「なるほど。・・・やｒ「やってくれたら、曹家に西涼の馬を送るぞ？」・・ふむ。」
西涼の・・・。しかも、馬が育てた馬か。良い条件だな。

「まあ、いいだろう。受けるか。」
「そうかい。では今すぐにでも始めよう。」

と言って、俺に外に出るように促した。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～馬超ｓｉｄｅ～
馬騰伯母さまから呼び出された私は嫌だけど、呼びかけに応じた。

「伯母さま、来たよ。」
「よく来た。翠」
「翠？」
「おや、まだ真名を教えていなかったのかい？」
「教える必要がないだろ。伯母さま。それで要件というのは。」
「そうだった。翠、真紅狼と手合せをしな。」
「「はい？」」
私とついてきた蒲公英は口を揃えて、疑問形？で答えた。

「なんでアタシがコイツと戦わなければならないんだよ！」
「それは「俺がお前もよりも強いからだ」だそうだ。」
ちょっと、「カチンッ！」と来た。
お前がアタシよりも強い？
武器も持たないでいい度胸じゃないか。

「武器も持ってない奴に負けないよ、アタシは！！」
「吼えることだけなら誰でもできるぞ？」
とさらに挑発してきた。

「泣いても許さないからな」
「お前こそ泣くなよ？」
と真紅狼の言葉が発し終えたあと、アタシは動いた。
～馬超ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～馬岱ｓｉｄｅ～
私は、今お姉様と真紅狼の試合を見ているが、一方的だった。
最初は、武器も持たない真紅狼なんか一瞬でやられる。と思っていたが、実際は違った。
お姉様の槍は一度も真紅狼を捉える事が出来ず、全て避けられるか弾かれるのどちらかだった。
しかも、弾いた後は軽い反撃までしていた。

「お姉様が・・・傷モノにされている。」
「してねぇよ！？」
「そ、そうだぞ！！蒲公英。そして、いい加減武器を持て、真紅狼！！」
「武器を持ったら、一瞬で終わるぞ？」
「そう簡単にやられるわけない・・！？」
気が付いたら、お姉様の首の部分に刀があった。

「なっ？！」
「これで、分かったろ？」
「ア、アタシは認めない！こんなこと認めない！！」
「なら、全力で打ち込んでみろ。」
「なに？」
「全力で打ち込んでみろ。って言ったんだよ。自分の力がどれほどの力なのか教えてやる。」
「な、舐めるなーー！！」
と、感情的になったお姉様は槍を振り降ろした。全力で。

活剄衝剄混合変化　　金剛剄

槍が真紅狼さんにぶつかる瞬間、金色の何かが真紅狼さんを包み、お姉様の槍を弾き返しながら吹き飛ばした。

「これで分かったか？武器を持っても持たなくても、お前に勝てるということと同時にお前は井の中の蛙だったことを」
「・・・・・・（泣）」
あ、お姉様がちょっと泣いてる。
～馬岱ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
「なんで泣くんだよ。」
「う、うるしゃい！・・・うう、グスッ」
「ホントですよ、お姉様。」
「蒲公英もうるさい」
「さっきのなんだい？」
と伯母さまが聞いてきている。
あ、私も興味がある。

「あー、内緒で。」
「どうしてもかい？」
「まあ、教えてもいいんですけど、“氣”を使えなきゃ使うことが出来ないんで。」
「なら、仕方ないか。」
「で、報酬の方なんですが・・・」
「ああ、今度持っていこう。そうだアンタ一緒に行かないかい？」
「あー、このあと呉の方にも行きたいんでちょっと。」
「そうかい。」
「俺の名を出してくれれば、多分曹操に伝わると思うんで。」
「もし、伝わらないようでしたら、碧羅に伝えてくれ。」
「碧羅ね。」
「あ、俺専用に馬を一頭欲しいんだが、いいか？」
「それなら・・・見て行きなよ。」

移動中・・・

馬舎に来た俺たちは、目の前に広がるのは馬だらけ。スゲェ数だな。見回す中に一頭だけ群れから離れている、漆黒の馬がいた。

「馬騰、あの馬は？」

「ああ、アレかい？あの馬は少し自己意識が強くてね。他の馬とも交わらないし、あたしたちも扱いに困っていてね。近づこうとすると、追い返すんだ。」

「へえ・・・」

と言って俺は真っ直ぐそいつの元に向かった。

「お、おい危ないぞ！？」

「・・・・・・・・」

辿り着いた俺は、その馬に触れようとした。

「よ、止せ・・・？」

その馬は暴れず、むしろ、何かを見極めているような感じがした。

その後、その馬は俺に対して頭を垂らした。

「馬騰！俺はコイツにするぜ！」

「ああ、持って行きな。」

「お前の名は“黒鷹”だ。そして俺は真紅狼だ。よろしく頼むぜ？」

「ブルルルル・・・」

「おう。頼むぜ。さて、そろそろ、呉に行こうかね。」

「なら、私たちと途中まで一緒に行こうか。」

「はいよ。」

俺は黒鷹に乗り、馬騰ともに途中まで一緒に旅をし、呉へ行く分かれ道で別れた。

「じゃ、俺はこっちだから・・・」
「ああ、また今度逢おうじゃないか。」
と言ってお互い向かう目的地の道に入った。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

別れた後、数週間かけて、呉に着いたんだが・・・。
また、武器を向けられた。
またかよ！！

西涼で馬を貰う。（後書き）

次回は呉ですよ

真紅狼、孫策に会う。（前書き）

限界まで・・・飛ばすぜ！！

真紅狼、孫策に会う。

～真紅狼ｓｉｄｅ～
どうも、現在絶賛刃物を突き付けられている最中だ。
なんで、こう突きつけられるんだろうね？
顔の傷か？そうなのか？
それはどうでもよくて、突きつけている相手は褐色肌の女性だ。
しかも、服装から見て、それなりに地位が高そうだ。
なんというか、下手打ったらメンドイことになりそうだ。
どう対応しようかな？
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～？？？ｓｉｄｅ～
冥琳と二人で出掛けていたら、いかにも賊っぽい男に出会った。

「貴方、ここで何をしてるの？」
「いや、各地を見て回る旅をしていると言うのかなぁ？」
「はっきりしないわねぇ。」
「まあ、各地を旅しているしがない旅行者だよ。」
「じゃあ、その旅行者に聞くわ、貴方ここがどこか知ってるの？」
「呉だろ？孫策が治めている。」
「そうよ。旅行者さん・・・いや、“真紅の殺人鬼”？」
「・・・！！その名を知ってるってことは刺客、もしくは孫家に近い者か。」
と言って、彼が纏っているオーラが変わった。

「ここで貴方を倒せば、名声を得られるわ・・・ね！」
言い終わると同時に私は“南海覇王”を抜き、そのまま袈裟斬りをした。

だけど、その攻撃は失敗した。
振り降ろしている途中で私の武器は空中で止まり動かなくなり、そのまま“真紅の殺人鬼”は私の武器を素手で掴んで奪い取り、私を蹴り飛ばした。

「きゃあ！！」
「いけね、つい無意識にやっちまった。」
「アレが無意識なんて悉く、規格外ね。貴方」
「おい、大丈夫か？」
「あら、敵かもしれない相手を心配するなんて余裕ね？」
「余裕もへったくれもあるか、得物が無い相手を痛めつける趣味はねぇ。しかも相手が女性ならなおさらだ。で、アンタは何がしたいんだ？」
「それはもちろん貴方を倒して、名声を・・「ゴツン！」いったーい！」
小競り合いで気が付かなかったがいつの間にか話している女性の後ろに黒髪でメガネをかけた女性が叩いていた。

「いったい何をしている、雪連。」

～？？？side　out～

～？？？side～
二人で先代の墓参りに行った後、帰り際雪連とはぐれてしまった。
いや、雪連が何かを発見したみたいでその元に向かった。
私はゆっくりと向かった。
その場に着いたときちょうど、雪連が振り降ろす瞬間だった。
振り降ろした得物は空中で止まると言う不可解な現象が起こり、しかも素手で
得物を奪い取りそのまま蹴り飛ばしていた。

あり得ない光景を見た私は一瞬、呆けたがすぐに意識を取り戻した。
というか、あの顔の傷・・・。どこかの探し人の情報と似ていなかったか？
どこだっけ？

・・・・・・・・・！
あ、思い出した。曹操が出した探し人の情報だ。

「いったい何をしている、雪連。」
～？？？ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
「いったい何をしている、雪連。」
と雪連と呼ばれた女性の頭を叩き、小競り合いを止めてくれた。

「いったーい！何するのよ、冥琳！！」
「身内がとんだ御無礼を。つかの事を聞きますが、曹家の兄である。蒼騎殿ではありませんか？」
「何故、俺の名を？」
「曹家が探し人の情報を各地に回している故・・・」
「あー、マズイな。」
「貴方、曹家の人間だったの？！」
「おう。まだ“曹”の名は貰っていないがな。」
「まさか“真紅の殺人鬼”が曹家の長男だったとはな。」
「色々あったんだよ。」
「詳しく聞きたいものですね。その色々（・・）の部分を」
「止めとけ、お前らには一生縁のない話だ。」
と俺は冥琳と呼ばれた女性の探りをかわしていく。
そんなとき、近くで足音がした。

「雪連と冥琳って言ったか？そこの二人、ちょいとこっちに来い。」
「「？？？」」
「団体さんのお出ましだ。」
と言った後、山賊団と思われる集団が２，３０人出てきた。

「へへっ、見ろよ。孫策と周瑜、それに曹家の長男がいるぜ！」
「しかも、その内一人は朝廷から追われていて、生け捕りにすればたっぷりと報奨金が出る。」
「いや、待て。曹家の長男は監禁して曹操を強請ろうぜ。たくさん払ってくれるぜ、絶対。」
「そうだな。そうしようぜ！」
「おい、お前ら！！男は生け捕りだ！！」
と戦力差で勝っているという妄想に囚われている山賊どもはすでに勝っている様子だった。

「オイ、お前。」
「あ？」
「てめえだよ。そこのちょび髭。」
「なんだと？」
「誰を強請るって？」
「ああ？曹操に決まってんだろ。」
「そうか・・・なら何されても文句はいえねぇよな？」
「寝言は寝て言え、ガキが！！やっちまえ！！」
「「「ウオォォ！！」」」
「お前ら、孫策と周瑜だったのか。で、どっちがどっち？」
「そんなこと聞いてる場合じゃないでしょ！？」
「あ、大丈夫だから。」
「は？」
「一応警告しといてやるか。山賊どもそこから先一歩でも踏み出し

た瞬間、バラバラ死体が出来上がるから死にたくなかったら止めときな。」
「どうしましょう？頭。」
「はったりに決まってんだろ。いけお前ら！」
「忠告はしたから恨むなよ？あ、孫策と周瑜はもうちょい俺に寄って。巻き込みかねないから。」
言った後、二人は近づいてきた。
体の一部が俺に当たっているんだが、スゲェボリュームだな、オイ。
・・・ゴホンッ！
俺たちの周りに即座に鋼糸を展開し、山賊の頭っぽい奴以外を残して、残りは裁断した。

「なぁ・・・！？」
「あーあ、だから言ったのに。バカだねぇ。」
さっきまで２，３０人居たはずの山賊団は一瞬で一人まで減っていた。
この現状を見ていた孫策と周瑜は口が塞がっていない。
まあ、こんなの見せたらそうなるか。
さて、残した雑魚は極死の練習台になってもらうか。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～孫策ｓｉｄｅ～
「寄ってきて」と言われたので私と冥琳は蒼騎に寄った。
その後、一斉に襲いかかって来た山賊どもが裁断され、細切れとなって消えた。
信じられなかった、この光景が。
もし、これが私に向けられていたら私はこの地に立って居られなかった。
そんなことを考えると体が震えてきた。
蒼騎の横顔を見ると嗤っていた。

その表情に私は“恐怖”を覚えそうになった。
冥琳を見てみると、冥琳も同じようだ。

「（ねぇ、冥琳。）」
「（なんだ、雪連。）」
「（私、絶対蒼騎の前で、曹操の陰口を言わないことにするわ。まだ死にたくないし）」
「（奇遇だな、私も同じことを考えていた。）」
そう二人は心に決めた。
～孫策ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
「さて、残りはアンタ一人。」
「舐めてんじゃねぇ！！」
「まあ、待て。アンタの処刑方法はすでに決まってるんだ。そんなに慌てなくてもちゃんとお仲間のところに逝けるさ。」
「処刑」という言葉に反応して、逃げだしていた。

「逃がさねぇよ。」
懐から取り出した短刀を上に向けて、言い放った。

『極死――――――　七夜！！』

短刀を投げつけ、逃げていく山賊は短刀を弾いて余裕を取り戻した時、すでに俺はコイツの頭の上に居た。
そして、そのまま首を力の限り捩った。

ゴキッ！

と何かが折れる音がした後、その男は死んだ。

男が倒れると同時に地面に着地し、七夜が言うセリフを言った。

「救われないな・・・・・オレも、オマエも」

本当に救われないな。

「今の何？」

「ん？」

「今の何って聞いてるの。」

「ああ、暗殺者の業かな。」

「貴方、暗殺者だったの？」

「色々と技術を持っているんだよ、俺は。だから、様々な戦いが出来るんだよ。」

「さっきの業、教えて欲しんだけど。」

「無理。」

「そんなバッサリと言わないでよ。」

「人間の限界以上の動きをしてんだ。無理に決まってんだろ。」

「え～」

「え～。じゃない、取り合えず腹が減ったから。メシ喰わせて。」

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

真紅狼、孫策に会う。（後書き）

年はすでに１７歳を超えている為、鋼糸は解禁です。
ガンブレードは魔法がまだ解禁していない為、使用制限がかかっています。

天の御遣いの噂（前書き）

ようやく天の御遣いの噂に関われた。
通り名“真紅の殺人鬼”は本来「殺人鬼」の部分が「死神」でしたが、それにしちゃうと「ラグナ・ザ・ブラッドエッジ」になってしまうので止めました。

天の御遣いの噂

～真紅狼ｓｉｄｅ～
山賊どもを始末した代わりに飯を食わせてもらった後、紹介したいから来てくれと言われたので、取り敢えず王の間に向かった。

「来たぞ、孫策。」
王の間に来てみると、うん、呉の将達がそろっていたんだよ。

「改めて紹介するわ。姓は孫、名は策、字は伯符、真名は雪蓮よ」
「真名まで預けるなら、私も預けよう。姓は周、名は瑜、字は公謹、真名は冥琳だ。」
「策殿が少し前に会った男に真名を預けるほどの男か。なら儂も預けよう。
姓は黄、名は蓋、字が公覆、真名は祭じゃ。よろしく頼む。」
「私は真名はちょっと。姓は周、名は泰、字は幼平です。」
「・・・・姓は甘、名は寧、字が興覇だ。」
「わ、私は姓が呂、名は蒙、字が子明です。」
「私は姓が陸、名が遜、字は伯言です～。」
「・・・・・・・・」
「蓮華も挨拶しなさいよ～。」
「・・・姓が孫、名は権、字が仲謀だ。」
呉の有名な武将が勢ぞろいだね。これは。
というか、さっきから睨んでくる者が二人に興味を持つ者が一人、怖がっている者とマイペースの奴が一人か。
取り敢えず、俺も名乗るか。

「俺の名は蒼騎　真紅狼だ。姓と名はねぇ。字が蒼騎で、真名は真紅狼だ。

・・・それと、七年前まで“真紅の殺人鬼”って呼ばれていた。」
と意を決して言ってみたところ、反応する者が三人出た。
「なっ！」
「・・・（スッ」
「ほう？お主があの・・」
一人はすでに臨戦態勢か。悪くない、良い反応だ。

「待て。俺は孫家に飯を奢ってもらったんだ。殺しはしねぇよ。」
「信じられるか！！姉様、なんでこんな奴を招き入れたんですか！？」
「いや、だってねぇ～。山賊達から助けてもらったし～。」
「礼の一つや二つしておかなければ、孫家の名が下がりますよ？蓮華様。」
「ですが！！」
「安心しろ。どうせ長く留まるつもりはない。あと少し休ませてもらった後出ていくよ。」
「あら、そうなの？」
「待ってる奴がいるしな。というか、これ以上放置していたら何されるか分かんねぇし。」
「残念だ、このまま留まってくれたら、“天の御遣い”になってもらおうと思ったんだが・・・」
何になってもらおうだって？

「“天の御遣い”ってなに？」
「お主知らんのか？」
「知らん。長い間体鍛えていたから、全然情報を聞いてなかった。」
「管輅という自称占い師が占った予言がコレだ。」

『黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流れ星。流星は天より御遣いつれて現れ、乱世を鎮静す』

「とな。」
と詳しく教えてくれる冥琳。
「俺じゃねぇだろ、それ。だいたい俺は流星から来たか？」
“外史”とは言え、メルヘン過ぎんだろ。この予言。
「言いたいことは分かる。だが、これにはまだ続きがあってな。」
「はい？」
『・・・またもう一人の御遣いは“死を語る魔眼”を持ち、乱世に隠れた闇を“殺”しせしめん。しかし、その者人には非ず。』
「だって。」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
オイオイ、その管輅って奴なんちゅうピンポイントな予言してくれるんだ。
メッチャ当たってんぞ。
「まあ、噂だからね。噂の真偽を確かめようと各国が躍起になっているわけよ。」
「で、もう一人の御遣いが俺じゃないかって。か？」
「そうよ～」
「そんな“死を語る魔眼”なんていう大層な物を持っちゃいないよ。（持ってるけどよ）」
「だが、そんなときにかつて朝廷を騒がせた“真紅の殺人鬼”に出会ったら、そう思うだろう？」
「思わない方がおかしいな。しかし、天の御遣いって言っても“善”と“悪”が混じってんな。」
「どういうこと？」

「前者は“英雄”と呼ばれるだろうが、後者は間違いなく批判されんぞ。そいつが“人”ならよかったが、“人”じゃ無いんだぜ？乱世を治めてくれた奴が“人”では無いということに民衆は反発するだろうな。」
「・・・！！」
「確かに・・・」
このことに気が付いたのは雪連と冥琳の二人だった。

「さて、挨拶も終わったし、巷の噂も聞けたし、そろそろ帰らねぇと。世話になったな。孫ｓ・・いや、雪連に冥琳」
「真名で呼ぶんだ？」
「教えてもらったのに呼ばない方が失礼だろ？」
「確かにね、縁が合ったらまた逢いましょう、真紅狼。」
「おう。じゃあ、失礼する。」
と言って、俺はここに来る前に貰った、路銀を袋に入れ、黒鷹を馬舎から出し呉を後にした。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～雪連ｓｉｄｅ～
「行っちゃったわね、真紅狼」
「ああ。」
「でも、なんかどこかで逢える気がするのよね。別な形で。」
「そうか。それよりも御遣いの噂の時の表情が気になるな。」
「どうしたの、冥琳？」
「噂で“死を語る魔眼”と私が言ったとき、僅かに表情がぶれていたんだ。ほんの僅かだがな。・・・アレはなにかしら知っている顔だったな。」
「・・・今度逢ったときに聞きましょうよ。」
「そうしよう。では、雪連仕事をしてもらうぞ。」
「え～～～！！」

～雪連ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

真紅狼が出た後、王宮に悲鳴が響き渡った・・・

天の御遣いの噂（後書き）

次から、黄巾党編に入ります。
遅いのか早いのか、わかんねぇな。
次話は出来次第投稿します。

最近この頃思うこと、ジェクトみたいな親父が欲しいなと思う自分。

あーあ、出会っちまったか。（前書き）

頑張って、本日二話目

あーあ、出会っちまったか。

～真紅狼ｓｉｄｅ～
俺は呉を出て、華琳のところに帰る道中、賊？っぽいやつらに襲われた。
いや、曖昧だなと言われても、だって頭に黄色い布を被ってたんだぜ？
誰だって疑う。賊かどうかを。
裁断した後、情報を集めようと近くの街に向かい、集めたところ最近各地を騒がしている者たちを“黄巾党”というらしい。
ちなみに華琳の情報も聞いた。
今は陳留の勅史をやっているらしい。出世したなぁ。
なるほど、この前襲ってきたのは“黄巾党”というのか、ただのバカ集団だと思ってしまった。
陳留まであと少しのところで、ちかくで戦闘音がしていたのでそちらに行ってみると少女一人で５，６０人の黄巾党を相手していた。

「やあああ！！」
と掛け声を出しながら、八人は軽く吹っ飛んでいた。
だが、さすがに多勢に無勢だったのが無謀だったのか、立てなくなっていた。
俺は急いでその子の元に向かった。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～？？？ｓｉｄｅ～
また、黄色い布を被った集団が村を襲ってきた。
ボクしか村には戦える人がいないし、官軍は信用できない。
だけど、連日襲ってきてさすがに辛い。
そんなことを考えてしまったのがいけなかったのか、一気に疲労が

襲ってきた。
そのタイミングを狙われたのか武器を振り降ろしていた。
あ、ボク死んじゃうのかな？

「「ガシッ！」ハイちょっと待った。」
「「へ？」」
ボクを助けたくれたのは真紅の眼で黒と白の服を着た男だった。
～？？？ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
義兄さんが旅に出てからもう八年が経ち、私は陳留の勅史になった。
雅も将軍として立派になり、部下からも慕われている。
最近巷で噂されている“天の御遣い”の噂とかがあるけど、そんなことより義兄さんを見たという情報はないのかしら？
そこに兵から報告が来た。

「申し上げます！この近くにある村に黄巾党が出現しました！」
「なら、春蘭に行かせて討伐しなさい。部隊の編成は任せるわ。」
「はっ！！失礼します。」
「・・・華琳様。」
「何、桂花？」
「ここ最近元気が無いように見えるのですが・・・」
「あら、そう見えた？」
「はい。何か悩みごとですか？私でよろしければ聞きますが？」
「まあ、ちょっと、探している人がいるんだけどね。なかなか見つからないのよ」
「探している人ですか・・・。どのような方なんですか？」
「私のあｎ「失礼します！夏侯惇将軍から早馬が来ました！」・・・要件は？」
「討伐に向かったところ、討伐されておりなんでも討伐した者は七

年前、朝廷を騒がした“真紅の殺人鬼”だそうです！」
「「！？」」
“真紅の殺人鬼”・・・それは義兄の異名。義兄さんがこの近くに居る。

「今すぐ、私と碧羅将軍の出撃準備をしなさい！「はっ！」・・・桂花はここに残って、黄巾党の情報を集めなさい。」
「分かりました。」
「では、行ってくるわ。」
義兄さん・・・八年も放っておいたツケは大きいわよ。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
「なんだテメェは？」
「お前ら、恥ずかしくないの？大の大人が大勢で女の子に襲うなんて、人として最低だぞ？」
「うるせぇ！お前もやってやる！死ねぇ！！」
「気の短い奴だな。」
襲いかかってきた奴の武器を弾き落とした後、足払いでこけさせ、その後、そいつの足を掴み、ジャイアントスイングで集団の方に吹き飛ばした。
さすがに人が飛んでくるとは思っておらず、ボーリングのピンのように次々と巻き込まれながら倒れていった。
・・・よっしゃ！ストライク！！
それは置いといて、倒れた隙を狙い、鋼糸を展開している右手を地面に叩きつけた。

「往くぞ。・・・オォォ！」
倒れている黄巾党の周りを地中から何本もの鋼糸が囲んでいく。いつの間にか黄巾党の連中は見えなくなっていた。

『繰弦曲・崩落』

その檻は次第に小さくなっていき、中の連中を衝剄で轢き潰した。
終わった後には肉片も骨も残っておらず、あるのは血の海だけだった。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～???ｓｉｄｅ～

助けてくれた男の人の力は凄かった。
万人が押し掛けても、絶対に勝てないほどの力だった。
それに、最後の技なんか凄いから恐怖に変わっていた。
一瞬で人が消えた。

「・・・大丈夫か？」
いきなり声を掛けられた。
どう反応していいか分からない。

「へぁ、あ？」
「・・・大丈夫か？」
「あ、はい。大丈夫です。・・・ボクを殺すんですか？」
「何故、助けたのに殺さなきゃならないんだ？」
「だって、あんなのを見たら、「殺される」と思って。」
「あの技を使うのは相手が外道共だけだ。・・・特に他人を平気で貶す奴ぐらいさ。」
「じゃあ、殺さないんですか？」
「殺さねぇよ。取り敢えず一難去ったし、休んでいい？」
「え、でも、さっきの奴らがまた来たら・・・」
「大丈夫だ。この村の周りを俺の武器が檻を張ってあるから、入ろうとすれば一瞬で分かる。」

「それでも一応、ボクは門のところで見張ってます。」
「気を張り過ぎて、倒れるなよ？」
「はい。あ、助けて貰ったんでボクの真名をお兄さんに預けます。姓は許、名は？、字は仲康、真名が季衣です。」
「おう。俺は蒼騎　真紅狼だ。真名は真紅狼だ。」
「真紅狼お兄さんでいいですか？」
「あ、お兄さんは付けるのか。」
「はい。付けます。」

ドドドドドドド・・・・・・・・

「すまん、ここに黄巾党が現れたという情報を受けてきたのだが黄巾党はどこだ？」
「もう、追い払ったというか倒しましたが？」
～許？ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～夏侯惇ｓｉｄｅ～
黄巾党が出現したという報せから目的の村に着いた。
だが、周りを見回しても黄巾党はいなかった。
居るのは、一人の女の子と男。
こいつらが追い払ったとは思えない。

「誰がやった。」
「俺」
「貴様がやったのか？」
「おう。バッサリと」
「お兄さん。バッサリとは違うんじゃ・・・」
「バッサリでいいだろ？説明したって理解できねぇと思うし。」
「お兄さんがよければ、ボクはいいですけど、この人が納得するか・・・」

「貴様、私をバカにしてるのか？」
「どう捉えるかは、ご自由に。」
「よほど、死にたいようだな。貴様！！」
と私は七星餓狼に手をかけ、奴の首を目掛けて剣を振った。

ガキンッ！

「おいおい、危ないな。」
「そう言う貴様はちゃんと防いでいるじゃないか。・・・見慣れぬ剣だな。」
「俺専用の武器だ。」
「構えろ。いくぞ！「止め！！」華琳様！？」
打ち合いが始まる瞬間、我らの主である華琳様からの制止だった。
～夏侯惇ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
突然の制止を求める声が聞き覚えのあるというか、華琳の声だった。
ヤバイ、実にヤバイ。
だが、まだ気付かれていない。
今なら、逃げられる。
と思ったときすでに遅かった。

「どこに行くのかしら？真紅狼？」
凄いオーラがひしひしとこっちに伝わってくる。
・・・スゴイ痛い。
逃げようと後ろに逃れようとしたら、目の前に雅が往く手を防いだ。
逃げられねぇー！！

「どこにいくのかな？真ちゃん？」
「真ちゃん、言うな。雅」

「真紅狼、前を向きなさい。」
「・・・・ハイ」

バシンッ！

家族からのビンタはとてつもなく痛い。
想いとかが籠っているからだな。目には若干涙があった。

「心配したんですよ。義兄さん」
「すまなかった。」
「おかえりなさい。」
「ああ、ただいま。」
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

あーあ、出会っちまったか。（後書き）

多分今日はここまでだと思います。

技の説明

『繰弦曲・崩落』

鋼糸で編んだ網に相手を閉じ込め、その鋼糸すべてから内向きに衝剄を放つ

真紅狼、曹家の名を貰う。（前書き）

これから投稿するのは、土日に投稿できなかった分です。
スミマセン。

真紅狼、曹家の名を貰う。

～真紅狼ｓｉｄｅ～
季衣が曹操軍に入り、俺たちは陳留に帰っていたんだが、帰るまでが大変だったんだよ。

「華琳、もうちょい離れてくれない？」
「嫌です。」
とさっきからこの調子だ。
ちなみに黒鷹の上だ。
前に華琳、その後ろに俺という図になっている。
そして、さっきから殺気を俺に向けてんのが春蘭と呼ばれていた女性だ。なんつーか、迫力のある眼力なんだよ。

「華琳様、少しいいですか？」
と後ろから物静かな女性が聞いてきた。

「何、秋蘭？」
「そちらの男は“真紅の殺人鬼”と呼ばれている男ですが、知り合いなんですか？」
「秋蘭、その異名を二度と言わないことよ。私にも限度という物があるわ。」
「は、はい！申し訳ありません。」
「とはいえ、この人を知りたがっているのは事実ね。この人は私の義兄よ。」
「「「・・・・・・・・・・・・・・・」」」
状況が読み込めないのかしばらく沈黙が続いた。
この後が簡単に予想できるって素晴らしいね。

「華琳、耳をふさいでろ。」
「何故ですか？」
「衝撃波が飛んでくるから。」
「？？？」
頭を傾けながらも、耳をふさいだ華琳。
その後、予想通り衝撃波（ソニックブーム）が飛んで来た。

「「「えええええええ～～～～～！？」」」

キーンッ！！

「ぐぉぉ！！」
本当にこれ兵器並みの威力だな。
華琳は無事なようで。

「え、えっと、それは本当ですか？」
「私が嘘を言ったことがある？」
「ないですが、それでも・・・」
「信じられない？」
「「はい」」
と姉妹は同時に返事をする。

「まあ、そうなるわな」
「だけど、事実よ。受け入れなさい。」
「雅も知っていたのか？」
「私と華琳様と真ちゃんは幼馴染なんだ！だから知ってるよ、春蘭。」
と平然という雅。

「義兄さん、一応紹介してください。」

「はいよ。俺の名は蒼騎　真紅狼だ。さっきも言った通り、華琳の義兄だがまだ曹家の名は貰っていない。」
「貰ってない？とはどういうことですか？」
秋蘭が不思議そうに聞いてくる。

「なんというか貰う前に、出奔したからだな。」
「そうですね。」
「そうだよねぇ～」
と三人はしみじみと頷く。

「で、そちら方の名は？」
「申し遅れました、私は姓が夏侯、名は淵、字が妙才、真名は秋蘭と申します。」
「そして、私は姓が夏侯、名は惇、字は元譲、真名が春蘭だ。」
「俺の事は真紅狼で構わないぞ。春蘭と秋蘭は俺がなぜ“真紅の殺人鬼”って呼ばれているか、知ってるだろ？」
「ええ、確か近くの豪族を皆殺しした、と。」
「そ、ちょっと殺さなきゃならない理由が出来てね。それで追われるようになって、貰う前に出たというわけさ。」
「義兄さんには謝らなくてはならないですね。」
「なんでだよ？」
「義兄さんは曹家を代表して殺しに行ったんですよ？それに父上が言ってました。」

『真紅狼がいかなかったら、俺が殺しに行っていた。それをアイツに全てを投げつけてしまった。すまない』

「と言ってました。」
「別に気にしてないのに。」
「それでもです。すみませんでした」

と華琳が謝っていた。
この光景に春蘭たちは驚いていた。

この状況を打開させるために、頭を撫でてやった。
「ひゃっ！？」
「俺がいいって言ったんだから、それぐらいの意思は聞いてくれよ。」
そういいながら、俺たちは陳留に着いた。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～桂花ｓｉｄｅ～
私の主、華琳様が帰って来た。
集めた情報を報告しようと向かったら、あの華琳様が男に抱きついていたのを見て、気を失いそうになった。

「誰よ、あの男。あんなに華琳様と親しそうに！！」
そしたら、向こう側から、秋蘭が歩いてきた。

「秋蘭！」
「桂花か、なんだ？」
「あの男、何者よ？」
「華琳様の兄上らしいぞ。」
「・・・は？」
「信じられないかもしれないが、事実だ。」
「華琳様が言ったの？」
「ああ、しかも華琳様の父上も知っているらしい。」
「他には誰が知っていたの？」
「雅と曹家の侍女たちや兵たち、特に中堅兵と古参兵は知っていたらしい。」
「それで、先程から侍女たちが騒いでいたのね。」

「では、私は訓練場に向かわなければならないからな。」
「なんで訓練場に行くの？」
「姉者が手合せしたいと言ってな。それならば、将全員集まるようにと華琳様がな。」
・・・これはチャンスかもしれないわね。その男には悪いけど、兄としての威厳を失ってもらうわ。

「見学しに私も行くわ。」
「めずらしいな、お前が興味を出すなんて。」
「私は曹操軍の軍師よ？仲間の実力をみなければ、策を練ることも出来ないでしょ？」
「ふむ、確かに一理あるな。では行こうか。」
「ええ。」
～桂花ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
黒鷹を馬舎に入れてきた後、一時的にあてがわれた部屋を使っていた。
一週間以内には用意すると言っていたが、豪華な造りになってそうだな。
俺は取り敢えず、着替えることにした。
スコールの姿から、リンテンスの姿にズボンを穿いた後、上を着替えようとしたとき誰かが入って来た。
見てみると、華琳だったが背中の傷を見てからどこか気まずそうな表情をしていた。

「あっ・・・」
「ん？・・・華琳か。どうした？」
「いえ、訓練場まで一緒に行こうと思ったんですが・・・。」
「背中の傷を見て動けなくなった。と？」

「・・・（コクン」
背中には三本の爪痕がくっきりと残っている。
ったく、気にするなって何度も言ってんのになんで気にするかね？
華琳のせいじゃないのに。

「何度も言うが、華琳。気にするな。」
「でも・・・」
「アレだ、この傷は男の勲章だと思ってくれよ。」
「・・・分かりました。それで兄さんの曹の名なんですが・・」
「うん？貰うの？」
「兄さんは曹家の長男ですよ？自覚を持ってください。」
「善処します。」
「曹真ということになります。」
「曹真ね。分かった。これからは曹真と名乗るか。あ、でも“蒼騎”の名は捨てないからな？」
「いいですよ。では行きましょうか？」
「おう。」
「あ、今日の夕餉のときに旅の内容教えてください。」
「はいはい。」
八年の内容を思い出しながら、訓練場に向かった。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

真紅狼、曹家の名を貰う。（後書き）

はい。曹家の名を貰いました。今まで華琳は真紅狼を「義兄さん」と呼んでいましたが、曹家の名を貰った為これからは「兄さん」と呼びます。

そして、華琳は二人っきりの時は甘えます。

第三者がいる場合は真紅狼と呼び捨てになりますが・・・

手合せ（前書き）

ドンドン投稿するぜ！

手合せ

～真紅狼ｓｉｄｅ～
「で、そちらの方は？」
「私は姓が荀、名は？、字が文若と申します。軍師をやってます。」
「なるほど、俺の実力を測りに来たな？あ、曹真だ、真名は真紅狼だ。」
「ええ、仲間の実力が分からなければ、策も練れませんから。」
「丁寧な言葉は使わなくてもいいぞ？普通に喋っても構わないし。」
「・・・・そういうことよ。分かった？」
「はいよ。でだ、最初は誰だ？」
「私だ。」
と前に出てきたのは春蘭だった。

「んじゃ、やりますか。」
「・・・武器はどこにある？」
「ここにあるじゃん。」
と言ってアクセサリーを見せてやった。

「兄さん、これは？」
「アクセサリーだな。」
「なんだそれは？」
「これは、超刀のアクセサリーだな。」
腰の辺りに五つある内の一つを選んだ。

「私をバカにしてるのか？」
「一応、刃が無い武器を選んだつもりなんだけど？」
「後悔するなよ？」
「そっちがな。」

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～春蘭ｓｉｄｅ～
訓練場に集まるようにしてもらった私は真紅狼が持っていた武器に興味があった。
だが、実際に戦う武器は装飾された貴金属だった。
私をバカにしてるとしか思えない。
華琳様には悪いが、叩きのめさせて貰う。
愛用の武器、『七星餓狼』を構えた。

「双方、準備はよろしいわね？」
「おう。」
「はい。」
「では、始め！！」
～春蘭ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～桂花ｓｉｄｅ～
二人が武器の話し合いでこの男の武器はなんと、装飾された貴金属。
この男、頭おかしいんじゃないかしら？
でも、これで華琳様はこの男を幻滅するはず！
私が手を出す必要がなくなって有難いわ。

そんなことを考えていた私だったが、この男が武器を出した瞬間、
一瞬で全てが瓦解した。
～桂花ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
「始め！！」

開始と同時に春蘭は大振りで武器を振りまわしていた。

右へ左へと、それを軽やかに避けていく。

「くそ、ちょこまかと！！」

「大振り過ぎだから、当たるわけないだろ。」

「それなら・・・これはどうだ！！」

上から袈裟切りを避けた。が、それは計算済みだったのか地面にぶつかる前で止まり、そのまま手首を捻り、素早く振り上げてきた。

「・・！こいつは驚いた！」

「そう言っておきながらちゃんと避けてる癖に」

「だが、今のは見事だ。」

「武器も出してない奴に言われても、嬉しくはない。」

「なら、武器を出してやるよ。」

といい、俺はある武器をイメージし、叫んだ。

「『絢麗豪壮』！！」

肩に担いだ状態で出てきたのは『天運転如』だった。

「さて、お望み通り武器を出してやったぜ？」

「何だそれは？」

「コイツが俺の武器の一つ『超刀・朱槍』だ。」

皆、この武器を見て驚いている。

それはそうだ。

なんせ、コイツの特徴は人の丈よりも遥かに大きいことだった。

「あ、華琳達もうちょい下がって。」

「はい？」

「そこ当たるかもしれないから。」

「・・・この辺でいい？」

「そこから、前に出るなよ？」

ガラゴロガラ・・・

「これだぁ！！」
とおみくじを引いた。
そこには「大吉」と書かれた太い棒が出てきた。

「お、大吉だ！！」
「何か関係あるのか？」
「大吉だと、このように太さが吉よりも若干太く、敵をふっ飛ばしやすいんだよ。吉は標準的な大きさだ。そして、凶は延べ棒みたいで敵もふっ飛ばしにくいんだ。まあ、これは運が絡む武器だな。」
「そうなのか・・・それはいいとして、そんなに間合いを開けて大丈夫か？」
「大丈夫だ、問題無い」
「そこからの間合いｊｙ・・・！？」

ブンッ！

「間合いが何だって？」
「クッ！！」
春蘭は侮っていた。
真紅狼がこの武器を充分に扱えないことを。
だが、それは間違いだった。
一歩も移動せずに真紅狼の得物は春蘭を捉えていた。
春蘭は一度距離を離そうとするが、真紅狼の攻撃は止まらずそのまま追撃した。
横薙ぎに一閃した後、上から叩きつけ、そのまま右と左と掬い上げるように武器を振りまわし、最後に大きく振り降ろしていた。

一撃ごとに地形が変わるほどの地面が砕かれていく様子を見て、春蘭はだんだん焦りの表情が出てきた。

「（なんとか、懐に潜り込めれば！！）」

と思っていた矢先に真紅狼に隙が出来た。

この隙を利用して、春蘭は一気に距離を詰めたがその隙はワザと開けられたものだった。

「隙を見つけたのはいいが、残念だ。」

『押しの一手』

真紅狼は『天運転如』押すように持ち代え、逆に春蘭に突撃し勢いよく上にかち上げた。

「ぐっ！！」

「はぁ！せいっ！お終い！！」

空中に打ち上げた後、武器を右に左に振った後、地面に叩き落とした。

「ぐぁぁぁ！！」

「こんなもんかな。」

と地面に降りた俺は武器を地面に刺し、それに背を預けるようによりかかった。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～

試合が始まり、最初は春蘭が押していた。

だけども、兄さんが武器を取り出した瞬間、一気に流れが変わった。

最初に私たちを驚かせたのが武器の大きさだった。

兄さんの背よりも大きい武器を軽々と振りまわしていた。
次に驚いたのが、間合いだった。
武器には各種にあった間合いが存在するが、あの武器には間合いの範囲があり得なかった。
普通の槍の長さの二倍近い間合いが兄さんの武器の間合いだった。
最後に、その威力だった。
一撃一撃が地面を砕くほどの威力。
私たちは、戦闘が終わった後には何も言えなかった。

「こんなもんかな。」
と言って兄さんは武器に寄りかかっていた。

「春蘭・・・大丈夫？」
「あ、はい。しばらくすれば立てます。」
「どうだ、俺の実力は？」
「何というか予想外です。」
桂花に至っては、「あり得ない光景を見た。」という表情をしながら、頭に手を当てていた。
桂花。わかるわ、その気持ち。

「まあ、まだ色々あるけどな。」
「・・・まだあるんですか？！」
「あと、これが四つほど」
「・・・もう何も言いません。」
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
そんな風に呆れるなよ。華琳。

「ま、追々見せるさ。ところで春蘭。」

「なんだ？」
「お前の武器どこかしら調子が悪いだろ？」
「・・・気付いたのか？」
「なんというか、刃を護るような戦いをしてたし。それに秋蘭も。」
「私もですか？」
「さっき、チラッと見たんだが弓の弦、擦り切れているだろ？」
「よく分かりましたね。」
「俺が新しく新調しとこうか？形はそのままで鍛え直すと言う形で。」
「「いいんですか？」」
「構わねぇぞ？」
なにやら二人で話し合っていた。
そこに、華琳が入って来た。

「兄さん、私も鍛え直して欲しいんですが・・・」
「武器は何？」
「鎌です。」
「分かった。他に欲しいものは？」
「無いです」
「真ちゃん！私はねぇ、幅のある太刀と小太刀が欲しい！！」
「雅は一から作らなきゃダメだから、時間がかかるが構わないか？」
「いいよ」
そんな話が終わったのか二人は「「お願いします」」と言ってきた。
「他に何かいるか？」と聞いたら、春蘭は手甲を、秋蘭は胸当てを頼んできた。

「荀？と季衣もなにか欲しい物はあるか？」
「私はいらないわ」
「ボクは手袋を」
「分かった、創っておこう。」

「動いたら、腹減ったな。メシ食いに行こうぜ、華琳。」
「そうですね、行きましょう。」
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

手合せ（後書き）

真紅狼が持つＢＡＳＡＲＡ２の武将の一つ。
前田慶次の力が登場。

『天運転如』の呼び名は「てんうんころぶがごとく」です。
これから、ＢＡＳＡＲＡの武将のスタイルを出すときは四文字熟語で表します。

管理者と会う。（前書き）

無理矢理ねじ込んだ。
時系列がおかしいとか言わないで・・・。

そして華琳達の武器が凶化されました。

字が間違っている？
いえ、おかしくありませんよ？

管理者と会う。

～真紅狼ｓｉｄｅ～

手合せからすでに一週間が過ぎた。

今、俺は頼まれている武具を創るために、陳留から少し離れた山に居る。

何故なら、素材を出すのに召喚獣を見られてはならないからだ。

山に籠ってもう二週間が経ち、頼まれた武具などはすでに出来上がり、鍛え直さないといけない武器も直したのだが、ちょっと困ったことになった。

ぶっちゃけた話、強化しすぎた。

華琳の鎌『絶』は『ディアボロス』の角を溶かして使用しているが、凄い威圧感のある武器になってしまった。

春蘭、秋蘭の武器には、『フェンリル』の素材がたくさん使われている。

春蘭の『七星餓狼』にはフェンリルの牙を活かした武器となっている。

薄い鉄の扉などは両断出来るし、地面は抉れる。

手甲にはミドガルズオルムの鱗を使用し、武器を使わなくても矢などを弾くことが出来、頑丈で分厚い為、剣や薙刀を防ぐことも可能となった。

秋蘭は弓の弦を強化をした。

弦の部分は『ビスマルク』の髭を使用している。

ビスマルクの髭は強靭で擦り切れることもない。

胸当てにはフェンリルの体毛と『セイレーン』の薄地を使用してい

る。
フェンリルの体毛は見た目の割に堅い為、矢などで撃たれても、体に刺さることは無い。ほんのちょっと痛い程度。そしてセイレーンの薄地は破れることが無い。

雅は幅のある太刀と小太刀
これは『ギルガメッシュ』を呼び、武器コレクターの力を借りた。
天叢雲（アマノムラクモ）を貰い、それと『リヴァイアサン』の鰭や鱗を分けてもらい創った。
天叢雲と『バハムート』の角を一緒に溶かし再び打ち直した。
斬れ味が落ちることのない武器となった。
小太刀は海竜神（リヴァイアサン）の水の加護が働き、敵を切っても返り血が付かないものとなった。

季衣の手袋は『ケーツハリー』の羽根を使い、手袋をしているだけで持っている物の重さを感じなくなった。軽くて丈夫。

・・・・・うん、やり過ぎた。
だが、出来てしまったモノは仕方がない為、持って帰ることにした。
その途中で、凄いモノを見た。
某ツナギを着た男を絶対撃退できるレベルだった。
いや、ホントに。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～？？？ｓｉｄｅ～
この外史のご主人様を探す為に降り立ち、各地を回っていたら前の方から巨大な力の波動を感じ行ってみたところ、この外史では存在しないハズの男を見つけた。

「貴様、何者だ？」
「・・・曹真だ。」
「嘘をつけ、お主この外史に最初からいないだろう？」
「ここが外史って知ってると言うことはアンタら、神様に近いなにかか？」
「我々は“管理者”じゃ。」
「“管理者”？」
「文字通りのことじゃ。外史というのは消えやすいのでな。それを護りながら見護っていく者たちじゃ。・・・お主はなんじゃ？」
ふーん？大変なんだなぁ。管理者も。

「俺は“転生者”だ。」
「“転生者”？」
「そうだ。俺の世界の神様が間違って俺を殺したらしくてね、死んだあと神の領域に連れて来られて、「間違って殺してしまったから、転生させてやる」と言われて転生したはずだったんだけどな・・。」
「どうしたのじゃ？」
「いや、なんか時空の法則が乱れて、この世界に間違ってきてしまったんだよ。」
「それじゃ、お主は元は人間か？」
「人間だ。まあ、転生先が人外とか魔法とかいっぱいあるみたいだったから、「能力を授けるぞ」と言っててしかも「遠慮はいらない」と言ってたから結構言ったな。」
「なるほど、それでお主からこの外史にはない力の波動を感じたのじゃな。」
「・・・ねぇ、アンタ」
「どうしたのじゃ、貂蝉？」
「アンタもしかして・・・“死を語る魔眼”持ってんじゃない？」
「あー、持ってるよ。」
こやつが、自称占い師、管輅が言っていた予言のもう一人の御遣い

か。

「というか、いい加減名前を教えておくか。本名は蒼騎　真紅狼だ。そっちの名は？」
「ワシが卑弥呼、そしてこやつが貂蝉じゃ。」
「よろしくねん、真紅狼。」
「おう。こんどはこっちから質問していいか？」
「お主の事情は分かったから、いいぞ。」
「お前らのような管理者がこの外史に降り立ったことは何かあるの？」
「私たちは“ご主人様”を探してるのよん♪」
「“ご主人様”？」
「そうです。この外史の要という方でしょうか、この方が現れない限り、何時まで経っても前に進まず、停滞するだけなのです。」
「なるほどなー」
「“ご主人様”はすでにこの外史に来ていますが、まだゆっくりとしかうごいておらんのじゃ。・・・多分、お主が会うとしたら、黄巾党討伐時に会うかもしれんな。」
黄巾党か・・・。そろそろだな。

「名前って分かる？」
「北郷一刀って名よ。」
「ところで、お主はご主人様に味方するのか？」
「さあ、するのかねぇ。俺は魏の人間だからな、分からねぇな。」
「もし、対峙するようであるならどうする？」
「まあ、俺の『護るべきモノ』を壊さない限りは逆らう事が危険だということをチラつかせて追い返すさ。」
「そうか・・・。そうなって欲しいものじゃな」
「またなんか情報が出てきたら、よこしてくれ。」
「うむ。ではさらばじゃ。」

「おう。」
そうして、ワシたちは再びご主人様を探し始めた。
その後、ご主人様が劉備のところに居るのを発見した。
～卑弥呼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
北郷一刀ねぇ。
さてはて、どんな奴なんだろうか、楽しみだな。
黄巾党は最近過激になっているし、その内出会えるだろ、戦場で。
さて、待っている妹たちの元に帰りますか。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

管理者と会う。（後書き）

武器の凶化ですが、独自設定なのでツッコまないでください。
もし、「この人の装備を強化して欲しい」という要望があれば、意見をください。

さて、次は、楽進達の登場です。・・・多分。

楽進、于禁、李典に会う。（前書き）

これが終わったら、ちょっと日常を書くので一刀達の出会いはもう少しお持ちください。

楽進、于禁、李典に会う。

～真紅狼ｓｉｄｅ～
出来あがった武具を特殊な袋に入れ、陳留に向けて帰ってた時、近くの集落で黄巾党の連中が襲っていた。
助けようと思って向かったら、三人の女性が追い払っていた。
だが、黄巾党の一人が何か叫びながら逃げていった。

「おい、大丈夫か？」
「貴方は？」
「・・・真紅狼だ。」
「真紅狼さんですか。」
「今の連中は黄巾党だよな？」
「ええ、連日襲撃してきてます。」
「じゃあ、お前らは毎日ここで追い払ってんのか？」
「最初は、陳留に行くために少し休むために寄ったのですが、黄巾党の連中が攻めてきて、それからずっとここに留まってます。」
「陳留に目的があるのか？」
「曹操に仕えようと思いまして・・・」
「・・・へぇ。そう言えばさっき一人の男が叫んでいたが何言ってたの？」
「なんでも「明日、この近くに居る仲間を呼んで攻めてやる！！」と言ってました。」
「ふむ・・・俺が一人で相手をしよう。」
「無茶です！！」
「曹操に仕える前に死ぬかもしれないんだ。嫌だろ？」
「確かにそうですが・・・でも一人は無理だよ。」
「そんなに無理だと思うなら、明日集落の入り口付近で見ていればいい。この世とは思えない光景を見せてやるよ。」

三人の女性は半信半疑になっていたが、納得してくれた。
さて、使う武器は・・・ガンブレードと“カーネフェル”で対応できるだろ。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～楽進ｓｉｄｅ～
毎日のように黄巾党の連中が攻めてきて、表情には出てないが私たちはかなり疲れていた。
そこに旅の者が来た。
真紅狼さんは旅の者だと言っていた。
私たちの事情を話すと「一人で相手をする」と言いだした。
私は正気の沙汰ではないと思い、必死に止めたが「大丈夫だ」と押し切られてしまった。

「あ、そうでした。私たちの名を言っておきます。私は楽進です。」
「私が、于禁だよ♪」
「最後にあたしが李典や！よろしくな、真紅狼。」
「おう。んじゃ、寝てろ。見張りは俺がやっとくから。」
「ですが・・・」
「寝　て　ろ！！」
「「「・・・ハイ」」」
一瞬、般若の顔が出ていたが、気のせいと信じたい。
そんなことを思いながら、私たちは落ち着いて寝た。
～楽進ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

次の日・・・

～真紅狼ｓｉｄｅ～
昼よりの時刻に連中は来た。
俺は少し集落から離れて、一人のんびりとガンブレードを肩に担ぎ

ながら待っていたとき、向こうから「ズドドド・・！！」という地響きが聞こえてきた。

「お前、誰だ？」
「あの集落に雇われた用心棒さ。」
「あの集落にはガキが三人居たはずだが？」
「彼女たちなら、集落を護ってるよ。俺の役目はアンタ等をここで潰すことだ。」
「お前、正気か？たった一人で、俺達を潰すってか？」
「ああ。」
そう答えた瞬間、黄巾党の連中は全員笑っていた。

「馬鹿じゃねぇか、お前。行くぞテメェラ！！」
「「「ウオオオオオォォォォ！！」」」
「本当にバカだよな。・・・お前らがな。」
向かってくる黄巾党の連中は真紅狼の行動が分からなかった。
なんせ、武器を上に向けていたのである。
「どうせ虚勢だ。」と思いそのまま進軍を続けていたが、次の出来事により全てが止まった。

『ブラスティングゾーン』！！

俺はガンブレードを高く上げ、『ブラスティングゾーン』と言った。
次の瞬間、魔力で生成した光りの刃が黄巾党を真っ二つに両断した。
「2，30人しか殺せなかったか、縦に並んだところを狙った方が効率がいいな。」
とのんきなことを呟いていた。
黄巾党の連中は今の出来事が理解できてなかったらしく行動が出来ていなかった。

次はコレだな。

『リボルバードライヴ』！！

ガンブレードを前に突き出し、闘気の力で突っ込んだ。
一人、また一人と体が削れていき、黄巾党の中心に着いた。

「一点突破に使えるな、この技は。」
ようやく、連中は俺が危険だと分かり、一斉に襲いかかって来た。
だが、わざと中心に来たことまでは連中も知らなかった。

『フェイテッドサークル』！！

俺を軸にしてガンブレードを回し、そのとき撒かれた火薬を発火させた。

ゴゴンッ！！
グシャ！！
ビチャ！！

先程撒いた火薬の辺りから、円の形をしたクレーターができ、地面には無数の死体と血の跡が出来ていた。
なんせ、まともに食らえば、膝から上が弾け飛んでるんだからなぁ。
酷くても、上半身が無い状態だ。
この光景を見た、残りの黄巾党は蜘蛛の子のように逃げて行きはじめた。
その中で一人だけ、立ち向かってくる者が居た。
開始前に喋っていたリーダーらしき男だった。

「うおおぉぉぉ！！」

「へぇ、逃げないのか。」
「テメェを倒せば、どうにでもなる！！」
「なら、相手をしてやろう。・・・それでは“カーネフェル”をお見せしよう」
「絵札(トランプ)で戦うなんて聞いたことがねぇぞ！！」
「・・・余所見してていいのかな？」
そう言ったときには男の前まで潜り込み、右下、左下へとカードを振り降ろし、切り刻んだ。
「がぁ！！」
「逃げていれば、まだ生きられたものを・・・」

ＳＵＰＥＲＣＡＮＣＥＬ！！！

その隙をついて、乱舞し男の体全体を切り刻んだ。
「ぐあああ！！」
「見せてやるよ、カーネフェルの真髄を！！」
そう言った俺は高速で突進し、みぞおちを叩き込みその場に動けなくなった男に対し、５２枚のカードが絶え続けなくなく襲った。
「それでは、ごきげんよう・・・」
と片手を上に上げながら、帰っていった。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～李典ｓｉｄｅ～
なんやアレ？
いきなり、剣っぽいモノから光が出てきたと思ったら、今度は剣っぽいのを突き出しながら突進してさらに連中を削った。
極め付けが最後の技や。

大きな爆音と衝撃が辺り一帯に影響を出し、あの兄ちゃんが回転した円の部分以外は地面が抉れ、黄巾党の連中の死体が築き上げられていた。

「ありえへんやろ」
そう、目の前の光景はあり得なかった。
そして、宣言通り、この世とは思えない光景だった。
辺りは血の海でちらほらと見えるのは連中の吹き飛んだ体の一部が無残な姿で転がっていた。
その中心に立つのは、黒と白の服を着た男。
まるで獅子のように紅い地面を歩く。

「紅き獅子やな・・・」
「・・・なに？真桜ちゃん？」
「いや、あの兄ちゃん。まるで獅子のように血の海を歩いているから紅い獅子のように見えてな。」
沙和は兄ちゃんの方を見ながら、頷いてくれた。

「・・・確かにそう見えるね。あっちの方から誰か来るよ！」
「また黄巾党の連中か？」
と凪も来た。

「済まない、ここに黄巾党が出現したという報せを聞いて駆けつけた。
私は、曹操様の部下、夏侯淵という。・・・黄巾党はどこに？」
「黄巾党なら先程、全滅しましたが？」
「全滅・・？貴方達がやったのか？」
「違うの。真紅狼さんという方が一人でやったの。」
「・・・真紅狼殿がここに居るのか？」
殿？なんや、あの兄ちゃん。この姉ちゃんと知り合いか、なんかか？

「ちょうど、あそこに居ますが？」
「確かに・・・真紅狼殿だ。」
振り向いたときには、血の海を渡り終えた『紅き獅子』はこっちに気が付いた瞬間、気まずそうな表情をしていた。
なんか、あったんかな？

「よう、戻ったぜ。・・！？」
「・・・探しましたよ、真紅狼殿？」
「・・・なんで、ここにいるんだよ。秋蘭」
～李典ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

楽進、于禁、李典に会う。（後書き）

別の異名を作りましたが、どうでしょう？
もし、アイディアがあるなら意見だけでも構わないので待ってます。

逃げるなら・・いや、もう「遅いわよ?」・・・ヤッベΣ（゜Д゜;）（前書き

タイトルがふざけてると思いますが、最初に浮かびました。
ということで採用した。

逃げるなら・・いや、もう「遅いわよ?」・・・ヤッベΣ（゜д゜;）

～真紅狼side～
戦闘が終わり、集落に帰って来たとたん、知り合いがいた。

「・・・なんで、ここにいるんだよ。秋蘭」
「黄巾党の報せを聞いて、来ました。」
「もう倒したぞ?」
「真紅狼殿が居るならそうなりますね。」
「ところで、話しは変わるんだが、ここに来たのは秋蘭お前一人か?」
「・・・・・・・・・はい。」
今間があったな。

「本当の事を言えや、今間あったろ!」
「・・・ここに来てます。」
「誰が?」
「華琳様と雅が来てます。」
「・・・マジ?」
「あの・・・“マジ”というのは?」
「あ?ああ、“マジ”というのは簡単に言えば、“本当”って意味だ。」
「ええ。もうすぐ来ますよ。」
ヤバイなぁ、実にヤバイなぁ。一月も空けているから、説教が飛んできそうだ。

「悪い秋蘭。俺は逃げる。武具は陳留に着いてからで・・・「あ」」
「どこに行く気よ?真紅狼?」
「逃げるなら・・・いやもう「遅いわよ?」・・・デスヨネー。」

後ろから声がした。
うん、後ろを振り向いたら、俺の命が終わりかねないのだよ。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
秋蘭の後を追ったら、兄さんが居たので逃げられない為に後ろからそっと近づいた。

「真紅狼、こっちを向きなさい。」
「・・・ハイ」
「私の言いたいことが分かるわね？」
「実に分かるんで、帰ってからｈ・・・「ダメ」デス（ｒｙ」
「武具を作るのに2，3週間もらうといったのはわかるわ。でもそれがどうして一月も時間がかかるのかしら？」
「いや、完成はしたんだけどね？試し切りで時間食った後、この集落が黄巾党に襲われているのを見て、討伐してたらこうなったとしか言えないんですけど。」
「で、私たちの武具は出来ているんでしょうね？」
「それはバッチリ。・・・・（やり過ぎたけど）」
袋から取り出している兄さん。
なにやら、一つ一つの武器から何かの力を感じるようね。

「ほい、華琳。」
「・・あまり変わったところありませんね。」
「形状は変えずに、強度と切れ味を追求した。・・・あと、それ、殺気とかに耐性が無い奴に向けると気を失うから。」
「へぇ、じゃあ、それなりに力がありそうな奴とそうじゃない奴の見極められるわね。」
「実力を隠している奴とかには有効だな。」
「いいわね。貰っておくわ。」

～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～秋蘭ｓｉｄｅ～

華琳様と真紅狼殿のやり取りはいつ見ても面白い。
頼んでいた武具の引き渡しか。
私の武具も取りに行かなければ。

「秋蘭！」
「真紅狼殿、ちょうど取りに行こうと思ったんですよ。」
「ちょっと待ってろ。確か弓と胸当てだよな？」
「はい。」
「えーっと、・・・あった。」
「はい、これ。あと胸当てな。」
と言って、変わっていない弓と見たことの無い胸当てを渡された。

「弓は変わっておりませんな。」
「弦だけ変えた。・・・そうだな、軽く射ってみな。あの木辺りに。」
と指差した場所は普通の弓では絶対届かない距離だった。

「無理ですよ。」
「百聞は一見に如かず。やってから言えよ。」
と無理矢理射ることになった。
私は、矢を弦にかけ目一杯引こうとしたとき真紅狼殿から言われた。

「あ、そんなに引かなくてもいいぞ。普通でいい、それで届く。」
そんな眉唾なことを言われたので信じられなかったが、やってみたところ、凄まじい速さであの木に刺さった。
私は何も言えなくなっていた。
胸当ては白銀の体毛に薄い布で覆われていた。

「真紅狼殿、これは？」
「その体毛結構、強度があってさ、矢で撃たれてもほんのちょっと痛い程度なんだよね。」
「有難うございます、真紅狼殿。」
「秋蘭、そのなんだ“殿”は付けるな。」
「ですが・・・」
「なんつーか、落ち着かないからさ、呼び捨てで構わねぇよ。」
「じゃあ、真紅狼。」
「おう！それでいい。」
～秋蘭ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～雅ｓｉｄｅ～
秋蘭の武器引き渡しが終わった後、こっちに真ちゃんがこっちに来た。

「真ちゃん、私の武器はどんな感じ？」
「ほい、これが基本的にメインになる刀だな。」
「これ、すごく澄みきってるし、持つだけで力が湧いてくるね。」
「そうか・・・（そりゃ、ババムートの角が使用されているからな。）で、こっちが小太刀だ。」
「抜いてもいい？」
「いいぞ。」
私は鞘に入っていた小太刀を抜くと、綺麗な小太刀だった。

「綺麗・・・」
「その小太刀敵を切っても、返り血が付いても落ちるようになってるから。」
「じゃあ、基本的に砥がなくても、いいってこと？」
「まあ、月に一回は砥いでくれ。あと、使ったら必ず鞘に戻すこと

だな。それさえ守ってくれ。」
「わかったよ。真ちゃん。」
「真ちゃん、言うな。」
「ヤダ。」
「このやろう。」
「真ちゃん。この武器はなんて言うの？」
名前を付けなきゃ、せっかくもらったんだし。

「まだ名前はないな。」
「じゃあ、私が付けてもいい？」
「別にいいがあまり酷い名ｈ・・・「桜狼刀だね！」聞けよ」
「もしかして、一文字ずつ取るつもりかよ？」
「うん。そうだよ。よくわかったね！！」
「是非、止めてくれ。」
「ヤーダー。」
「・・もういいッス。」
と何かを諦めた真ちゃん。・・・悪いね☆
～雅ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
取り敢えず、ここに居るもの達だけだが渡した。
どうやら、気にいってくれたようだ。
創ったかいがあるもんだ。
っと、いけない。あの三人を推薦しておくか。

「曹操来てくれ。」
「何？真紅狼。」
「あの集落にいる義勇軍の三人を推薦したいんだが・・・」
「あの三人を？」
「なかなかいけるぞ。連日襲ってくる黄巾党を三人で捌いてたらし

い。」
「たった三人で・・・。わかったわ、宮仕えさせるわ。」
「その内、一人は“気”が使えるらしい。」
「“気”？」
「おう。“気”。」
「面白いわね。」
「だろう？」
「正式に採用させるわ。取り敢えず真紅狼の部下として働いてもらうわ」
「俺も部下持ちか。ところで、俺はどの位置の役職に就くんだ？」
「将軍よ。」
「・・・・え？」
「もう一度言うは・・・将軍よ」
「マジかよ。いや、むしろ将軍の方がいいのか？」
と呟く俺。
華琳が不思議そうにこちらを見てくる。

「なによ？」
「曹操、俺部隊を創ろう思うんだが、いいか？」
「部隊？」
「俺が総隊長で五つの部隊を創ろう思っている。武器の種類に分けて作るつもりだ。」
「詳しい内容は、陳留で。」
「そうしよう。いい加減帰らないと春蘭達が暴れそうだ。」
「そうね。いや、もう暴れているかもよ？」
「やだなぁ。」
と苦笑いする。

「では全員帰るわよ！！そこの三人はついてきなさい。」
と華琳は先頭に立って、馬を動かした。

「楽進、于禁に李典。華琳が正式に採用するってよ。」
「「「採用？！」」」
「おう。よかったな。」
「それは有難いんですが、曹操殿と知り合いで？」
「あー、なんというか俺、華琳の兄だから。」
「・・・今なんと？」
「曹操の兄をやっているって言った。」
「「「えええええええぇぇぇ～～～？！？！？！？」」」
「そんなに驚くことか？」
「驚きますよ！え、じゃあ！！前に名乗った名は・・・」
「うん、真名だけど？」
「「「これは失礼しました（なの）！！」」」
「別にいいよ。曹家の名を出したら、畏まって話しが出来ないだろ？」
「じゃあ、私たちの真名も受け取ってください。」
やっぱりそうなるわけね。

「真名は凪です。」
「私の真名は真桜や！よろしくな、兄ちゃん」
「私の真名は沙和っていうの。よろしくなの。」
「おう。頼むぜ。」
「だけど、信じられへんなぁ。兄ちゃんが曹操様の兄なんて。」
まあ、血は繋がっていないし、第一、俺転生者ですよ？

「この人は私の大事な兄よ？」
いつの間にか華琳が後ろまで下がってきていた。

「居たのかよ、華琳。」
「ええ、後ろが騒がしかったので来てみたら、この状況でした。」

「わかったかしら、三人とも？」
「「「はい、分かりました。」」」
「兄さんは、後で私の私室に来てください。」
「はいよ。」

こうして俺は、陳留に帰った。
春蘭、季衣に武器を渡した後、ひと月の不在の間に程？と郭嘉、典韋が華琳に仕えたらしい。その場で真名を交換した。
全員に配り終えた後、解散となり、それぞれの持ち場に帰り始めた後俺は華琳の私室に行こうとしたら、荀？に「私にも何か創ってくれ」と言われたので、了承した。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

逃げるなら・・いや、もう「遅いわよ?」・・・ヤッベΣ（゜д゜;）（後書き

荀?の防具っぽいのを作成します。
あと、次から日常になるのかな?
黄巾党討伐と天の御遣いはもう少し待っていてください。

部隊設立？（前書き）

無理矢理投稿した。
ちょっと、明日から三日間投稿が出来ません許してください。

部隊設立？

～真紅狼ｓｉｄｅ～
「う～～む。荀？には何を創るべきか・・・悩むな～。」
と移動しながら創るものに悩む、俺。

「ネコミミっぽい被り物があるから、『ケット・シー』は確定だろ。
あとは何にするかな。」
そんなことを悩みながら、華琳の私室の前まで来た。

「華琳、居るか？」
「はい、居ますよ。」
「失礼するぜ。・・・と仕事中だったか。」
「いえ、もう終わりましたので。」
「そうか。先程話した件覚えてるか？」
「はい。部隊の設立ですよね？」
「そうだ。先程言ったけど、部隊の数は五つ。今のところはだけど、
総隊長は俺が務め、その下に五人の部隊長が在り、さらにその下に
部下が付くってことにしようと思ってる。」
「何故、いきなりそんなことを？」
「春蘭との手合せを覚えているか？」
「ええ、衝撃的な手合せだったので・・・」
「そんなにか？」
「それほどです。」
こんなので驚いていたら、身が持たないぞ？

「まあ、いいか。それは置いておき、あの手合せが終わった後「あ
と四つほどある」って言ったよな？」
「はい。・・・・まさか？」

お、気が付いたみたいだな。頭の回転が速いなぁ。

「想像通りだ。」

「つまり、あと残りの四つと前のを合せて五つの部隊を創るってことですか？」

「そうだ。言っておくが、一つ一つの部隊の戦闘法は変わるぞ？」

「・・・他の四つはどんなのですか？」

「見たいの？」

「はい。是非。」

「・・・まだ、他人には見せたくないから、ここでいいか？」

「どうぞ。」

「んじゃ、まずは『奥州筆頭』！！」

と俺は言い、ＢＡＳＡＲＡ２の伊達政宗をイメージし、その姿になった。

「こんなモンだ。」

「この武器は何です？」

「これは“刀”という武器だ。」

“カタナ”ってなんです？」

「簡単に言えば、俺の住んでた国の主流武器かな。侍が使っていた武器だ。命の次に大事なモノで『刀にはその“侍の魂”が宿る』っていう言い伝えがある。」

「そうなんですか・・・しかし、簡単に折れそうですね。」

「使い方によるな。」

「使い方一つで変わるものなんですか？」

武器なんてどれも一緒なんて顔をしているな。聞いてみるか。

「変わるぞ？・・・華琳は“剣”と“刀”の違いが分かるか？」

「いえ。」

「簡単な講座だ。最初は剣から、剣が対象の物を切るときには“押

して切る”んだ。もっと簡単に言うと、力任せに切るって言った方がいいな。だが、刀は違う。そんなことをすれば、刃はダメになるし最悪折れる。刀が対象の物を斬る際は“裂いて斬る”んだ。力の入れ方や斬り方などの技術が必要になってくるが、習得すれば首を斬ることなんて簡単にできるぞ。骨ごとバッサリいく。」
「そこまで出来るんですか？」
「出来る出来る。習得すればだけど。」
「・・・部隊長は誰に？」
「雅にやってもらいたいんだが了承は後からだな。断られたら俺が兼任する。」
「・・・（大丈夫だと思いますが」
なんか呟いていたがまあ気にしない。

「この部隊は、主に接近戦（インファイト）で戦う。だから、敵の攻撃を捌く技術も必要だな。」
「次は？」
お次は、アレか。

「『闘魂絶唱』！！」
ＢＡＳＡＲＡ２の真田幸村の姿に変わった。

「・・・二槍ですか？」
「片手に一本ずつ持ち、中～遠距離からの戦闘法だ。これは片手で槍が扱えることが重要だな。」
「大変そうですね。」
「だが、慣れてもらわないとな。ちなみに今言った二つの部隊は馬も乗りこなして貰うことになる。」
「馬もですか？」
「騎馬隊としても強いからな。」
「では、次を。」

「ちゃっちゃと進まないと時間だけが過ぎていくからな。」
「そうね。」

「次は前見せたヤツだ。『絢麗豪壮』！！」
「これは・・・武器に振りまわされないってことが重要ですか？」
「そうだ。あとはこれを持てるようにすることだ。一応、部下たちには軽いモノを渡すが慣れていったら、元の重さに戻していくつもりだ。一対多のときに役に立つな。一人で、五、六人は相手にできるようになるだろ。」

「次は『天衣無縫』！！」
（イメージはＢＡＳＡＲＡ２のコス２のイメージで。）

「これも槍ですが、先が変わってますね。」
「これは“碇槍”だから。」
“碇槍”？」
「槍に鎖が巻きついているだろ？これと先っちょは繋がれていて、切り離しが可能なんだ。だから、届かない相手にも振りまわせば届くし、地面や岩なんかに刺したまま敵にぶつけることも出来る。」
「敵の意表を突くには最適な武器ですね。」
「おう。便利だ。あとは工作を行って戦況をこちらに引き寄せるといった裏工作をも担当する。」
「・・・治水事業とかいいかも」
「そういう工業をも副業とするつもりだ。」
「では最後ですね？」
「ああ。」

「最後だ『征天魔王』！！」
（これもコス２をイメージしてくれ。ｂｙ作者）
「これは何ですか？」

と言って、銃に興味があるようだ。
「これは“銃”というんだが、造れないからちょっと無理だな。代わりに連射弓を作ろうと思っている。」
「連射弓？」
「普通の弓は一本ずつ撃っていくのに対して、連射弓はあらかじめ何本かストックを持ち、それが無くなるまで撃っていくという物だ。」
「・・・便利ね。」
「ただ、欠点があってストック無くなれば撃てないということだ。だから、ここは代わりに“気”を扱って戦う部隊にしたい。」
「“気”ということは先程入った、凪に任せるつもりですか？」
「まあ、本人が了承すればな。ここの部隊も接近戦だが、ここは超近距離格闘戦（スーパーインファイト）だ。求めるのは“気”が扱える者と死の恐怖を克服するして、相手の懐に潜り込むことだ。」
「懐ですか？」
「格闘だからな。直接ぶつけなきゃならないし、敵の放ってくる死の恐怖に打ち勝てなきゃ潜り込むどころか動けないからな。」
「一番危険な部隊ですね。」
「だが、両方武器を失ったときに格闘戦に慣れておけば、勝てるぞ。さて、こんなもんかな？どうだ、華琳。設立したいんだが構わないか？」
「・・・一つ聞いていいですか？」
「なんだ？」
「どうして、兄さんは独立せず、私の元で働くんですか？」
「どうしてって、それはな、華琳に義母さんに“家族”ってものを再び与えてくれたからだな。・・・俺話しただろ？家族が居ないって。」
黙って聞く華琳。

「二度と取り戻せないモノだと思っていたんだけどな、それを取り戻してくれたし、何より前よりもこの生活が楽しいからだな。」
「楽しい・・・ですか？」
「復讐してあとは虚しさだけが残ったんだが、華琳達と会ってから充実した毎日が送れているから、だから、華琳の元に居るんだよ。・・・義母さんに尽くそうと思ったんだが亡くなってしまったから、お前に死ぬまで尽くしてやろうと思ったのさ。」
「・・・・・・・・・・・・・」
「まあ、そんなもんってうおっ！？」
華琳がいきなり抱きついてきた。
何故に！？
その時、華琳には聞こえなかったが、俺には聞こえた。扉が微かに「ミシミシ」って言う音が聞こえた。
・・・・外でアイツ等聞いてやがるな。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
兄さんは部隊設立の内容を楽しそうに語っていた。
将軍だから、部下を持つことは当たり前だが、まさか部隊を持ちたいというとは予想できなかった。
各部隊の特徴を聞いていくうちに、一つ疑問が浮かんだので聞いてみた。

「どうして、兄さんは独立せず、私の元で働くんですか？」

そう、兄さんの力があれば、曹家に居なくても天下を取れる実力だった。
そんな疑問に対し返ってきた答えは兄さんの“想い”というより“夢”のように聞こえた。
しかも、最後に「お前に死ぬまで尽くしてやろうと思ったのさ。」

と反則のようなことを言ってきた。
だから、私は兄さんに抱きついた。

「うおっ？！」
「ずるい。・・・ずるいですよ、兄さん。」
「ずるいって何が？」
「分かってる癖に。そんなことを言われると私が反論できないのを。」
「・・・まぁな。」
と兄さんはおどけて笑っていた。
本当にずるい。
私は無意識のうちに兄さんに顔を近づけていき、キスしようとしていた。
兄さんも最初は躊躇いながらもいたが、近づいてきた。
あと、少しのところで突然扉が飛んだ。

「「「だめだあああああああああああああ～～～～～！！！」」」
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～

「ずるい。・・・ずるいですよ、兄さん。」
と華琳は言ったあと顔を近づけてきた。
え、ちょ、マジで！？
キスするの？！
そんなことしたら、外で聞いてる連中が乱入してくるのが目に見えてるんだけど。
だが、待たせてるのもマズイからフリをするか。
あと５ｃｍ、２ｃｍとお互いの顔が縮まっていくと同時に、扉が「ミシッ！」、「ミシミシィ！！」と聞こえてくる。

１ｃｍというところで、扉が飛んで来た。
「「「だめだあああああああああ～～～～～！！！」」」
反応はしたが、対応が遅れて、顔で受ける羽目になった。
ドガッ！
「いってぇ～～！！」
「なんで、ここに居るのかしら？雅、春蘭、秋蘭、桂花、季衣、稟、風、流流、凪、沙和、真桜？（怒）」
全員居んのかよ！！
「え、え～っとそれはですね・・・」
と口ごもる一同。
「おおかた、春蘭か荀？が覗き見みしてたのが、次第に人が集まったってところか？」
この一言で全員が挙動不審になった。
「まあいい。ところで、雅、凪、沙和、真桜。お前ら部隊長にならないか？」
「「「「え？」」」」
「元々、声をかけるつもりだったんだが、どうだ？」
「やるよ。真ちゃん」
「是非、やらせてください。」
「そうか、後の二人はどうだ。」
と悩む二人。
二人で話し合っているようだが決意が決まったようだ。

「やるで！」
「私も。」
「よし、四つは決まったな。」
「あと一つはどうするの？」
「そこは適任者が出るまで俺が兼任する。各部隊の名も決めてある。」
「どんな名なの？」
「先程、四つのスタイルが見せただろ？それからイメージしたものだ。」

『蒼龍隊』、『紅虎隊』、『翠鳳隊』、『紫鮫隊』、『黒獅子隊』
「この五つだ。そして、戦闘法をこの四人に当てはめるとこうなる。」

『蒼龍隊』・・・雅
『紅虎隊』・・・・沙和
『紫鮫隊』・・・・真桜
『黒獅子隊』・・・凪

「というわけだ。『翠鳳隊』は俺が受け持ちだ。いいか？」
「「「「はい。」」」」
「それから、各隊が分かるように陣織を創っておくから期待しててくれ」
「こんな状況を余所に言うけど、一番最初にこの部屋を覗き見したのは誰？」
本当に流れをぶった切るな。
全員が荀？を指差した。
「そう、桂花貴方なのね。これはお仕置きが必要ね。」

「は、はい？」
なんで、顔が赤くなってんだ？
それをよそに秋蘭と雅が寄ってきて耳打ちしてくれた。

「真ちゃん、あのね。」
「真紅狼、あのな赤くなっているのはある理由があるんだ。」
「理由？」
「うん、華琳様はたまに閨を私たちの内の誰かと過ごす時があってね。」
「桂花はそれに呼ばれたのだ。」
「・・・・それ本当？」
「「本当」」
・・・義母さん、華琳が変な方向に育ってしまった。
八年間も放っておいた俺が悪いのか？そうなのか？

「ダメージを負ってますね。」
「負ってるね。」
ｏｒｚになっている俺だったがよろよろと立ち上がり、もう一つ提案した。

「華、華琳。俺の家造っていい？」
「家ですか？」
「そう、家。俺の住んでた時の家。」
「・・・興味あるからいいですよ。ただし、完成したら呼んでください。」
「分かった。明日から、造るか。あと、募集もしないと。」
「ということで皆、それぞれの仕事に戻りなさい。」
部屋から出ていくメンバー、俺も家を建てるため、土地の見極めしようと出ていこうとしたら、華琳に囁かれた。

「兄さん、さっきの続きはまたどこかで・・・・。」

・・・・マジっすか？

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

部隊設立？（後書き）

キスすると思ったか！？
しねぇよ！！
でも、近いうちにするつもりだけど・・・

「ちょっとマテや、作者ぁ！！」

どこから入って来た！？

「気合でなんとかなった。」

お前はラカンかよ。

「さっきの事本当か？」

もう一人増やすつもりだけど・・・

「止めてくんない？！」

だが断る！！

「よろしい、ならば戦争だ！！」

ドガッ！バキ！ドガガガガッ！

華琳「なにやら二人が暴れているけど、これで終わりよ。また次回待ってね」

自宅が完成、そして訓練開始！！（前書き）

随分間が空きましたが投稿します。

・・・スミマセン

自宅が完成、そして訓練開始！！

～真紅狼ｓｉｄｅ～

一か月間で家は完成した。

時間が飛んでる？それはアレだ、ご都合主義ってことで頼む。

場所は、だいたい華琳の宮殿から約１０分ぐらいのところだ。

水はけや日当たり、風通しなどを見極めていくと、ここしかなかったんだ。

モデルは武家屋敷をイメージしてくれ。中庭と庭をも造った。

中庭は簡単な川を創った。

野菜を冷やす為に、それ用の籠も造った。

庭には自家栽培が出来るように畑を創っておいた。

一度、やってみたかったんだよね。自家栽培ってやつを。

部屋は全て畳だ。

畳とか栽培用の種とかはジイサンに頼んで輸入した。

あと瓦もな。

こういう木造建築ってのはシロアリや害虫などの被害が酷いがそこは特殊な術式を使い、この家から１０ｋｍ以内に入った害虫どもは『イフリート』の炎か『シヴァ』の氷か『ラムウ』の雷で消し炭になるようにしている。

もちろん家には被害が出ないように細工もしている。

自家栽培はトマトに茄子、じゃがいも、かぼちゃ、きゅうり、キャベツなど色々と栽培中だ。無農薬の為、有機栽培だな。

あと、家を造りながら部隊の募集をかけたところ、結構来た。

まず、最初に得意な武器を言ってもらい、そこから振り分けた。

各部隊約１００人前後だが、凪が率いる『黒獅子隊』のみは３０人程度しか集まらなかったが、３０人も集まった方が奇跡である。

見立てでは５人超えれば、上出来だったんだが案外いるものだな。

そんなわけで、まあ最初は挨拶をした。

「ようこそ！曹操軍の中でも特異な部隊『神狼』へ！！俺はこの『神狼』の総隊長を務める、曹真だ。まだ部隊長は決まっていないが『神狼』の一つ『翠鳳隊』も兼任で務めている。さて、『神狼』の五つの部隊ではそれぞれ決まった武器を使うが、その代り使い方が特殊だ！だが、諸君には慣れてもらわなければならない。それが基本になるからだ！」

と言った後、場はざわつく。

「本来なら今日から訓練に入りたいが、ここに来るまでに疲れている者もいるだろう。だから、明日から訓練を始める。あと、この『神狼』に入るにあたって、絶対に守って欲しい規則がいくつかある。これを護れなければ即刻除隊させてもらう。」

集まっている者たちはこころして聞いた。

一つ、常に正々堂々と。

一つ、喧嘩をするなら、総隊長に申請すること。

一つ、曹操軍に居るからって民に偉そうな態度で接するな。

「ここから重要だよく聞け！！」

一つ、人を殺すことに慣れるな。

「最後はこれだ。」

一つ、必ず生きて帰ってこい！

「以上だ。では、解散！！」
と言ってぞろぞろと集合場所の時刻と場所を聞き、出ていった。
とまあ、こんな感じだ。

次の日から、まずは体力づくりをしてもらった。
二週間ほど、体力をつけなければ武器を操れないし、持久戦にも耐えれないからだ。

それから、各隊を見て回り、どんな武器を操るのか。など聞かれた為、一から教え理解してもらって行った。
特に『黒獅子隊』は“気”を操るため凪の指導もそうだが俺も指導してやった。
この部隊には是非とも覚えて欲しい技があるからだ。
技とは『金剛剄』。ただし、“気”で扱えるように俺が独自にアレンジしたものを教えた。
一人の武官が疑問に思い聞いてきた。

「この『金剛剄』ってのは攻撃用ですか？」
「いや、防御技だが、覚えといて損はない。」
そういうと何人かが騒ぎ始める、「防御技なんて覚えたくない」と。
凪はその武官たちを窘めようとするが、俺は止めた。

「お前たちなｎ・・・「そうだな」？」
「確かに防御技を覚えたくないという奴もいるだろう。だから、教えてやるよ。この技がどれほど優秀かを。ルールは簡単、俺ＶＳお前ら全員だ。」
「「「「「なっ！？」」」」」
驚く『黒獅子隊』のメンバー。

「舐めてんのか！！」

「本気だぞ？」
「やってられるか！！」
「文句言う暇があったらかかってきたらどうだ、雑魚共？」
軽い挑発に耐えられなくなった武官たちは俺を囲み、一斉に襲いかかって来た。
それを一つ一ついなしながら、打ち合いが続いた。
俺はワザと背中の隙を見せた。それをチャンスだと思った武官は正拳突きを叩き込もうと背中に触れる瞬間見えない壁に遮られて弾き飛ばされた。

活剄衝剄混合変化　金剛剄

「うあっ！？なんだ今のは！！」
「これが『金剛剄』だ。」
防御と同時に全体に衝剄を弾き飛ばし、俺の周囲に居る奴ら目掛けて放つ技・・・
接近されていて身動きが取れないときや敵の攻撃の嵐を抜ける時など様々な場面に活用できる汎用性の高い技だ。

「どうだ？これでこの技の重要性が分かったろ？」
「・・・・ああ。舐めた口を聞いて済まなかった。」
と謝る一人の武官。

「いや、キミたちのいうことも一理ある。疑問に思ったらいつでも応えよう。」
「「「有難うございます！！」」」
「・・・じゃあ、凪。金剛剄の練習を頼むぞ？」
「はい。真紅狼さん。」
「頼んだ。そうだな・・・あと三時間ほどで今日の訓練は終了だ。無理はするなよ？」

「「「はい！」」」
と言って、『黒獅子隊』を後にし、残りの四部隊を回った。
各部隊最初の訓練の為、ぎこちない動きだったが終わりの方にはスムーズに動いていた。
そして各部隊を回り、三時間後全部隊を集め、訓練終了の知らせを出し解散させた。

「今日はここまでだ。最初はそんなに長くやらん。まずは訓練に慣れてもらうことに専念してもらいたい。ちゃんと、体を休めるように。では、解散！」
ぞろぞろ各部隊のメンバーはそれぞれの場所に帰り始めた。
俺も自宅に帰ろうとした瞬間、雅、凪、真桜、沙和に呼び止められた。

「「「「真紅狼」」」」
「おう、おつかれさん。」
「華琳様のところに行くんじゃないの？」
「自宅が完成したからこれからはそっちに帰るんだよ。」
自宅が出来たということを聞いて驚く四人。
そこに悪魔の呟きが来た。

「真ちゃんの家、行ってみたいなぁ。」
「私も興味があります。」
「私も～」
「ウチも興味があるな！」
そんなキラキラした目でこっちを見るな。
・・・・ダメだ。ここで「いいぞ。」って言ったらヤな予感がする。
そこに追い打ち・・・いや、止めの一言が飛んで来た。

「・・・私も行ってみたいわね。真紅狼。」
振り向くと華琳が居た。
Ｏｈ・・・・ｏｒｚ
「いつの間に居た？」
「少し前に」
「・・・あー、はいはい。いいですよ。勝手に来い。」
ということで曹操軍の武官文官をご招待した。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
今日は兄さんが創った部隊の訓練初日・・・。
宮廷から眺めているが、それぞれの部隊が体力づくりで忙しくしている。
とある部隊で兄さんは戦っていると姿を見えた。

「何アレ？」
「どうしたんですか、華琳様？」
秋蘭は聞いてくる。

「兄さんが一気に周りの人間を吹き飛ばしてのを見てね。ちょっと疑問に思ったのよ。」
「・・・あとで直接聞いてみたらどうですか？」
「それもそうね。」
「あ、終わりますね。」
「なら、行きましょうか？」
「「はい」」
と眺めるの止め、兄さんのところに向かった。

兄さんのところに向かってると、「家が完成した。」という話をしていたので私は興味があり、後ろから声をかけた。

「・・・私も行ってみたいわね。真紅狼。」
と一言。それが止めだったらしく。諦めていた。

「・・・あー、はいはい。いいですよ。勝手に来い。」
そういうやり取りがあった後、向かった先はこの国では見慣れない屋敷だった。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
というわけで、華琳達を家にご案内中。
なにも無いけどさぁ。

「ほい。ここだ。」
と立ち止り指を指した。
様々な感嘆の声が聞こえた。

「兄さん、これが兄さん住んでいた国の家ですか？」
「まあ、そうだな。」
そこには立派な門があり、どっしりと待ち構えていた。

「立ち話もなんだし、中に入るか。」
「そうですね。」
玄関まで来たときに言った。

「あ、靴は脱いでくれ。今後俺の家に来るときは玄関で靴を脱いで入ることだ。」
「「「「「分かりました。」」」」」

そういって、全員は靴を脱ぎ、中に入った。
廊下を歩き、様々な部屋を見せた後、居間に案内した。

「この部屋が基本的に朝餉や夕餉を食べる部屋で共有空間みたいな場所だ。」
「ここで、食べるんだ。」
「質素ですが、落ち着きますね。」
「下に敷かれているのはなんだ？」
「畳だ。」
「タタミ？」
「畳ってのはそうだな・・・絨毯だと思ってくれ。」
説明するのにメンドイしな。

「そうか分かった。」
「それじゃ、ちょっとここでくつろいでくれ。俺は着替えてくる。」
「分かりました。」
「出歩いてもいいけど、奥の方まで歩きまわるなよ？迷いかねないんだから。」
「「「はい。」」」

着替え中・・・

「まだですかね？」
「もうそろそろでしょう。」
「・・・すまん。待たせたな。」
と俺は手にお茶を淹れて戻って来た。

「兄さん、遅いですよ。・・・？！」
「スマン、ちょっとお茶請けとお茶に時間を食ってな。」
「真紅狼、お前こんなに華琳様を待たせてそんｎ・・・なんだその

格好は？」
「ん？ああ、これを見せるのは初めてか。」
俺は男用の着物に着替えて戻ってきていた。

「兄さんそれは？」
「これは着物って言ってな。俺が家に居る時に着る服だ。」
といいながら、一人づつにお茶と水羊羹を配っていく。
水羊羹は完成した際、ジイサンに貰った。

「急な招待だったからいいモノが無くてな・・・。まあ、こんなものでも良ければどうぞ。」
「これは・・・どうやって食べるのだ？」
と羊羹を指差す、秋蘭。

「竹串があるだろ？それで一口サイズに切って食べるのもよし。一気に一口でも食べてもいいぞ。」
と食べ方をレクチャーした後、春蘭や凪は一口で食べていたが、その他のメンバーは一口サイズに切ってから食べていた。

「どうだ、味は？」
「甘すぎず、苦すぎずさっぱりしていておいしいです。」
「しかも、お茶にも合います。」
「風ちゃんも初めて食べるモノですがおいしいですね～。」
「そいつはよかった。」
「兄さん・・・これなんて言うんですか？」
「これは水羊羹っていう茶菓子だ。」
「作れますか？」
「まあ、なんとか。」
「今度また作ってください、食べたいです。」
と可愛い妹に頼まれたので、了承した。

「分かった。作っておこう。・・・さて、こんな感じだな。」
「そろそろ時間だし。帰るか？」
「そうですね。帰りましょうか、華琳様？」
「春蘭たちは帰りなさい。私は今日ここに泊まるわ。」
「はい。・・・・・・・・・・・「え」？」
「聞こえなかったのかしら？私はここに泊まるって言ったのよ？」
「いやいや！華琳お前何言ってんの？！」
「いいじゃないですか、兄さん。」
「いや、よくねぇよ？！こんな古風な家に泊るより豪華な宮廷に戻って寝た方がいいだろうが！」
「別に気にしてないですけど・・・？」
「ええ～～。秋蘭もなんか言ってくれよ。」
「まあ、私は華琳様が言うのであれば、止めはしませんが・・・。」
「味方がいねぇ！！」
「そういうことだから、よろしくね？」
「「「はい。」」」
「もう決定事項かよ！！」
虚しく真紅狼の意見は却下された。

「じゃあ、真紅狼。華琳様を頼むぞ。」
「華琳様、明日の朝また逢いましょう。」
「真ちゃん、またね～。」
と言ってそれぞれは帰っていった。
華琳を溺愛している桂花は終始黙っていたが、よく見てみると凪、真桜、沙和、季衣によって口をふさがれていた。
ああ、望みは最初から無かったんですか・・・。
どうみても、計画的な犯行です。本当にありがとう御座いました。
・・・チクショーが！！

「さて、どうしよっかなぁ？」
「夕餉はどうするんですか？」
「それなんだよな。完成したばっかで食糧のことを考えてなかったんだよな。」
「じゃあ、食べに行くんですか？」
「まあ、そうなるな。」
「なら、宮廷で私の料理を食べてくれませんか？」
「ん？華琳、お前料理出来るの？」
「はい。それなりに。」
「じゃあ、食べさせて貰おうかね。」
「腕が鳴りますね。」
と言って俺は着物のまま、宮廷に向かった。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

自宅が完成、そして訓練開始！！（後書き）

次なんですが、風呂イベントを入れるか入れないかで迷ってます。
要望があれば、入れます。

想い（前書き）

投稿できるやつは全て投稿します。

想い

～真紅狼ｓｉｄｅ～
宮廷で華琳の手料理を食べ、一息つき自宅で風呂に入ろうと思ったとき華琳がついでに「風呂に入っていきませんか？」と誘われた。

「それって、混浴じゃないよな？」
「混浴ですよ？」
「いや、無理だから」
「いいじゃないですか、兄妹ですし」
「よくねぇよ？！」
「じゃあ、先に兄さんが入ってきてください」
「・・・絶っ対に入ってくるなよ？」
「わかってますよ」
という形で何故か華琳専用の風呂に入ってる俺。
どうしてこうなった？
そんな風に思ってると外が騒がしかった。

「・・・だから」
「・・でも」
「それより入るわよ」

ガラッ・・・

「「「・・・・・・・・・・・・」」」
「・・・・・・・・・・よう」
「真ちゃん何してんの？」
「雅、華琳はドコ行った？」
「華琳様ならもうすぐ来るよ」

「言っといてくんない、上がってr「兄さん」」
「兄さん、すみません。春蘭たちがどうしてもというので」
「お前・・・謀ったな」
「で、春蘭たちは？」
「そこで固まってるよ」
固まった春蘭たちが徐々に動き始めた。

「「「ぎゃあああああ！！！」」」
「なんで、ココに真紅狼が居る！？」
「このヘンタイ！」
「お兄さん、大胆ですねー」
「だから、出たかったのに」
「私が誘ったのよ」
「「「えっ！？」」」
「ダメかしら？」
「華琳様が誘ったなら・・・」
「文句は言いませんけど・・・。こっちを見ないでよ！？」
「見ねぇよ」
と俺は言い、端の方に向かった。

数分が経ち、気まずい空気だったので出ることにした。

「華琳、俺はもう出るぞ」
「はい。なら、着替えて待っていてください」
「はいはい」
俺は湯船から出る時、迂闊にも背中を華琳達にの方に見せてしまった。

「お、おい。真紅狼」
「なんだ、春蘭？」

「その背中の傷、どうした？」
「（しくじった・・・、春蘭達が居るのを忘れていた）」
この背中の傷を見て、華琳と雅以外はびっくりしていた。

「真紅狼」
「秋蘭も知りたいのかよ」
「ああ」
興味があるという目でこちらを見ているが、この場では話すつもりはなかった。

「あー、まあまた今度な」
といい颯爽に風呂を出ていく真紅狼だった。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
兄さんが入ってから、私は兄さんが逃げられないように逃げ道をふさぐ工作をおこなった。

「雅、春蘭達を連れて、風呂に行きなさい」
「はい。でもなんでまた？」
「たまには皆で入るのもいいでしょう？」
「それもそうですね」
怪しむ必要もなかったので雅は疑わず、すんなりと行動に移った。

そして、策が上手くいき私は今、春蘭たちと兄さんで風呂に入ることに成功した。

「兄さん、失礼します」
「お前・・・謀ったな？」
「なんのことやら」

と問いただす兄さん。
気まずい空気だったのか兄さんは「風呂を上がる」と言ってきたので待つように言い返した。
湯船から上がるときに背中の傷が見えてしまった。
・・・何度見ても、あの傷を見ると嫌な気分になってしまう。
春蘭たちは初めて見る傷に、驚きを隠せないでいた。
傷の事を聞こうと春蘭や秋蘭は質問していたが、兄さんは答えずにそのまま出ていった。

「はぐらかされたな」
「ああ。だが、なにか思って答えなかったのこもしれんぞ、姉者」
「“なにか”ってなんだ？」
「それは私に聞かれても」
「真紅狼も色々とあったのだろうか・・・。どうなんですか、華琳様？」
「兄さんからは聞いていないわ」
「・・・・・・・・・・・・・・」
雅は黙っていた。
あの傷を創ってしまったの原因が自分たちにあるなどと言えなかったからである。

「私もそろそろ上がるわね、兄さんを待たせるわけにはいかないし」
そういい華琳は雅たちも早く出た。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
風呂から出て、少し涼んでいたらしばらくしてから華琳がやって来た。

「兄さん」
「おう。で、俺の家で寝るのか？」
「当り前です」
「当り前なのかよ・・・。取り敢えず帰るか」
うまく宮廷で寝かせようと思ったが華琳の意思は固かった。

移動中・・・

俺の部屋で二つに並んだ布団に華琳、そして俺は寝た。

「そんじゃ、おやすみ」
「はい、おやすみなさい、兄さん」
そういって、俺たちは寝た。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
兄さんは布団の中に入った瞬間、向こう側を見ながら寝ていた。
私は初めてな為、なかなか寝付けず、兄さんが寝ているのを確認した後一人呟いた。

「兄さん。私は兄さんが好きですよ」
そう一言呟いた。

そう、私は兄さんが好きだ。
私が傷つかない為に、兄さんは何もかも背負って私を護って来た。
私はそれが嬉しかった。だけど、私も今は何かを背負う覚悟は持っている。

兄さんが旅に出ている間に様々なことがあり、背負わなければならない事もあった。
初めて背負ったときには重さで潰されそうになったが、今は周りには頼もしき部下がいるから、潰されずに耐えられることも出来た。
だから・・・

「兄さんはもうなんでもかんでも一人で背負わなくていいんですよ？」
とその呟きが真紅狼に聞こえていたのかは神の知るところであった。
最後に華琳ははっきりと言い、そして目を閉じた。

「私は兄さんと共に歩みたいです」

～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

想い（後書き）

なんつーか、下手だな。
こういう話を創るのが。

次から、一刀たちが出ます。
ようやく本来の主人公が出てくる・・・。
遅いなぁ

砦落としは斬新な方法

砦落とし
～真紅狼ｓｉｄｅ～
朝、目が覚めたときはまだ辺りは若干暗く、華琳も未だに寝ていた。
華琳を起こさないように、部屋から抜け出し、汗を流した。
その後、リンテンスの姿に着替え、畑に水を撒き育てている野菜は順調に育っていた。

「・・育っとる育っとる。あともう少しだな」
「・・兄さん、お早うございます」
「おう、おはようさん。顔洗うか？」
「はい」
「冷たいから、気を付けろよ」
「～～！　スッキリしました」
「それじゃ、宮廷に行きますかね」
「そうですね」

宮廷に着くと、中が慌ただしくなっていた。

「どうしたんだ？」
「あ、真紅狼に華琳様。来てたんですか」
「今さっきね。で、どうしたの？　秋蘭」
「いえ、昨夜の内に書物が一つ紛失したようです」
「どんな書物なんだ？」
「『太平要術』と呼ばれる書物です」
「どんな内容だったんだ？」
「人心掌握の内容が書かれていた書物です」
「人心掌握ねぇ。・・・・（なんだこれは、魔力？　いや、妖力の

残り滓がわずかに感じられる）」
目に見えないが、魔力を有している真紅狼だけが気付いた。

「どうしました、兄さん？」
「いや、なんでもない。ボーっとしてしまった」
「・・取り敢えず、朝議を始めるから、秋蘭皆を呼んでちょうだい」
「はい」
妖術か・・・。
まためんどくさいことになりそうだ。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
書物が無くなっている事を知った私と兄さんは、突然兄さんの顔が難しい顔をしていた。

「（これは、なにか起きそうな顔ね）」
兄さんは気付いていないが、たいてい面倒事が起きる前の兄さんの顔は険しい顔をしている。
兄さんはバレていないと思っているようだが、長く付き合っている者には案外分かりやすい表情をしているのである。

「・・取り敢えず、朝議を始めるから、秋蘭皆を呼んでちょうだい」
「はい」
「ほら、兄さん行きますよ！」
「分かったから、引っ張るな！」
昨日の告白から想い切って兄さんの手を引っ張っていく私。
・・・まるで恋人みたい。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～

朝議の内容は『黄巾党』についてだった。
今日朝早くだが、『黄巾党』の大きな集団が二つあり、どちらも砦を持っているようだった。

「砦とは、厄介ね・・・」
「・・・華琳様、一つ策があります」
「言ってみなさい、桂花」
「真紅狼を使うのはどうでしょう？」
「ん？　俺？」
「そうよ」
「何故、真紅狼なのかしら？」
「真紅狼は未だに過去の異名が残っています。ここで新しい異名を広げて過去の異名を払拭させることと、うまくいけば情報も聞き出せるかもしれません」
「前者は納得できるけど、後者はどういうこと？」
「『黄巾党』は大きな集団です。誰かしら、頭が居る筈です。しかし、私たちはその情報を知りません。そこで、真紅狼が一人で砦攻めした時に、相手が油断してポロっと口に出すかもしれないので、それを逆手に取るんです」
「そんなの許せるハズがないでしょう？　確かにそろそろ真紅狼に一つぐらい大きな勲功を挙げて欲しいけど・・・」
と華琳は俺の身を心配しているようだが、華琳の言ってることにも一理あるな。

「まあ、俺は別に構わないが・・・」
「真紅狼、いいの？」
「まあ、体を動かさねぇと鈍っちまうからな」
「でも、一人よ？」
「大丈夫だ、適当に何人か捕まえてから情報吐かせて、潰すし。武勲も一つぐらい挙げないとダメだろ？」

「それを言われると、そうだけど・・・」
「じゃ、決まりだ。・・桂花、砦の場所は？」
「ここから、西に出て、山を入ってすぐよ」
「分かった、支度してくる」
「しょうがないわね、全員聞きなさい！　私たちはこれから黄巾党の討伐に入る！　各々、準備を怠らず、迅速に動きなさい！！」
「「「「はっ！！！」」」」
雅達の動きが活発になり、準備を始める各々。
相変わらず、華琳が言うと様になってるな。

「華琳、俺は先に行って砦を落としてくる」
「分かりました」
「途中、轟音が聞こえても気にするなよ？」
「大丈夫です。兄さんの無茶苦茶な戦闘にはもう慣れました」
「微妙に言葉に棘を感じるだが・・・」
「気のせいです」
「ま、行ってくる」
うーむ・・・、これは怒ってるな。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～？？？ｓｉｄｅ～
俺たちは、戦乱を鎮めるために義勇軍として戦っている。
各地を転々としながら、黄巾党を倒してきたがさすがに食糧が尽きはじめた。
そこで、軍師の朱里の提案でこの近くを治めている魏の曹操と共闘させてもらうことにした俺たちは、曹操軍を探した。
したら、なんとこの近くに黄巾党達が居るので討伐に向かう所に出くわした。
星の友人が曹操軍に居ることが分かり、口添えしてもらい、黄巾党討伐までだが、一緒に戦ってくれることとなった。

「私は曹操よ。貴方、誰？」
「失礼ですぞ！　天の御遣い様に向かって！」
と愛紗が怒るが、俺は「初対面だし構わない」と言ってあげた。
「俺は“天の御遣い”を名乗ってる北郷一刀って言うんだ。よろしくな！」
「貴方が噂の“天の御遣い”ねぇ・・・」
そう言って、ジロジロと見てくる曹操。
「まあ、いいわ。進軍の速度を落とさないでよ？　もう一つの方も今頃落としかかっているし・・・」
曹操がそう呟いた後、山の方から轟音が何度も鳴り響いていた。
ドォーーン！！
ドゴン！！
バキバキバキ！！
俺たちは何事だと思って慌てたが、曹操軍の兵士たちは全然驚いておらず、むしろ「派手にやってるな～～」という顔をしていた。
一体、誰がやっているんだ？
～一刀ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～
～真紅狼ｓｉｄｅ～
桂花の情報通りに西に出て、山に入ったんだが、一向に砦が見えない。
「山に入る前には砦がチラッと見えたんだが・・・どこだ？」
呟く俺。

そこに近くで複数の声が聞こえたので、『殺剄』を使いながら近づいた。

「今日もなかなかの量をブン盗ったな！」
「砦に居る奴らも驚くな！」
「あー、はやく天和ちゃん達に逢いたいな」
「俺は地和ちゃんだな！！」
「馬鹿か、お前ら人和ちゃんこそが最高だろうが」
「「「「なんだと！？」」」」
「やる気か？！」
とアホみたいに大声で喋っている黄巾党の連中。
ていうか、主格犯の名前・・いや、多分真名が分かったし、さっさと、砦を落とすか・・・
そこで、俺は黄巾党の連中の後ろから現れ、声をかけた。

「情報提供ご苦労さん」
「「「「「！？」」」」」
「ところで、その三人の名ってなんていうの？」
「お前は誰だ！？」
「曹真。で名前は？」
「曹家の長男か！」
「ご名答、で名前を言えって」
「誰が、貴様なんぞに・・・」
そう言っているのは多分、このグループのリーダーらしき男だった。
だが、それを親切な方が（？）教えてくれた。

「天和ちゃん達の名前は“張三姉妹”って言われてるんだ！」
「ご丁寧にどうも」
「お前はバカか！　今コイツは曹真と名乗っただろうが！！」
情報提供してくれた奴に怒鳴るリーダー、分かるよその気持ち。

「まあ、俺にとっちゃどうでもいいんでさっさと帰れ、落とし行くから・・「ガシッ！」」
そう言い、黄巾党の連中を思いっきり、砦の方に投げ飛ばした

「「「「「へっ？！」」」」」

ブンッ！

「「「「「なぁぁぁぁぁ～～！？」」」」」
「よし、無事に逝ったな」
今ものすごい発音がおかしかった気がするがまあ、いいや。
その後の行動はすでに決まっていたので、準備を素早く済ました。

「さて、出来た出来た。うまく当たればいいが・・・」
そう言って、真紅狼は『活剄』を使い、筋力などを強化し隣に置いてある丸太
を持ち、それを黄巾党がいる砦に向かって、投げた。

「第一投行きま～す。・・・・そいやっ！」

ブンッ！
バゴンッ！！
ガラガラ・・・

「む。当たっているが、ちょっとズレたな・・」
投射角を調節している真紅狼に対して、黄巾党の連中はパニック状態になっていた。

「第二投目・・・・どりゃっ！」

ブンッ！
バキバキッ！
ボゴォン！

次から次へと真紅狼の居る地点から、巨木の槍が何本も砦に向かって、飛んでいきその槍が、城壁にあちこち刺さってるという奇怪の光景が誕生した。

「最後、第十投目・・・・せいやぁ！」

バキィン！

最後の槍も見事に当たり、生き残りが居ないか確認するため、鋼糸を展開しながら、砦に入っていった。
その後、砦には断末魔と絶望と恐怖が生き残っていた者たちに襲いかかった。

「ふぅ、終わったぁ～。あー、眠い！」
フラフラになりながらも、黒鷹に乗りながら、華琳の元に帰っていった。

「黒鷹、なるべく早めに頼む。」
「ブルルゥ・・・」
黒鷹は返事をしたあと、いつもよりも早いスピードで華琳達の元に向かった。

俺が帰った時には、華琳達も砦を落としていたらしく、いいタイミングに帰って来た。
しかし、見知らぬ者たちが居た為、どこかの諸侯と手を組んで居る

のかな？と思いながら、華琳に報告しようと陣に向かっていたら、いきなり刃を突き付けられた。

「貴様のような者が、“天の御遣い”様が居られる陣に近づくな！！」

またか・・・・（落）

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

砦落としは斬新な方法（後書き）

“二度あることは三度ある”っていいますよね？
次回はそれです。

作中に出てきている砦とは、所々がボロボロになっている城を棲家にしていますのでご注意を

二度あることは三度ある（前書き）

なんとか投稿出来た・・・。

二度あることは三度ある

〜？？？ｓｉｄｅ〜

私たちは、乱世を治めるべく義勇軍を募り、各地で騒がしている黄巾党を討伐してきたが、さすがに食糧が尽きはじめた時、陳留で勅史をやっている曹操軍が居り、共同戦線を張ることで一時の間が食糧が確保できるという結論に至った私たちは、曹操に頼み込んだ。このとき、星の友人が曹操軍に仕官しているらしく、口添えなどをしてもらい。

共同戦線を張ることが出来、食糧も分けてもらえた。

だが、戦果はいまいちだった。

曹操が指揮している部隊『神狼』という五部隊がほとんど、活躍を奪ってしまったからだ。

そんなとき、賊らしき男が“天の御遣い”様と桃香様、曹操が居られる天幕に向かっていた。

そこで、私は大声で叫んだ。

「貴様のような者が、“天の御遣い”様が居られる陣に近づくな！！」

かなり大声を出したので曹操達にも桃香様たちにも聞こえる筈だ！事実、「何事だ？」と言って人が集まって来た。

「……またかよ。チクショウ、泣きたくなってきた」

「貴様のような賊がここに居るべきではない！　早々に立ち去れ！！」

「人の話を聞けよ、頼むから」

「黙れ！　聞く耳持たん！！」
そう言って、愛刀を持ち、振り降ろす瞬間鈍い音が聞こえた。
ガキィン！！
「なっ！？」
いつの間にか、賊の手には見たことも無い大きな槍みたいなもので防いでいた。
「愛紗、止せ！　その方は曹操殿の兄上らしいぞ！」
「な、コイツが！？」
「私の友人にも確認が取れた。間違いない」
事を見守っていた曹操が喋った。
「関羽。貴女、私の兄に何しているのかしら？」
～関羽ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～
～真紅狼ｓｉｄｅ～
華琳のところに行こうとした瞬間、黒髪でポニーテールの女の子が立ちふさがった。
「貴様のような者が、“天の御遣い”様が居られる陣に近づくな！！」
また勘違いかよ！
俺、ホンットに賊とかに間違われるな。
アレか？
顔の傷か？　そうなのか？
「……またかよ。チクショウ、泣きたくなってきた」

「貴様のような賊がここに居るべきではない！　早々に立ち去れ！！」
「人の話を聞けよ、頼むから」
「黙れ！　聞く耳持たん！！」

あー、うぜぇ。
なんかさぁ武器持って迫ってきてるんだけど……
あ、振りかぶりやがった。

「（天衣無縫）」

手には『長槍　鬼神』を持って、防いだ。
あー、もう！
誰でもいいから、この勘違い娘を止めてくれ！
そのあと、お仲間が止めてくれたらしい。

「関羽。貴女、私の兄に何しているのかしら？　そして、兄さん。お帰りなさい」
「おう、ただいま。黒鷹、馬舎の方に行っていいぞ。御苦労、休んでくれ」
「……ブルゥ」
そう言うと、一人でに向かって行く黒鷹。
めんどくさいし、さっさと報告するか。
お客さんも居るし。

「そんじゃま、報告会といこうかね」
「はい」
「黄巾党の頭の名は“張三姉妹”って言われてるらしい、多分真名だと思うんだが、天和、地和、人和だってよ」
「それをどこで？」

「親切な方（笑）が教えてくれた」
「“張三姉妹”……聞いたこと無いわね」
「元々、旅芸人だったらしいぞ？　なんでここまで膨れ上がったのかは分からんが……、ところでアンタ等どちらさんで？」
今更な質問をぶつけるが、わからんものはしょうがない。

「私は劉備と申します」
ツインテールで桃色の髪をした子が言った。

「…関羽だ」
納得いかない様子で言った。

「張飛なのだ～」
元気いっぱいですね。

「諸葛亮　孔明と申します」
二人帽子を被ってる内の一人が言った。
というか、この子があの孔明！？

「？統　士元でしゅ」
あ、噛んだ。

「趙雲　子龍です」
先程、関羽を止めてくれた子か、マジ助かった。

「んで、馬超と馬岱ね」
「よ！　また会ったな、蒼騎」
「ひさしぶり～」
蒲公英、お前本当に軽いな……

「最後の俺が皆から“天の御遣い”って言われてる北郷一刀だ。よろしくな！」
……間違いなく、学生服だね。
いつから、三国志に学生服が出てくるようになったんだ？
ぱっと見て・・・・ただの高校生だな。
よし、無視しよう。

「そういうアンタは誰なんだ？」
「俺は曹真。曹操の兄だ」
「そういうことよ。先程の件、まだ私は許してはいないわよ？」
あらら、我が妹は凄い怒ってるし、春蘭達も怒ってる。
別にいいのに……。

「私に策があります」
そう言ってきたのは、孔明だった。

「策ねぇ、言ってみなさい」
「この近くにある砦を私たちが落として見せますの…「必要無い」なんですって？」
「必要無いって言ったんだよ。俺が落としてきたし」
「そ、そんな虚言信じません！」
「季衣」
「はい、お兄さんなんですか？」
「“轢き潰した”って言えば分かるな？」
「あー、理解できました。お兄さんはちゃんと、砦を落としていますよ」
「季衣は知ってるの？　兄さんがどうやって砦を落としたのかを」
「はい、華琳様。以前助けてもらったときに見せてもらいました」
「嘘だと思うなら、砦に行って見てこい。目印もあるぞ」
嘘は言っていないよ？

目印は異様な光景だけどね。

「報告会は終わりだ。解散でいいのか？」
「ええ、有難うございます、兄さん。これで会議は終了よ」
劉備たちは、もう一つの砦がどんな様子か、見に行くらしい。
慣れてない奴が行くと、吐くぞ？

「兄さん、私たちも行っていいですか？」
「悲惨だから、行かない方がいいと思うぞ？　多分飯が喉に通らないかもな」
「……なら、止めておきます」
「それがいい」
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

実際に、見に行った劉備たちは目にした光景を見て、しばらく食事が取れなかったらしい。
だから、言ったのに。
「止めとけ」って……

二度あることは三度ある（後書き）

死体なんかありませんよ？

全員肉片すら残っておらず、血だけがある状態です。

砦の中は血で真っ赤です。

転生者・・・そして、化物

～一刀ｓｉｄｅ～

曹真が落とした砦を行ってみた。

中は悲惨なものだった。

辺り一帯が人の血で撒き散らしており、外の壁は巨木の槍が何本も刺さっていた。

砦の中を除いた愛紗たちは、途中から目を逸らし、憤りを覚えていた。

俺たちは砦に火を放ち、この存在を無くした。

「曹真め、ここまでやるとは……」

「……ご主人様、奴は一体何者でしょうか？」

「……聞いてみるか」

「ば、化物とかだったら、どうするの？　ご主人様？」

桃香は恐る恐る聞いてきた。

「化物だったら、追いだして曹操達を救うさ！」

「討伐しないのですか？」

「さすがに、この惨状を見たら真正面からの戦いは無理だから、横から攻める。

追い出してから、叩くとかしてね」

「……なるほど、では、策を練ります」

「頼むよ、朱里。さあ、帰ろうか」

砦を後にする俺達。

俺は“天の御遣い”……つまり、“英雄”だ。

だから、俺は“化物（ソウシン）”を追い出し、人々を救わなきゃならない！

～一刀ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
劉備たちが帰ってきた後、俺を見る目が変わっていた。
なんというか、怯える目や嫌悪する目だった。
まあ、慣れてるからいいけどよ。
そこに“天の御遣い（笑）”がやってきた。

「曹真、アンタ一体何者なんだ？」
「ただの人間だが？」
「ただの人間があそこまで行為出来る筈がない！」
「なら、……殺人鬼かな？」
そういって、そのような雰囲気を醸し出し始める俺。
それに反応して、奴の周りに居る関羽たちが臨戦態勢になっていた。

「だいたい、“学生服”を着ている奴なんか、信じられるか」
「！！　なんで、曹真アンタは“学生服”の事を知っている？！」
「……さあな。（よし、喰いついたな）」
そして、言うだけ言った俺はその場を去った。

夜、華琳達が居る天幕から離れ、人があまり近づかない森に一人佇んでいた。
そのとき、後ろの茂みから「ガサッ！」と言う音の後、出てきたのは北郷一刀だった。

「……なんか用か？」
「曹真。アンタはなんで俺が学生だと分かった？」
「そりゃ、俺の元居た世界が現代の日本だからだ」
「アンタ、一体……？」
「俺の本来の名は蒼騎　真紅狼で……転生者だ」
「なら、蒼騎。……転生者とはなんだ？」
「転生者とは言葉通り、別の世界で一度死んで、生き還り、違う世界で第二の人生を歩む者のことを言う」
「なら、お前の持っている力って奴も誰かからもらったんだな？」
「そうだな、誰かからは言わなくても分かるな？」
「ああ。聞きたいことは分かった、じゃあな」
そう言って、自分の仲間の元に帰っていく北郷……。
俺は、北郷が完全に居なくなってから、次の訪問者の相手をした。

「さて、そこで盗み聞きしている二人出て来い」
ゆっくりと出てくる人影は……華琳と秋蘭だった。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
夜になると、兄さんが森の方に入っていく所を秋蘭が見たという報告があり、私と秋蘭は、兄さんの後に続いて入った天の御遣いの後を追った。
二人はなにやら、話していた。
ギリギリまで近づくことで、話の内容が聞けた。
……その内容は信じがたいものだった。

『俺の本来の名は蒼騎　真紅狼で……転生者だ』

『なら、蒼騎。……転生者とはなんだ？』
『転生者とは言葉通り、別の世界で一度死んで、生き還り、違う世界で第二の人生を歩む者のことを言う』

その時点で兄さん……いや、真紅狼はこの世界の者ではないことが分かった。

「（真紅狼が、一度死んでいる？！）」
「（華琳様、大丈夫ですか！？）」
「（ええ、その後の話は？）」
「（真紅狼の身の周りの話をして、天の御遣いは去りました）」
「（私たちも引くわよ）」
そのとき、不意に声が飛んで来た。

『さて、そこで盗み聞きしている二人出て来い』

気付かれていた。
諦めて私たちは、茂みから出た時の真紅狼の表情は悟った表情だった。

「……兄さん」
「もう俺の事を“兄”と呼ぶな」
「何故ですか？」
「曹操軍全員を騙していたんだ、呼ばれる資格はないだろう？」
「…先程の話は本当か？」

「夏侯淵か。ああ、本当だ」
「何故……真名で呼ばない？」
「さっきも言ったように騙していたから呼ぶ資格が無いんだよ」
「全部話してください」
「ああ、知る権利があるな」

そこから真紅狼は語った。
自分がこの世界で生まれたのではなく、天の御遣いと同じ世界で生まれたこと。
自分が何がやってきたのか、何が起こったのか。
そして、他者を助けるために自分が代わりに死んだこと。
死んだあと、“神”に会い、様々な力を貰い、この世界に転生したことなど全てを。

「とまあ、こんな感じだ。……コレを聞いたうえで曹操に問う。俺の処遇は決まったか？」
「処遇ですか？」
「曹操…、お前が望むなら、今ここで首を切り落とすし、出ていけと言うなら出ていこう。俺はどんなことにも従おう」
「……なら、なんで小さい頃、私を熊から庇ったのですか？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「答えてください」
「・・・気まぐれだ」
「なら、なんで私を災厄から護ったのですか？」
「・・・それも気まぐれだ」
答えを繰り返す真紅狼。

「そうですか……。決まりました、処遇が」
「ようやくか……」
「真紅狼、いえ、兄さんはこの曹家の……曹操の兄として生きてください。私を護ってください」
いつの間にか、私は涙を浮かべながら、話していた。

「兄さん、顔を上げてください」
「…ああ」

パシンッ！

小気味のいい音が響いた。
私は兄さんの顔を引っ叩いた。
そして、泣きながら抱きついた。

「真紅狼、私からもだ」
秋蘭も私と同じく叩いた。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
「こんな兄だがいいのか？」
「私はそんな兄さんがいいんです」
「秋蘭もか？」
「ああ、構わないぞ」
「全く、俺みたいな化物が華琳達のような美人に好きになるなんて、

世の中間違ってるね」
「兄さんは化物じゃないです！」
「化物さ、華琳達にとっては“人間”に見えるかもしれないが、他の奴らから見れば、俺は充分“化物”なんだよ。それに“天の御遣い”の噂知ってるだろ？」
「ええ、確か
『黒天を切り裂いて、天より飛来する一筋の流れ星。
流星は天より御遣いつれて現れ、乱世を鎮静す』

『・・・またもう一人の御遣いは“死を語る魔眼”を持ち、乱世に隠れた闇を“殺”しせしめん。しかし、その者人には非ず。』
ですよね？」
「ああ、さっき北郷が御遣いだろうよ、一人目のな。もう一人は俺だよ。俺は持ってるのさ……“死を語る魔眼”ってヤツをな」
「どんなモノなんですか？」
俺は懐から短刀を取り出し、目が紅から蒼に変わっていた。

「この短刀でこの木を切れると思うか？」
「無理だろう、普通は」
「そう、無理だな。だが、俺の持つ魔眼を使って斬るとこうなる」

ズ・・バァ・・・

目に視えてる“死の線”をなぞるように斬った。
そうすると、木は自然に解体された。

「馬鹿な！？　こんなにやすやすと！！」
「……これが“死を語る魔眼”の力ですか？」
「ああ、俺には“モノ”の死が視える。どんなモノでも必ず殺しきってみせる」
「……たとえなんと言われようとも、兄さんは私の兄さんです」
「全く、兄貴冥利に尽きるよ」
そう言った後、華琳は何かの覚悟を決めたような表情だった。

「……兄さん、まだ「どんなことでも従う」の言葉、大丈夫ですか？」
「ああ、大丈夫だぞ。長い間騙してきてしまったからな、華琳にも秋蘭達にも」
「秋蘭、聞いたわね？」
「はい、聞きましたが何を？」
「兄さん、私と……結婚してください」
イマ、ナンテイッタンダ？

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」」
俺達は口が塞がらない様子だった。

「……なあ、秋蘭」
「……なんだ、真紅狼？」
「俺、今、結婚してくれって聞こえたんだが…気のせいか？」
「安心しろ、私もそう聞こえた」
確認を取る俺と秋蘭。

「……なあ、秋蘭」
「……なんだ、真紅狼？」
「出来れば、夢であって欲しいんだが…」
「現実を見ろ、真紅狼」
思考がちょっと壊れ始めている状況だった。

「ちなみに、秋蘭は側室よ」
爆弾が再び投下されました。

「いや、その理屈はおかしいから」
「どうでもいいから、結婚してください！」
「どうでもよくねぇよ！？　色々と大事だろ！！　だいたい、秋蘭には秋蘭の気になっている奴とかいるだろう！？」
そう言って、秋蘭を見ると顔を赤くしてこっちをみてる。
……こっちみんな。

「何故、顔が赤いんだよ、お前は？」
「・・・・・・・・・・・・・・・／／／／」
「頼むから、否定してくれよ！！」
「黙ってると言うことは、兄さんの事が好きだってことじゃないですか？」
「……本当にどうしてこうなった？」
頭を抱えながら、心の本心から言う俺。

「兄さんは言った筈ですよ？　『どんなことでも従う』って」

「〜〜！！　あー、もう分かったよ！！　結婚でもなんでもしてやらぁ！！」
若干、壊れ始めました。

「ただし！」
「なんですか？」
「俺は独占欲が強いぞ？　それに耐えられるか？」
「むしろ、私は有難いです。それほどまでに私を愛してくれるんでしょう？」
「なんというか、色んな意味で強くなったな」
「…秋蘭は？」
「私も華琳様と同じ気持ちです」
「そう、なら、よろしくお願いします……真紅狼様」
「様はいらないし、普段から呼ばなくていい、というより呼ぶな。下手したら戦が起きるかも……いや、起きるなコレは絶対」
ヤバいなぁ、実にヤバいなぁ。

「さて、そろそろ帰るか。アイツ等も心配してるだろう」
「そうですね」
「ああ」
華琳の策略（？）により、結婚するところまで行きました。
陣に戻ると、各方面の兵士たちから奇怪な目で見られていることが分かった。
華琳の天幕まで戻り、桂花の集めた情報によると……

『曹真は化物らしい』

というような、噂が流れ始めたらしい。
ああ、それであのような目で見ていたのか。
噂の出所は十中八九、天の御遣い達が噂したな。

なかなか、小賢しいことしてくれるじゃねぇか、北郷一刀。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

転生者・・・そして、化物（後書き）

今回はシリアスの皮を被ったシリアルです。

一刀たちの多少は見せ場を作ったらこんなに長くなった。

華琳達との結婚はまだ、公にはされません。

反董卓連合が終わる辺りに出すつもりです。

そして、次回、一刀達が外道になるかも・・・

紅き獅子（前書き）

多分、シリアス回になる・・・

紅き獅子

～真紅狼ｓｉｄｅ～
今、華琳と秋蘭を除いたメンバーが華琳の天幕に集まってる。
うん、せまい。
集まった理由は……まあ知っての通り、噂の確認だそうだ。

「で、真紅狼。兵たちの間で流れている噂は本当なのか？」
顔をずいっと寄せて訪ねてくる春蘭。……顔が近いぞ。

「まあ、そうだな。俺は化物だ」
そういうと華琳の顔が歪んでいた。

「そうか、なら……死んでもらおう！」
「色々過程をすっ飛ばしすぎだろ？！」
「勝手に殺さないでくれない？」
「か、華琳様はコイツを庇うんですか！？　我々を騙していたんですよ！？」
「私と秋蘭は皆よりも先に聞いたわ……その上で兄として生きて欲しいと命じたわ」
「まあ、ここに居る全員に俺の前世を話してやるよ……」

説明中・・・

説明してる間、華琳と秋蘭を除くメンバーは聞いていくうちに様々な表情を見せていた。
驚愕する者、泣く者、黙る者、憎む者……様々な表情が見れた。

「……こんな感じだ。さて、コレを聞いて真名で呼ばれたくない者は手を上げてくれ、挙げた者には今後一切真名では呼ばないことを誓おう」
「「「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」」」
「躊躇いなく手を挙げていいんだぞ？　俺はお前らを騙していたからな……」
それでも、聞いたメンバーは手を挙げなかった。

「手を挙げなかったという事は、皆いいのね？」
「「「「「はい！！」」」」」
「ですって、兄さん」
「……本当に全く物好きだね、お前らは……」
そう、本当に物好きな奴らだよ……

「次は兵士たちか……」
「……そうですね」
「悪いんだが……今から集合かけてくれないか？」
「分かりました」
華琳は曹操軍の兵士全員を呼び集めた。

「皆、よく集まってくれた。これから、真紅狼から話がある。心して聞いてくれ！」

「曹真……いや、蒼騎　真紅狼だ。皆、噂で気になっているかもしれないが、あの噂は本当だ」
そう言うと、ざわつく。

「そこでだ、提案がある。これは『神狼』の全部隊に関係のあることだ。
……総隊長が“化物”だと嫌がる者は明日までに各部隊長に申してくれ。
すぐさま、『神狼』の隊から春蘭隊などの方に移すつもりだ。
抜けたからと言って、俺はそいつを責めないし、文句も言わない、俺にはその資格がないからな。
あと、残ってくれた者たちからの暴力も振るわせないこと誓う。
「自分は上が化物の奴でも構わない」と言う奴だけ残ってくれ。
一日しかないが明日の朝までには決めてくれ、以上だ。
最後に、ここまで『神狼』について来てくれたことに感謝する！」

俺は未だにざわついている部下たちには顔を向けず、その場から去った。
部下たちは「お前……どうするよ？」とか「考えどころだな……」という声がちらほら聞こえたが、明日の朝になれば結果が分かるので聞かなかったことにした。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～一刀ｓｉｄｅ～
俺は真紅狼に正体を明かされた後、すぐさま朱里達に話して「何かに使えないか？」と聞いたところ「それなら勝手な噂を流して追い出しましょう」という策が出て、すぐさま行動に移った。

流した噂はすぐさま広がり、大きく膨れ上がっていった。
俺はその現状を見て、思わずニヤけてしまった。

「よくここまで、大きくなったな……」
「ええ、本当にここまでなるとは……さすがご主人様ですね」
「愛紗か……アレから曹真はどうしてる？」
「なにやら演説をやった後姿を消しました」
「これで、少しは曹操軍も魔の手から救われたかな？」
「ええ、そうですね。……そろそろ、戻りましょう。桃香様が心配します」
「ああ、そうだね（分かるか、化物（ソウシン）？　これが“天の御遣い”の力だ！　お前みたいな化物はこの外史に必要ないんだよ！！）」

一刀は自分は“英雄”だと思い込んでいた。
当然の事をしたと…、そう思い込んでいた。
だが、近い未来とてつもないしっぺ返しを喰らう事とはこれっぽっちも思っていなかった。
～一刀ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
演説を終え、人気の無い場所に居た。
自然と悲しくなってきて、いつの間にか涙がこぼれた。
転生する前の自分が見たら、なんて言うか。
そう思うと「弱くなったな」というのが感想だった。

「……兄さん」
華琳が気が付くと後ろに居て、声を優しくかけてきた。

「華琳か……、どうしたんだ？」
泣いてるところを見せたくなかったから、顔は向けなかった。

「……兄さんは、なんであの男に自分の正体を話したんですか？」
「俺は根っからの悪党以外は、最初の一度だけは必ず信じてやることにしてるのさ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「まあ、それで約束を守ってくれるなら信頼はしたかもしれないが、アイツ等は手を弾いたからな、今後連中から手を差しのべられても俺は見向きもしないし、手を伸ばすつもりもない」

当り前の話だ。
手を払った相手に、再び手を差し伸ばす奴なんかバカだ。
俺はそうして転生する前は生きてきた。
復讐するのに裏の世界に入った時、裏切りなんて日常的だった。
なら、最初から信じず裏切られること前提で付き合った方がよっぽど楽だし、面倒くさいことも起きずに済むからだ。

だが、今は護らなければならない者達が居るため、随分変わったがな……。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
演説が終わった後、兄さんを追いかけた。
追い付いた時の兄さんの後姿は、“悲哀”しかなかった。
その姿を見るだけで、胸が苦しくなった。
常に傷つきながらも私を護ってくれた兄さんの姿が、ここまでか弱く見えたのが悲しかったから。

「……兄さん」
優しく声をかけた時には、兄さんの顔から流れる雫が一瞬見えた。
兄さんは涙を見せ無いように顔をこちらに向けなかった。
話した理由を聞いてみた。

「まあ、それで約束を守ってくれるなら信頼はしたかもしれないが、アイツ等は手を弾いたからな、今後連中から手を差しのべられても俺は見向きもしないし、手を伸ばすつもりもない」
これを聞いた瞬間、もう何も言えなくなっていた。
傷つくかもしれないのに、人を信じて裏切られる。
そんな行為を繰り返していたら、感情が欠落するのも当然だ。

「…兄さん、泣いてもいいんですよ？」
「なんで泣かなきゃならないんだよ？」
「辛いんじゃないんですか？」
「辛くねぇよ」
兄さんは気付いていなかった、どんな状態に顔がなっているのかを。

「……涙が出てますよ？」
「あ？　……なんで出てんだ？」
「辛いからに決まってるからじゃないですか」
「辛くねぇっていってんだろ！」
「今なら、泣いてもいいじゃないですか？」
「……華琳、来てくれ」
「…はい」
「スマンが少し……みっともない…姿を……見せるから……傍に居てくれ」
「……はい、何時でもいますよ」
そう言った後、兄さんは私の両肩に手をかけて、顔を俯かせ……
…泣いた。

「あ……あ……ああぁぁぁぁぁぁ！！」
溜まりに溜まった涙が地面に落ちていく。
このとき、私は決めたのだ。

兄さんが辛い思いをしないように、私も兄さんを護っていこう、と。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
あれから、泣き続けた。
今は溜まったモノがなくなり、スッキリしている。

「あー、思い返したら妹の目の前で泣くなんて、恥ずかしくて別の意味で泣きたくなってきた」

「……大丈夫ですよ、この場所では“妹”じゃなくて“妻”としていますから」
「それでも恥ずかしいんだよ。……自分の天幕で寝るか」
「あ、今日は兄さんの部屋で寝ますから」
「オイコラ、ちょっとマテや！　自分の天幕があるだろ！　豪華なヤツが！！」
「兄さん……ダメですか……」
つぶらな瞳でこっちを見てくる華琳。
なんだ、コレ？
すごい罪悪感がひしひしと湧いて出てくるんだけど……？
俺が悪いの？
おかしくね？　この状況。

「……勝手にしてくれ」
「はい、勝手にします」
俺はコートの中に華琳を入れて、天幕のところまで戻った。
だって、一緒に入ったりしたら後々面倒だろ？

その後二人は別々に寝たが、朝起きてみると何故か華琳が俺の寝床に潜り込んでいた。
……あるぇ～？

とまあ、不可解な出来事が起きながらも、集合場所に向かった。
覚悟はいつでも出来ていた。

「雅達は来てたのか……」

「まあね！　あんな話聞いちゃって、最初は怒ったけど、話してくれたから許すよ」
「「「私たちも同じです」」」
「……………そうか」

そして時間になったが……………部下は誰も来なかった。

「まあ、そうだよなぁ…………」
そう言いながら、顔を逸らしたら、後ろから野太い声が響き渡った。

『総隊長ーーーーーーーーー！！！！！』
『うおおおぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！』
「………なんで、こんなにいるんだ？」
「フフッ、それはね真ちゃん。皆で驚かそうって提案したんだよ。しかも一人も去らずにね」
「……提案？」
「一種の悪戯だよ」
まったくコイツラは………

「おい、総隊長が泣いてんぞ！？」
「なに、それは本当か！？」
「嬉し泣きってやつか！！」
「うっせぇ！！　さっさと持ち場につけ！　このガキ共！！」
『応！！』
全く持って、良い部下を持ったよ。

そして、今、俺は黄巾党に潜り込む為装備と言っても、ガンブレードと専用ホルスターを華琳に預けている。

「んじゃ、俺は行くぜ」
「なんで、行かなきゃならないんですか？」
「どこに居るかも分からない相手だ、場所の特定をするならこれが一番早い」
「兄さん……ちゅっ？」
「え、は、あ？」
「これはまあ……その……前置きです！！」
「意味がわからねぇよ」
「……私も分かりません」
言った本人も分からないのかよ……。

そうして、俺は黄巾党に潜入するべく荷物を預け、陣営から出ていくこととなった。
右側には華琳が率いる曹操軍が、左側には北郷たちが率いる劉備軍がいた。
その間を、堂々と歩いていくうちに突然、小石が投げられた。

ヒュッ！

多分劉備側の兵士だろう。兵士の一人が投げた直後、自分達もと劉備軍の兵士たちは小石を俺に投げつけまくった。
その内の一つが俺の頭に当たる。

ガンッ！
ポタ……ポタ……

「・・・・・・・・・」

ジャリジャリ……

頭から血を流し始めた俺は、それでも倒れることなく歩き続けた。
華琳達を見ると、春蘭を秋蘭が必死に止めて、雅を凪や真桜たち三人で押さえこんでいた。

ちょうどいい、華琳達にも三文芝居に付き合ってもらうか。
左手の鋼糸を展開させて、声を届かせた。

「（華琳、聞こえるか？）」
「兄さん？！　大丈夫ですか！？」
「（ああ、大丈夫だ。それよりもお前らも小石を投げろ）」
「何を言うんですか！？　出来ません！！」
「（連中に思わせるためだ。芝居を打った方が今後にも役に立つ）」
「……しかし！！」
「（……なら、こうしよう。この乱が終わったら、俺と華琳、秋蘭で一日のんびり過ごそうじゃないか）」
「……分かりました。絶対ですよ？」

「（ああ、絶対だ）」
そこで鋼糸を戻し、未だに飛んでくる小石を防がず、気にせずに歩いていく。

臆さない俺に業を煮やしたのか、一人の兵士が弓で射ってきた。
さすがにそれはヤバいので、背中で受けた。

ザシュザシュザシュ！！

背中に受けて、倒れそうになったが、ふんじばって歩き続けた。
曹操軍もちらほらと投げ始めるが、華琳の配慮か当てないようにしたらしい。
時折、見える表情は辛そうだった。
華琳なんか、爪が喰い込むほど手を握りしめていた。
そこから、数分間の仕打ちに耐え続け、出口が見えた。
もうすでに俺の姿は酷いものだった。

背中には何本の矢が刺さり、頭からは血がたくさん流れていた。
しかし、倒れることなく悠然と歩く姿に両陣営は息をのんだ。

まるで、獅子のように弱いところを見せず、血だらけになっても歩く猛々しい姿を誰かが呟いた……

――――『紅き獅子』――――

と。

俺は陣から出る瞬間、華琳の顔を見た。
涙を流しながら、俯き、手からは喰い込み過ぎたのか血が出ていた。

何故、お前が泣く？
お前は正しいことをやったんだ、泣くことはないだろう。
一生の別れみたいな表情をするな、必ずお前と秋蘭の元に戻ってくる。

そこで、俺は気がついた。

ああ……
やっぱり一番辛いのは……

『家族の涙』

……と。

～真紅狼side　out～

紅き獅子（後書き）

この作品の一刀は自分通りにいかなければ納得しない迷惑ヤローです。

蜀ファンの方、ゴメンナサイ

前回の最後のｓｉｄｅの部分申し訳ありません。

混同しました。

幻真はハイスクールＤ×Ｄの主人公でした。

しかも、素でミスった・・・

命の恩人と会う（前書き）

凄い書きにくかった。

まあ、あと二、三話で黄巾党の話しは終わる予定です。

命の恩人と会う

～真紅狼ｓｉｄｅ～
あの後、血だらけになりながらも黄巾党の元に潜入するべく、俺は近くの黄巾党の集団を探した。
その間に噂は広まり尾びれまで付いて、勝手に歩きだした。

「紅き獅子は天の御遣いによって追い出された」
「曹操は獣の紅き獅子よりも美男子の天の使いを選んだ」

などと色々と酷い言われようである。
しかも、雅に与えた刀の銘が『桜狼刀』から『天桜刀』に変わっていた。
いやはや、そこまで変わるのかよ。
民の口ってのは怖いね。

血が多少収まりながらも歩く俺の先には黄巾党が居た。
しかも、何故かリーダーらしきものが一歩前に出て、手を出していた。

「辛かったろう、ここは誰であろうと差別、区別はしない。俺たちは平等だ」
「……そうか、感謝する。…「がぁ」っ！！」
「大丈夫か！？　その傷どうした？！　まさか連中にやられたのか！？　おい、誰か医者の先生を呼んでくれ！！」

「私なら、ここにいますよ」
「先生、コイツを看てやってくれ！！」
「これは……！！　大変な状態ですね、これから治療しますので皆さんは騒がないようにお願いします」
「分かった」
「では、こちらに運んでください」
そう言ってるのが誰かも分からないまま俺は目を閉じた。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
兄さんが傷を負いながらも出ていき、完全に姿が見えなくなった瞬間、天の御遣いが居る劉備軍は歓声を上げていた。
そのあと、劉備たちが私たちの元の寄って来た。

「大丈夫ですか、曹操さん？」
「なんですって？」
「私たちがあの“化物”を追い払いました！！　あの“化物”の力でおかしくなった方とか居ませんか？」
コイツラは兄さんを“化物”、“化物”と呼び始めて、挙句の果てにはあんな仕打ちまでして絶対に許さないわ！！
ここであの男を殺してやりたいけど……
それをやったら兄さんが心を殺してまで私たちにやらせたことが無駄になってしまう。

「大丈夫ですか、曹操さん？」
「……ええ、大丈夫よ。私はこれから会議があるから失礼するわ」
「はい！　一緒に乱世を平定しましょう！！」

そう言って、後ろで劉備は自分たちが先程まで何をしていたのかを忘れるほどの笑顔を出していた。

「必ず後悔させてあげるわ……」
そう誓う華琳達だった。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
気が付くとどこかの天幕に居た。

「うっ！　ここはどこだ？」
「――気が付きましたか？」
「……貴方は？」
「私はこの黄巾党で医者をやっています」
「黄巾党で医者？」
「はい……　お久しぶりですね。真紅狼君？」
「……！！　何故、俺の名を？」
「私とあなたは一度会ってるんですよ」
「どこで？」
「貴方がまだ子供だった時、熊に襲われましたね？」
「！！　なるほど、俺を助けてくれた医者の先生か……　案外世間ってのは狭いな」
「本当ですね。で、どうですか、傷は？」
「ああ、だいぶ良くなった。感謝する」
「……貴方がここに来たと言う事は、狙いはあの“書物”ですか？」
「そこまで知っていたのか」
参ったね、いきなり俺の目的がバレるとは……。

「アレは元々、俺達曹操軍のものだ。……それに、あの書物、結構禍々しい力を持ってたしな、面倒な事態を起こす前に片付けたいんだよ」
「しかし、彼女たちがそう簡単に手放すとは思えませんが……」
「手放さなきゃ、三人とも死ぬぞ？　それに集まっている親衛隊の連中も死ぬな」
「……あの書物さえ渡せば、彼女たちは助かるんですか？」
「まあ、原因の元がソコから離れれば、この大群も自然消滅するだろ」
「分かりました、私がなんとか交渉しましょう」
「先生ってもしかして結構顔が効くのか？」
「ええ、これでも医者ですからね……。様々な患者が来るのでその際に仲良くなりました」
「人徳ってのは素晴らしいね」
「……では、参りましょうか」
「って、俺も行くのか？！」
「はい、だって真紅狼君の方が詳しく話せるでしょう？」
「言いだしたのは俺だし……当然か」
そう言った後、歩けるレベルまで回復した俺は、先生の後に付いていった。
先生の後に付いていくと、すんなりと張三姉妹になんなく会えた。

「失礼する……キミたちが張三姉妹か？　俺は曹真。訳あって話しがしたい」
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～張三姉妹ｓｉｄｅ～
私たちは、旅芸人だったが、歌を歌ってもなかなか人が集まらなかった。
そのとき、眼鏡を掛けたお兄さんが近づいて来て、「この書物を差し上げます」そう言って、去っていった。
その後、私たちはその書物を持って、いつもどおりに歌を歌っていたら急に人が集まって来た。

「わわっ！　なにこの人の数！！」
「あの書物を渡されてから、凄い人が集まるようになったよね！？」
「あの書物が私たちの歌の力を増幅させているんじゃないかしら？」
そうして、移動しながら歌を歌い続けたら、いつの間にか大きな集団になってしまった。
皆は『親衛隊』とか言っていて、私達を守ってくれるが中には盗賊まがいな事をしている人たちもいた。
その事に気がついた私たちは、「この書物を捨てよう」という話が何度か出たが今更ここまでやってきて親衛隊の皆がどうなるのかを考えたら、捨てるに捨てきれなかった。
そんなとき、医者をやっている先生と見知らぬ男が入って来た。

「失礼する……キミたちが張三姉妹か？　俺は曹真。訳あって話しがしたい」
「「「！？」」」
「曹真？！　ってことは、貴方は曹操の兄を名乗ってる人！？」
「ああ、そうだ。要件を手短に話したいんだがいいか？」
「……要件？」
「――キミたちが持っている書物を渡して貰いたい」
「何故、それを！？」

「無理に決まってんでしょ！」
「キミたちが持っている書物は碌なことにならないぞ。――今、曹操軍と義勇軍はキミたちを討伐する為に動いている。……俺がここに潜入したのもその一環だ」
「なんですって！？」
「このままではキミたちは死ぬし、親衛隊の連中も死ぬだろう。だが、その書物さえ渡してくれたら、こちらで身柄の保証はしよう。少し時間を与えるから考えてくれ」
「分かり……ました」
そう言うとさっさと出て行く曹真。

「どうするの？」
「このまま無視して、官軍を潰すわよ！」
「でも、私たちの勝手で皆を巻き込めないよ！！」
「それは……そうだけど」
「それに曹真さんは私たちの身柄を保証するって言ってたし……」
「それで、いいのね？　天和？」
「私はいいよ、地和は？」
「お姉ちゃんがいいなら……」
「なら、二人がそこまでなら私は言う事ないわよ……曹真を呼ぶわよ？」
「「うん」」
先生に言って、再び呼んでもらった。

「決まったかい？」
「ええ、貴方にその書物を渡すわ……「そうか」でも！！」
「……なんだ？」
「最後に一度だけ皆の前で歌わせて……それぐらいはいいでしょう

？」
「別に構わないぞ、ちゃんと渡してくれればいい話だ」
「……有難う」
「では、俺は目立たないように木陰で見ていよう」
再び消える曹真。
これで、私たちの夢も終わりか……。
あっけなかったな…。
いや、まだだ。
まだ、大きな最後の仕事が残っている。

「二人とも最後の仕事に行くよ！！」
「うん！」
「はーい！」
そして、私たちは最後だからこそ、華やかで派手にやった。
～張三姉妹ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
遠くから見ているところに先生がやってきた。

「隣、よろしいですか？」
「…っと先生か、どうぞ」
「どうも。華やかですね……」
「そうだな……」
「曹操さんは元気ですか？」
「華琳なら元気だよ」
「ところで道中で聞いたんですが、曹操軍から追い出されたってのは本当ですか？」

「ん？　あー、あの噂ね。まあ、本当って言えば本当なんだが……」
「……なにか訳がありそうですね」
「なんというか、華琳の意思じゃなくて、第三者の策略によって追い出されたって言った方がいいかな？」
「第三者って言うと……天の御遣いという方ですか？」
「そ、信用して俺の秘密を話したんだが……見事に裏切られてね。それによって今に至ると言うわけだ。――恩返しならぬ仇返しっていうのかね？」
「仇返しとは……嫌ですね」
「慣れているから、別にいいんだがな」
「――真紅狼君の秘密というのは？」
「先生なら話しても大丈夫かな。……出来れば他言無用でお願いしたい」
「分かりました……して、秘密とは？」
「俺は……この世界の人間じゃない」
「……薄々は分かってましたが、やはり……」
先生は元々分かり切っていたのかよ！
どこでバレたんだ？

「どこで、分かったんですか？」
「キミを初めて助けた時、治療中に熊にやられた傷以外の擦り傷などが、勝手に治ってたのを見たんですよ……」
「……そんなに早くからかよ」
「それで頭に過ったんですよ、「この方はこの世界の人間ではないかもしれない」とね」
「なるほど、それで俺の秘密を聞いて確信を得た。……と」
「ええ」
そんなことを話していたら、ライブが終わったようだ。

「どうやら、終わったようだな」
「……終わりましたね」
「これから、先生はどうするよ？」
「私はそうですね……旅を続けます」
「なら、ウチに来ないか？」
「真紅狼君のところにですか？」
「ああ、ウチの軍は軍医が居ないから……どうかな？　と思って」
「それもいいですが、私……あの子達を『護る』って決めたんですよ」
「そうか…なら、仕方がないか。さて、書物の回収を……」
回収しようと思ったとき、向こう側から地和達が走って来た。

「大変だよ！！」
「どうしたんだ？　地和？」
「書物が盗まれちゃった！！」
「盗まれた……だと！！」
「……うん、歌を歌い終わって渡しに行こうとしたら、書物を渡した“お兄さん”が出てきて、「これは返して貰いますね」って言って、盗っていっちゃったんだ……」
「“お兄さん”ってのはどんな奴だった？」
「道士みたいな奴で、眼鏡かけてて若い男の人だった」
「そうか。……安心しろ、書物が無くなっても保護の件は無くさない」
「本当！？　よかった～～」
「それじゃあ、俺と先生はこの集団から離れるぞ」
「ええ！？」
「いつまでもここに居ると暴動が起きかねないからな。少し離れながら後をついていくだけだ」

「あ、そういうことなんだ」
そのとき、後ろから天和と人和が来た。

「話しは纏まったの？」
「だいぶな、この後の行き先だがここから北に下っていけ。そうすれば曹操軍達に会える」
「何故、会う必要があるの？　もう解散したから会う必要は無いでしょう？」
「形式上、黄巾党の終わりを見せていた方がいいからだ」
「……分かったわ」
「後の事は地和に話してあるから、そちらから聞いてくれ」
そうして、俺と先生はこっそりと黄巾党から抜け出した。
天和たちは、うまく親衛隊を誘導して華琳達の方に向かって行った。

それにしても“道士みたいな奴で眼鏡をかけた若い男”か……。
最悪、戦闘になるかもな。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

命の恩人と会う（後書き）

于吉さん、登場。
僅かだけど・・・。

次回辺り真紅狼が大暴れするかも？

最近腰が軋む・・・何故？

【追記】
若干修正

汝、かの者、怒らすことなかれ……（前書き）

連続投稿……だと……？！

真紅狼マジギレ

汝、かの者、怒らすことなかれ……

～真紅狼ｓｉｄｅ～

張三姉妹はうまく曹操軍達が居る方向に誘導していた。
後ろから少し離れて付いていく俺と先生は無事に終わると確信していた。
そんなとき、地和が言っていた男が突然、天和達の前に現れ、手に持つ『太平妖術』で親衛隊を操ってりながら、奪って行った。

「……フフ、多少兵を貰って行きますよ。では、失礼……」

その場から音も無く消えた。

「地和が言っていたのはアイツか！！」
「天和さん達は無事ですか？」
「ああ、無事だが……奴はドコ行った？！」
現状確認していると、曹操軍の方から大きな動きと争った声が聞こえてきた。

「……華琳、秋蘭！！」
「真紅狼君は行ってください！！」
「…大丈夫なのか？」
「……護りたい人がいるんでしょう？」
「ッ！！　スマン、先に行く！！」
そこまで言われて俺は急いで曹操軍に向かった。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～于吉ｓｉｄｅ～
この『太平妖術』で私は歴戦のどの武将よりも圧倒できる力を手に入れた。
素晴らしい、実に素晴らしいですよ！
この力は！！
自分の力を示す為に、あの屈強な曹操軍を打ち負かすとしましょう。
そのために少々、人を貰いますか……

「……フフ、多少兵を貰って行きますよ。では、失礼……」

そう言って転移をして、曹操軍のど真ん中に転移し力を振るった。

「敵襲！　全員備えろ！！」
「邪魔くさいですね……行きなさい」
そう命じただけで、私の力で操られ力を増幅した男たちは曹操軍の兵士たちに将をも薙ぎ倒していた。
これで私はこの世界の神になれる！

「貴女が……曹操ですか」
「貴方、一体何者よ！」
「私は于吉と申します。……ですが、すぐに忘れると思うので覚えなくて結構ですよ」
「……ぐぅ！　華琳様から離れろ！！」

「止めておきなさい、私の力であなた達は思う様に動けないんですから」
私の周りから4，5メートルは『太平妖術』の力でこの場一帯を見えない力で抑えつけている為、全員が地面に伏せている状態だ。

「とにかく、こちらの要求は曹操か劉備、そして天の御遣いの二人をこちらに渡してくれれば他の方は助けますよ？」
「こと……わるわ！　だれが貴方に屈するものですか！！」
「――気が変わりました。曹操、貴女は生かしましょう、私の手によって堕ちていく姿を見たくなりました」
そういって私は曹操のそばまで行き、顎をぐいっ！と持ちあげた。

持ちあげた瞬間だった……。
この世の声とは思えないほどの怒号が聞こえたのは……
～于吉ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳ｓｉｄｅ～
黄巾党の本隊に迫っていた時、いきなり陣の中心に現れた謎の集団が私達に襲いかかって来た。
最初はどうにかなっていたが、中心にいた男が何かを呟いた瞬間いきなり頭上から見えない力で抑えつけられていき、まともに立ち上がることすらできなくなってしまった。
そこに例の男が私か劉備、それと兄さんと北郷さえ差し出せば他の者の命は助けると言った。

拒否する姿勢を見せると于吉は私だけ生かし、あまつさえ……

「――気が変わりました。曹操、貴女は生かしましょう、私の手によって堕ちていく姿を見たくなりました」
なんて気持ち悪いことを言ってきた。
ちなみに、天の御遣いである北郷は口では「ちくしょー、勝負しろー」なんて言っているけど、まったく役に立たなかった。
……役に立たない男ね。
于吉が近づきながら、私に触れてきた。

「（……兄さん！！）」

その想いが天に伝わったのか、向こうの丘から怒号が聞こえた。
～華琳ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
曹操軍を全体を見える丘に行くと、華琳たちが于吉によって伏せさせられていた。
そして、次の行動で俺は激怒した。
于吉が俺の女に乱暴に扱ったのだ。

「……ぅオオオオオオオォォォォォォォォォォォ！！」
まるで狼のような咆哮、その声が下にいる華琳達の元に響き渡った。

「そこの眼鏡をかけた優男！！　何勝手に俺の女に手ぇ出してんだ、

ゴラァ！！！」

俺は後ろにある木々を鋼糸で伐採し、先端を尖らせ、何本かを持って于吉の元に向かった。

于吉は操っている男たちをこちらに飛ばしてきたが、そこに巨木の槍を投げ飛ばし、数人の腹目掛けて突き刺さりその辺で転がっていた。

ブンッ！
グシャブシャ！！
ドガガガガ……

于吉はその光景に恐怖し、声を震わせながら、「い、行きなさい！！」と残りの戦力を全部投入したが、ほぼ巨木の槍で突き刺されて死んでいった。
槍がなくなり、しめたと思ったのか于吉は残りの男たちをさらに強化して襲いかかって来た。
その中の一人の男が右腕で思いっきり振りかぶったのを見て、俺は逆らう事でさえ恐ろしい事を目に焼き付けさせることにした。
右腕を曲げ、痛みを伴いながら角を出現させた。

「っ、がぁぁぁあああ！！」

ブチッ！
ブチブチブチ！！
にゅぶ……

肉を突き破る音が辺りに響き渡り、そこから……

右腕の肘辺りから骨――――いや、角を出した。

「はぁぁぁぁぁぁ……」

角を出したことによって、体が急激に熱くなり、力も急激に上昇し吐く息が白くなっていった。

ゴキッ！
ゴキゴキ……ゴキン！

硬くなった指を動かし、拳を作り、振り降ろしてくる男の拳と俺の拳をぶつけた。

ブチンッ！
ゴキ……ゴギリ！！

振り降ろした男の腕は容赦なく吹き飛び、そこから血が噴水のように飛び出ていた。しかも、衝撃が体全体に伝わり、ろっ骨や腰の骨にヒビもしくは砕いていた。

この光景に劉備軍は目を逸らしていた。
嗚咽を吐いてる者もいた。

「さて、そこの優男、俺はアンタに用があるんだよ」
「く、来るな！！」
腰が抜けていながらも、必死に後ずさっていた。
動きを止めるために、近くにあった小石を奴の足に向けて軽く投げた。

ゴキンッ！？

「ぎゃあああああああ？！」
足に当たった小石はいとも容易く、于吉の足を折った。
痛みにのた回る于吉の元に一歩、また一歩と近づく俺。

「于吉さんよォ、まあそのあれだ。
テメェは手を出しちゃいけないモノに手を出したんだ……
だからさ――――――――――――――――――――そ

の首、俺が貰い受ける……！！」
「待って！！」
そこには術の拘束が解けたのか、劉備が于吉を庇っていた。

「……そこをどけ」
「待って、曹真さん！　この人は酷いことをしたけど、ここまでする必要はないよ！！」
「……ハッ、なんだ劉備？　アンタそいつを庇うのか？」
「そこまでする必要は無いって言ってるの！　この人も充分罰を受けてるし……」
「……甘いな、そいつの目を見てみろ、どうやってこの場から逃げ出すか算段している眼だ」
「……その通りですよ。劉備さん貴女は本当にいい人だ。私が無事に逃げれる為に人質になってもらいましょうか」
そういって痛みに耐えながら、立ち上がり劉備を突き出しながら、引こうとしていた。

「曹真って名乗りましたね、貴方。顔は覚えました、絶対に後悔させた後、殺して上げます」
「捨て台詞まで三流とは酷いモノだな……劉備には悪いがコイツが生きてると俺の女に害が及ぶ為、殺すことは出来ないがケジメは付けさせて貰う」

じりじり……
少しずつ于吉に近寄る俺は懐から短刀を忍ばせる。

「くっ！　近寄るな！！　近寄れば劉備の命は無いぞ！？」
後ろに下がる于吉。
于吉は少しだけ、俺から目を逸らした。

「――――弔毘八仙、無情に服す」

その瞬間を狙って、高速で迫り一撃を叩き込んだ後于吉の後ろに居た。

「いつの間に後ろに！！」
「劉備も帰して貰ったがな……」
「馬鹿な！！　ちゃんと掴んでい・・・た・・・・はず・・・・・？」

ゴトッ……

于吉は左腕を見ると自分の腕が落ちていることに気がついた。
そこで疑問に至った。
「何故、自分の腕が落ちている？」と……。
答えは簡単、真紅狼が“直死の魔眼”で死の線を沿って左腕を斬ったからだ。
この後、つんざくような悲鳴が木霊した。

「ぎゃあああ、腕が！　私の腕がァァぁあああ！！」

悲鳴を上げているバカは放っておいて、華琳達が無事かどうかを確認した。

「……大丈夫か？　華琳」
「あ、はい。大丈夫ですけど……」
「秋蘭に雅、春蘭達も無事か？」
「「「ああ（はい）」」」
「……よかった」
于吉はいつの間にか消えていて、斬られた腕も持ちかえったようだ。
よし、乱も終わったし、帰るか。

「ちょっと待ってください！！」

まあ、そんな簡単にうまくいかないのが世の常である。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

汝、かの者、怒らすことなかれ……（後書き）

真紅狼がシズちゃんに見える・・・アレ？

一応このお話で黄巾党編は終わりです。

次回は劉備達と問答です。

『正義』と『悪』（前書き）

今日も投稿・・・。

『正義』と『悪』

～真紅狼ｓｉｄｅ～
于吉もぶった斬って「これでよし！」と思ったら、劉備によって止められた。
……空気を読め！！

「…なにか用か？」
「なんで……あんなことをしたんですか？」
「あんなことってどんなことだ？」
「先程の事ですっ！！」
「于吉の腕を斬ったことか？」
「それです。あの人はもう罰を受けていました……。それなのに何故、あそこまでする必要があったんですか！？」

コイツ、本当に分かっちゃいないな……。
むしろアレで済んだことが救いだと思ってもいない。
腕を斬ることでケジメをつけさせてやったんだから感謝して欲しいぐらいだ。
斬ってなかったら、角を出した腕で体の骨が全身叩き折っていたところだぞ？
斬られるよりも痛い思いをすることになるのにな……。

「……お前らは親から習わなかったか？　「人のモノに手を出すな」と……」
「習いました……。でも、それとこれは別です！！」

「――テメェだって大事な物に手を出されたら怒るだろうが、それと一緒だ」
「私は許します」
「……ハァ、甘いな」
そう言うと、今まで部外者だった連中が騒ぎたてる。

「貴様、桃香様を侮辱する気か！？」
「お姉ちゃんをバカにすることは許さないのだ！！」
「お前みたいな奴に桃香の夢が分からないクセに黙れ！！」
あーもー、イライラしてきた。
なんで、コイツラまで助けちゃったんだろ？
数分前の自分を殴りたい……
というか、最後に言った北郷、テメェは何もやっていないんだから黙ってろ！！

「……劉備、アンタの夢ってのはなんだ？」
「……え？」
「夢を聞いてるんだ」
「私の夢は『みんなが笑って、平和に暮らせるような世の中』を創りたいんです」
「夢幻だな、それは」
「貴様！！」
「それは……どういう意味ですか？」
「本当に『みんなが笑って、平和に暮らせるような世の中』なんてものが創れると思ってんのか？　無理に決まってんだろ。何かを成す為には犠牲はつきものだ……。仮に出来たとしても、どこかで破綻する……確実にな。劉備、お前の目指しているモノは幻であり、偽善なんだよ」

「偽善じゃありません！！　私たちは現にうまくいっています！！」

本当に分かっていねぇな。
お前はコイツラの君主だろ？
なのに何故、背負うべきモノから目を背けている？
おかしいだろ？
ダメだ、そろそろ我慢が出来なくなってきた……華琳と秋蘭が傍に居れば、多少は落ち着くかもしれないので、華琳達の傍に行こう。

「……兄さん／／／／」
「……真紅狼／／／／」
「なんで顔が赤いんだよ？」
「「・・・・・・・・・・・・・・／／／／／／／／」」
なんかやったか、俺？
うん、やっぱり落ち着く。
そう一息ついていたら、今度は選手交代なのか北郷が対戦相手のようだ。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～桃香ｓｉｄｅ～
私は帰る曹真さんにどうしても聞きかった。
何故、あそこまであんな酷い仕打ちをしたのかを……
理由は子供でも分かるような理由だった。
そうすると、曹真さんは――

「甘いな」

そう一言いってきた。
その後の曹真さんは私達を冷めるような目で見てきている。
私の夢の話しになって堂々と言ったら、私の夢を全否定するようなことを言われた。
それが悔しくて、言い返そうと思ったらご主人様が立ち上がり「代わりに話す」と言って曹真さんと対面した。
～桃香ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
今度は、北郷かよ。
メンドクサイな、本当に。

「何か用か？　役立たず」
「・・・・・・（カチン！」
「おっと失礼、口が滑った。何か用か“天の御遣い（笑）”殿？」
「……化物には礼儀が通用しないのは当り前か」
「こりゃ失敬」
「お前は桃香の“夢”の凄さが分からずに否定した……。まあ、化物だし『悪』だし分からないよな」
「なんだ？　自分たちがまるで『正義』とでも言いたいのか？」
「そうだ」
「……く、クク、ハハハハハハ！！　コイツはイイ！　俺が『悪』でお前らが『正義』か！！」
「なっ！？　実際にそうだろ！　人を無残に殺したりしてる奴が何を言ってんだ！！」
「テメェ等みたいな“覚悟”を持っていない奴が舐めたことぬかし

てるんじゃねぇ！！」
「劉備！　お前に一番足りてないモノを言ってやるよ。それは“覚悟”だ。
何を成す為には犠牲を払わなければ、夢は実現しない……。犠牲を払う“覚悟”が無いんなら、今すぐ義勇軍を解散させろ。――――目障りだ」
「なら、お前には“覚悟”があるのかよ！？」
「あるぞ？　俺は命を賭けてまで『護りたい者』が居る。――その為だったら俺は『悪』だろうが『化物』だろうが何にでもなる“覚悟”がある。
そしてもう一つ言っておく『正義』や『悪』なんてどれが正しいのかは一つも無い。……捉え方の違いだ」
「……だが、お前は俺にとっては『悪』だ」
「そうかい、勝手に思ってろ。俺にとってはどうでもいいことだがな。さて、天和達だが……劉備、アンタに保護してもらいたい」
「何故だ？」
「俺達、曹操軍じゃ常に危険なんだ。それなら一番安全なアンタらのところに保護してもらう事が妥当だろう？　――済まないが先生、こんな決定にしてしまって……」
「私はいいですよ。彼女達を保護してくれるだけで有難いですし……」
「まあ、“劉備軍”としては歓迎は出来ないが“友人”としてならいつでも歓迎するよ」
「分かりました、覚えておきます」
そう言って、俺と先生は握手した。

「これで、話しは終わりだ。劉備……次会うまでに“覚悟”を背負う事が出来るかどうか……「真紅狼」……なんだ、桂花に風？」
最後まで言い切ろうとした瞬間、桂花達に邪魔された。

だあ！！
邪魔するなよ。――ふむ、なるほど、分かった。

「おい、北郷」
「なんだ、化物」
「平原の方にまだ黄巾党の残党がいるそうだ、アンタ達に追撃を任せるよ」
「……………手柄が欲しいのだろう？」
「お前らがやればいいだろうが！！」
「……くっ」
「食糧とかは分けて与えてやるから、追撃任務をこなせよ」
「…………分かった。だけど、絶対後悔させてやる」
「テメェじゃ一生無理だ」
「そんじゃ、曹操軍はこれより帰還する！！　全員準備に取り掛かれ！！」
「「「「「「応！！」」」」」」
あー、疲れた。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳・秋蘭ｓｉｄｅ～
兄さんが助けてくれてから北郷達と問答している間、ずっと顔が赤くなっていた。
秋蘭も同じのようだ。
原因は分かってる、兄さんが丘の上で叫んだ言葉だった。

『――何勝手に俺の女に――』

兄さんは激怒していてそこまで回っていなかったと思うが、これを聞いた瞬間まったく落ち着かなくなってしまった。
秋蘭に至っては終始顔が赤くなっていた。
いつの間にか兄さんがこちらに来ていた。

「……兄さん／／／／」
「なんでさっきから秋蘭と共に顔が赤いんだよ？」
「……真紅狼は自分が言ったことに気が付いていないのか？」
「俺が言ったこと……？」
「……丘の上で叫んだときです」
「ん～？　え、あ、――あ”？！」
どうやら、思い出したみたいで止まっていた。

「怒っていたから、無意識のうちに言っていたよ……」
「い、いえ、私も…その……嬉しかったですから／／／／」
「……こう堂々と言われると恥ずかしさよりも尊敬するけどな」
「…うるせぇ、取り敢えず、早く帰ってあそこに居る自称“正義の味方”を平原に向かわせよう――腹が立ってきた」
「そうですね……全員、帰るわよ！！」
「「「「「「はっ！！」」」」」」
兄さんには明日ぐらいに『約束』を思い出して貰おう。
～華琳・秋蘭ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

陳留に帰ってきた俺たちは外で待たせている劉備軍に食糧を分け与えて、平原に向かわせた。
その間、劉備たちは春蘭達をスカウトしていたらしい。

……スカウトという名の口説きだと俺は思うが、手が早くないか？

『正義』と『悪』（後書き）

作中で語られている『正義』と『悪』については私の勝手な見解ですので気にしないでください。

区切りがいいところまで持っていたかったので、他の作品を置いて投稿しました。

次回はのんびりな日常でも書こうと思います。

まあ、他の作品が更新してからなんですけどね……

休日（前書き）

たまにはこんな日もあってもいいと思う。

休日

～真紅狼ｓｉｄｅ～
あの後、家に帰って風呂入ったらすぐ寝た。
……だけど、体はいつも通り朝早く起きてしまった。
あくびをかみ殺しているんだが……ふぁ、ねむ。

畑に行き、野菜が実っていたので数種類収穫して、竹籠に入れて、
中庭にある冷たい小川に吊るして、冷やすことにした。
……ちなみに、昼飯のつもりだ。
一応、朝の仕事は終わったが、やっぱ眠い。
二度寝するか……ｚｚｚ
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳・秋蘭ｓｉｄｅ～
黄巾党の乱が終わり、無事に陳留に帰って来た。
本来なら、こういう乱があった後は、昼から政務などを始めるが今日は朝からやっている。
理由は簡単、兄さんとの約束を果たして貰う為だった。
その為か秋蘭も朝からやっている。

ガリガリガリッ！
トントントントン！！

「そっちは終わった？　秋蘭？」

「はい、こちらは終わりました。……華琳様は？」
「こっちもちょうど終わったわ」
「なら、今日の分はこれで終わりですね」
「じゃあ、置き手紙を書いて、行きましょうか」
「はい」
そう言って、置き手紙を書いて執務室から出て、目的地の兄さんの家に向かった。

移動中……完全な朝になったとは言えまだ人の姿はまだらだったが、私の元に数十人の民が駆け寄ってきた。

「「「……曹操様、お早うございます」」」
「ええ、お早う。どうしたの？」
「……曹真様が黄巾党を討伐する際、天の御遣い率いる劉備軍に酷い仕打ちを受けたと聞いて、無事かどうかをお聞きしました」
「ちゃんと無事よ、貴女は？」
「私は見舞いの品として、果物をお渡しください」
「有難う」
「私は、魚介類を箱に入れて持ってきましたので」
「ええ、本当に有難う」
そう言って、見舞いの品だけで荷車を引くほどの量になってしまい、馬を持ってきて再び兄さんの家に向かった。

「……いつの間に兄さんは民から慕われていたのかしら？」
「さあ？　私にはご存じありませんが、それも真紅狼の惹かれる部分かもしれませんね……」
「……そうかもしれないわね」

「『勝手に入っていい』って言ってましたね、確か」
「一応、声をかけておきましょうか……。兄さーん、入りますよー？」
声をかけたが返事は無かった。

「今まで、ちゃんとした休みが取れていなかったから、ぐっすりと寝ているんじゃないでしょうか？」
「あー、そうかもしれないわね。家に上がりましょうか」
そう言って、ちゃんと靴を脱いで家に上がり多分居るであろう居間に向かった。

「兄さ～ん、起きてますか～？」
「真紅狼～、どこだ～？」
そう言って、居間の途中の部屋も確認しながら居間に向かう二人。

「あ、華琳様…見つけました」
秋蘭は声をいきなり小さくしていた。
自然と私の声も小さくなりながら、どこか聞いた。

「どこに居るの？」
「あそこの庭側の通路に居ます」
向かうと、兄さんはやはり寝ていた。
それも気持ちよさそうに……
その表情を見てると、自然と心が落ち着いてきた。
――突然、ある事がしたくなったのでやってみたくなった。
兄さんを起こさないように頭を上げて、膝の上に乗せた。

所謂、膝枕と言うやつをやってみた。

「……ん」

兄さんが突然動いたので起きたと思ったが、どうやら寝方を変えるために体を動かしたみたいだった。

今、兄さんの状態は仰向けで私との顔が近い為か、急に顔が赤くなってきた。

「……華琳様、顔が赤いですよ？」

「……物凄く赤いの？　もしかして？」

「ええ、凄まじく真っ赤です。というか、私にもやらせてください」

「え、ええ、はい、どうぞ。起こさないようね？」

「はい。……これ、いいですね」

「言葉には表現できないけど……気持ちいいわね」

「はい。……ふぁ」

「秋蘭も寝ていいわよ？　朝早かったし、辛いんでしょ？」

「それなら、華琳様も同じでしょうに華琳様こそ寝るべきですよ！」

「なら、二人で寝ちゃいましょうか！」

「そうですね」

そう言って兄さんを挟むように私たちは寝た。

～華琳・秋蘭ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～

Ｚｚｚ……

「ふぁ～～よく寝…た……？」
起きた俺は太陽を見ると、時間的に昼だと言う事が分かった。
取り敢えず、廊下に手をつこうとした時――――
むにゅ……
妙に柔らかい感触が両手に当たった。
右は揉み心地があって弾力があり、左は揉みがいのある感じだった。
しかも、その後に聞こえた声が問題だった。
「「……んぁ」」
――――下を見てみると、俺から見て右側に秋蘭が、左側に華琳が居た。
「……アレ？」
そして、最悪な形で事態はやってきた。
「「……ふぁ～あ、お早うございま……す？」」
二人は起きた時、俺の手を見た。
両手が触れてある先は、お互いの胸を触っていた。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」
「……よう、お早う」
そう言って、さりげなく手をどかそうすることで意識を逸らそうとしたが……

「兄さんは私たちが寝ている間に胸を触っていたんですか？」
「……真紅狼、触ってみて感触はどうだった？」
ダメだった。
というか、からかわれているような気がするので下手な回答をしないことにした。

「うん？　まあ、良い感触だったぞ？」
これは文句の言いようの無い回答だ！　俺グッジョブ！！

「なら、触っててもいいんぞ？」
アルェ～～～～（　。３　。）？
回避したはずなのに、帰って来ただと？！
ちなみに華琳は言うと……

「兄さん……襲いたいですか？」
と言いながら、着ている服を少し緩みながら言ってきた。

「休んでのに、また疲れるのはちょっとなぁ」
「そういうの分かってましたよ、なので胸で我慢します」
「いや、その理屈はおかしい。ていうか、何時の間に着たの？」

「ほんの2，3時間前に来ました」
「一応声をかけたんだが、返事がなかったからな、勝手に上がらせてもらった」
「そのあと、兄さんを見つけて……まあ、その後は二人で一緒に寝てました」
「……さいですか」
「あ、外に民から見舞いの品を貰ってきてますので」
「はいよ、昼飯食うか」
「兄さん、一緒にいいですか？」
「どうぞ～、ちょっと取ってくる」
「あ、はい」

ドタドタ・・・

持ってきたのはちょっと底が深い桶に先程まで野菜を冷やしていた川の水を入れて、その上に野菜が入った竹籠を乗せて持ってきた。

「これ、朝獲ったヤツ。先程まで冷やしてたから、冷たくておいしいぞ」
適当に取って二人に渡して、仲良く三人で昼飯を食いながら、ゆったりとその日は過ごした。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

休日（後書き）

短いですね・・・ごめんなさい

あと、2，3話はこれぐらいなってしまいます。

ご了承ください。

次回は街に出ます。

街にお出かけ（前書き）

休日その2です

街にお出かけ

～真紅狼ｓｉｄｅ～
俺は今、市街に向かっている。
それなりに顔を知られているし、居なかった間街の変化などを知りたかったからだ。

「久しぶりに回るなぁ」
「おや？　真紅狼殿、久しぶりですね！」
「おう！　久しぶり、どう調子は？」
「順調ですよ！　ウチの店にまた来てください！！」
「おう、あとでな」
今度は向かい側のおばちゃんから声を掛けられた。

「あら、真ちゃん！　帰ってきてたんかい？」
「おばちゃん、ただいま」
「また、一回りイイ男になっちゃって！！」
「そんな風に見えるのか？」
「アタシが言うんだか間違いないよ！」
「そいつは有難いね、最近はいいモノ入った？」
「いつも通りさね」
「まあ、商売が順調なのはいいことだね」
「まあねぇ。アタシはこれから店の準備しないといけないから……」
「仕事頑張って！」
「はいよ！」
再び歩き続けると民から次から次へと声をかけられる。

「真さん、怪我は大丈夫かい？」
「ああ、大丈夫だ」
「真紅狼さん！　メシ如何ッスか！？」
「あとで頼む」
「ういッス！！」
「真紅狼様、依頼された品、ほぼ出来てますよ」
「おお、そうか。全部出来たら、一度完成品見してくれ」
「分かりました、家の方に伺えばよろしいですか？」
「ああ、頼む」
そういうやり取りをしている俺は民からは「真さん」や「真ちゃん」、「真紅狼さん」と呼ばれている。
本来なら、民には真名を教えないのだが俺はこの街の民には勝手に呼んでも構わないと教えた。
最初は躊躇いがあったが時間が経つにつれ、皆、フレンドリーに呼んでくれるようになった。
堅っ苦しい呼び方よりもこちらの方が、気が楽だからだ。

今回街を出掛けた理由はとある鍛冶屋に用があった。
その鍛冶屋とは俺が“ガンブレード”を譲り受けた鍛冶屋だ。

「……おやっさん、居るか？」
「――ん？　おお、真紅狼じゃねえか！！」
「お久しぶりです。……挨拶に来ました」
「すまねぇな、そういえばお前さん、曹操様の兄らしいな？」
「あー、そうですが……堅苦しい呼ばないで普通に『真紅狼』でいいッスよ？」
「でも、真名なんだろ？」

「民には普通に「真さん」とかで呼んでますよ？」
「なら、いいか」
「そうっすよ。問題ないですよ」
「「ハハハハハハハハハハ！！」」
と二人同時に笑い出して「その後どうだったか？」などを思い出しながら話した。

「そうだ、今日はおやっさんにお願いがあったんですよ」
「なんだ改まって？」
「実は俺が率いている部隊の武器を創って欲しいんですよ」
「ほぉ……、詳しく話しな」
「今から出す武器を創って欲しんですよ」
「……見せな」
そういっておやっさんから少し離れて、台の上に刀、斧槍を見せた。

「ふむ、これを創れってか？」
「……ええ、出来ますか？」
「出来るが、鉄などが揃えれるかが、問題だな」
「その辺はこちらで揃えます」
「……あとは金だな」
「そちらも大丈夫です」
「最後に……どれぐらい作るんだ？」
「刀は１０本、斧槍は５本程なんですが……大丈夫ですか？」
「いいぜ、その依頼を受けよう！！」
「有難うございます。明日、材料を持ってきます」
「分かった。じゃあこれからある分で試しに創ってみるぜ」
「出来るのを楽しみに待ってます」
「おう！　楽しみに待ってろや！！」

鍛冶屋を後にした時にはすでに昼だった。
華琳達と待ち合わせしてるので少し、宮廷に急いだ。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～華琳・秋蘭ｓｉｄｅ～
今日も昼から兄さんと過ごす為に午前中に終わらせるために書類整理を高速で行ってる。

「秋蘭、あと何枚！？」
「あと、一枚です！」
「分かったわ！！」
渡された書類に目を通して、何も問題がなかったため印を押して枚数を数えて確認したところ大丈夫だったので筆などを片付けて、兄さんの元に向かった。

「兄さん！」
「おお、お疲れさん」
「待ちましたか？」
「いや、今ちょうど着たところだ」
「お昼はどうしますか？」
「今これから行くつもりだが、どうする？」
「じゃあ、兄さんと一緒で」
「はいよ、秋蘭は？」
「私もそれで構わないぞ」
「んじゃ、行くか」

移動中・・・

陳留でもっとも大きい通りに出た私たちはある光景を見て、驚いた。なんと兄さんを友人感覚で民達が話しているからだ。

「兄さん、これはどういう事ですか？」
「ん？　ああ、コレ？　俺が皆に真名を教えた後、「呼び捨てで構わないぞ」って言ったんだよ」
「何故、そんなことをしたんだ、真紅狼？　真名は神聖なものだろう？」
「秋蘭、俺はこの街を活気のある良い街にしたいんだよ。それには民との協力が必要不可欠だ。それなのに民から「曹真様」なんて言ってたら何時まで経っても良い街にならないだろ？　だから、真名を教えて友人関係で呼んでもらった方がいい関係も創りやすいし、色んな情報も逐一手に入るしな」
「……兄さんはそこまで考えていたんですか？」
「いや、ぶっちゃけ堅苦しいのが嫌いなだけです」
「「ぶっちゃけって何ですか？」」
「俺が居た前の世界の言葉。あれだ、天の世界の言葉って言えばいいのかねぇ……」
「兄さんが前居た時の世界の言葉ですか……、意味は何ですか？」
“ぶっちゃけ”ってのは正しく言うと“本当のところ”とか“実際は”だな」
「なるほど……兄さん。そういう話をたまにはしてくれませんか？」
「興味あるの？」
「ああ、真紅狼の過去は聞いたがその世界がどんな世界だったのかは聞いていなかったからな。興味が尽きないんだ」
「話してもあんま面白くねぇけどいいのか？」

「「ええ（ああ）」」
「取り敢えず、昼食うか」
「「ですね」」
そう言って、朝「行く」という店に向かった。

「燎、居るか？」
「あ、真紅狼さん！　メシですか！？」
「おう！　三人なんだが席空いてるか？」
「こちらにどうぞ！……って曹操様に夏侯淵様？！」
「そう畏まらなくていいわよ？」
「で、ですが……」
「華琳がそう言ってるんだから、別に良いぞ？」
「分かりました」
燎はそういうと厨房に引っこみ、代わりに若い女性が出てきて品を聞いてきた。

「何にしますか？」
「俺はチャーシュー麺で」
「じゃあ、私もそれで」
「私もそれで頼む」
「チャーシュー三つ、お願いしまーす！！」
「「「ヘイ！！」」」
注文書を厨房の台の上に置いた後、客に呼ばれたので再び接客していった。

「真紅狼さん、玲、可愛いでしょ？」
「燎、お前厨房良いのかよ？」

「大丈夫ですよ、今だけですがね」
「彼女、お前の恋人？」
「いえ、俺達結婚したんですよ！！　だから嫁さんです」
「そいつはおめでとう！」
「有難うございます。真紅狼さんは結婚しないんですか？」
そう聞かれた時、横に居る二人をちら見すると若干顔が赤くなっていたので名前を出すのは止めておこう。

「あー、うん。まあ結婚はするけど相手は教えねぇよ？」
「いいじゃない…「燎、早く厨房に入って仕事して！」…げっ、玲？！」
「注文が溜まっているんだから、早くしてちょうだい！！」
「はい！　分かりました！！」
鶴の一声がかけられたみたいに「ビュンッ！」と厨房に引っこんでいった。

「すみません、曹真様。ウチのお「待った」…何でしょう？」
「曹真様じゃなくて、真紅狼と呼び捨てでいい」
「ですが…」
「堅苦しいのは嫌いなんだよ」
「じゃ、じゃあ、真紅狼様で良いですか？」
「う～ん、様じゃなくていいんだけど、まあいいか」
「真紅狼様、ウチの夫がすみません」
「いいよ、別に。誰だって気になるだろうしな。……特に後ろでさりげなく聞き耳立てている連中！！　テメェ等に言ってんだ！　人の事よりも自分たちの嫁でも見つけろや！！」
「そりゃないですよ！！　真紅狼さん」
「うるせぇ！」

兄さんは立ち上がり、後ろの客達と笑いながら喋って言った。

「曹操様に夏侯淵様よろしいでしょうか？」
「どうしたの、玲？」
「先程、真紅狼様が言っていたご結婚のお相手は失礼なら申し訳ありませんが曹操様と夏侯淵様ですか？」
「「！？」」
「何故、分かったの？」
「結婚したからでしょうか……相手の顔をよく見るとなんとなく分かってしまうんです」
「……なるほど、所謂“女の勘”ってやつか」
「はい、そうです。おそらくだいぶ早いと思うんですが、ご結婚おめでとうございます」
「有難う、玲」
「……ああ」
「では、料理持ってきますね」
「玲！」
「はい、何でしょうか？」
「私の真名を受け取りなさい、真名は華琳よ」
「よろしいんですか！？　私なんかに？！」
「同じ結婚する者同士であり、“友人”として受け取って欲しいわ」
「なら、私もだな。真名は秋蘭だ。よろしく頼む」
「はい、よろしくお願いします。じゃあ、料理持ってきますね」
玲は厨房に引っこんだと同時に兄さんも戻ってきた。

「……どうした？　良いことでもあったか？　顔が笑っているぞ？」
「……ええ、とても良いことがありました」
「……真紅狼には分からないかもな」

「何故に？」
「それは――女達の秘密ですよ」
「？？？」

そうして私たちは昼食を食べながら、午後を楽しんだ。
～華琳・秋蘭ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

街にお出かけ（後書き）

今回は街をぶらり旅～・・・
なんて、冗談やってる場合じゃないですね。

だいぶ前に出てきた鍛冶屋のおやっさん登場。
『蒼龍隊』と『紫鮫隊』の武器作成の依頼です。

残りは真紅狼が製作します。
作成時間とかご都合主義でお願いします。

次回で休日編は終わる予定です。

予想外の訪問者（前書き）

終わりませんでした・・・ｏｒｚ

でも、次回の終わりぐらいから多分ですけど『反董卓連合編』になると思います。

予想外の訪問者

～真紅狼ｓｉｄｅ～

おやっさんに鍛冶を頼んでから二週間が過ぎた。

その間何をしていたかって？

そりゃ、もちろん各部隊の標準武器を作成していたに決まってんじゃん。

おやっさんで創ってもらった武器をモデルにして作成して、付加などはこちらでしていた。

超刀と斧槍だけは本来の長さと重さを半分にして軽くて振りまわしやすい武器に変えたけどね。

二刀と小太刀も丈夫で斬れ易いように付加してある為、よっぽど変な使い方しない限り折れないようになっている。

そして、昨日、頼んでいたモノが出来たらしくて完成品を見せてもらった。

頼んでいたものだけどいい陣織だった。

まあ、糸はケーツハリーの羽根を渡しているので軽くて丈夫で防刃使用になっていた。

現在は桂花の帽子（？）みたいな物を作成中だ。

見た目がネコミミだったのでケット・シーの力が付加されている、ケット・シーは本来『混乱』させるがこの帽子には抵抗（レジスト）させるようにしてある。

不測の事態に陥って頭が働かない、もしくは混乱しても、それを回避し冷静に状況判断することができる帽子だ。

それと羽織も創った。

羽織はフェニックスの羽根を使用して、軍師だからまず襲われるってことはないと思うが、念のため衝撃を和らげる力と虫嫌いだと言っていたのでそれを寄せ付けない力が付加されている羽織となった。ちなみに熱さは感じられず、周囲の気温に合せて変化できる便利機能まで付けた。
――まあ、最後はやり過ぎたんだが……
全てが終わり、次の日に『神狼』の詰め所に向かい、武器と各部隊を表す羽織を渡した。

「「「「「総隊長！　有難うございます！！」」」」」
と手を合せて感謝の言葉を言ってきた。

「各部隊はこれからそれを着ることだ、分かったか？」
「「「「「応！！」」」」」
隊員は後ろで「カッコいい！」とか「総隊長！！」と叫んでいた。

「真ちゃん！　有難うね！　こんなに貰っちゃって！！」
「別に構わねぇよ、何時まで経っても各部隊が同じ格好ってのもいかんだろ？」
「そうだけどさ、やっぱりね」
「お前も苦労する性格だな」
「真ちゃんと過ごせば誰でもなるんじゃないかな？」
「俺のせいかよ……」
「アハハ、冗談だよ！　冗談！！　それじゃね～」
からかったまま雅は自分の部隊の元に帰っていった。
その後、凪、真桜、沙和がやってきた。

「真紅狼殿」
「真紅狼さん」
「兄ちゃん」
「「「有難う！！！」」」
「気にいって何よりだ」
「これ、兄ちゃんがデザインしたんか？」
「デザインはな、創ったのは衣服屋の楓さんがやってくれたよ」
「真紅狼殿は民と仲がよろしいんですか？」
「おう、メッチャいいぞ？　「俺が創ってくれない？」って言ったら「いいですよ」その二言で契約成立した」
「凄いフレンドリーですね」
「ただなぁ……」
「どうかしたの？」
「いや、色がなぁ。合せる色が難しかったんだよ。特に『紅虎』と『翠鳳』がな」
そう、とても配色が難しかったのである。
他の三つは楽だった。
各部隊のトレードマークになっている生物を浮き彫りで色を付けた。

『蒼龍』は龍の部分が蒼で、周りは白だ。
『紫鮫』は鮫の部分が紫で、周りは青だ。
『黒獅子』は獅子の部分が金で、周りは黒だ。
黒獅子の羽織だけ極道みたいに見えるが気のせいだ。
ここからが凄く難しかったんだよ、ここからが。

赤だと『紅虎』と被るためどうしても避けたかったので橙色があるかなぁ？　と思ったら、なんかあったので採用した。

『翠鳳』は鳳凰が橙色にして、周りは翠だ。

これで赤が滞りなく使えるので『紅虎』は紅を採用した。
『紅虎』は虎が紅で、周りが白にした。
『蒼龍』と多少色が被ってしまったが、どちらも映えるのでその辺は妥協したのである。

「……凄い考えたの」
「もう、三日ぐらい悩んだね、これに関しては」
「そんなに悩んで創られたのですか……、大切に着させていただきます！」
「気張るなよ、凪。そういや、華琳は何してるんだ？」
「華琳様なら、朝早くに袁紹に呼ばれたので向かいましたよ？」
「袁紹って、あの袁紹か？」
「はい、あの袁紹です」
「なんか、碌でもないことが起きそうな予感がする」
「止めてください、不吉なことを言うのは……」
「「……はぁ」」
二人揃ってため息をついてしまった。
何せ、高飛車で自分が一番じゃないと気が済まない金ぴか娘だ……
出来れば関わりたくない。
ちょっと、気が落ちている時に蒼龍隊の隊員が俺の元にやってきた。

「総隊長、言伝です」
「俺に？」
「はい。言伝を出した人はこう言ってました「私は真紅狼君の友人だ」と…」

「先生か！　どうしたんだ？」
「それが、「2，3日休まず飛ばしてこちらに来た」と言っております」
「……様子が変だな、案内してくれ！」
「はい！」
そうして急いで俺は先生の元に急いだ。
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～先生ｓｉｄｅ～
劉備さんのところをこっそり抜け出して、私達は“友人”である真紅狼君の元に保護を求めるため、休まず向かった。
そして、ようやく陳留に辿り着いた時はすでに空腹で倒れそうだった。

「そこの者、止まれ！」
「私は真紅狼君の友人です！　真紅狼君を呼んでくれませんか！！」
「総長を呼んで来い！」
「はい！」
「お、おい？！　大丈夫か！？」
「三日ほど休まずに来た……も……ので「バタッ…」」
「しっかりしろ！！」
力尽きそうだったときに向こう側から聞き覚えのある声が聞こえた。

「大丈夫か！？」
～先生ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
入口あたりに先生と荷車があった。
馬で引いてきたみたいだ。
先生が倒れたので急いだ。

「大丈夫か！？　先生、何があった！？」
「し…真……紅狼…君、私達を保……護してく……れませんか？」
「その前になにか食わねぇと！！」
次第に人が集まって来た。
そこに燎が居たので叫んだ。

「燎！　悪いんだが簡単な物でいいから四人分の水と食糧を持って来てくれ！！」
「ういッス！！」
「先生！　しっかりしろ、食糧と水がもうすぐ来る！！」
「私はいいです……彼女達を先に……」
「大丈夫だ、四人分持って来てもらってる！！」
「真紅狼さん（様）！！」
燎と玲の二人がやってきた。

「食糧です」
「この人と荷車にいる三人にも与えてやってくれ」
「はい。貴女達もどうぞ」
「「「有難うございます！！！……ガツガツ！！」」」
「先生も食えるか？」
「ええ、大丈夫です。頂きます。……もぐもぐ」
「真紅狼さん！　水ッス！！」

「ああ、済まない」
水を先生と荷車に乗っている彼女達に渡すとひったくるように取り一気に飲み干した。

「落ち着いたか？」
「ええ、助かりました」
「一体何があったんだ？」
「劉備のところが嫌になりましたので、抜け出して保護を求めてきました」
「……訳ありか？」
「――ええ」
「詳しい話しは俺の家で話すか、ついて来てくれ」
「馬で行っても？」
「ああ、構わない」
彼女達――――天和達の表情を見ると何かに怯えた表情が時折見えた。
あのクソガキなにかやらかしたな？
その時、ちょうど袁紹の所に行っていた華琳達が帰って来た。

「――兄さん！　どうしたんですか？！」
「おかえり。華琳」
「あ、はい。ただいま戻りました。あら？　天和達が何故ココに？」
「――保護を求めてきたらしい」
「保護？！」
華琳に駆け寄って、小声で話した。

「（訳ありみたいだ。しかも、天和達の表情をちょっと見てみろ）」
「（はい）」

そこには食べ物を食べれて安堵した表情と時折体を守るように何かに怯える顔があった。

「（あのクソガキが何かやらかしたに違いない。怯えた方が尋常じゃない）」

「（――確かに何かに怯えてますね。兄さんは何があったか見当は付いてるんですか？）」

「（ほぼ八割な……。出来れば外れて欲しいがあっていたら、出会い頭ヤツをブン殴る！　取り敢えず、俺の家に来てもらう事になったから後で華琳達も来てくれ）」

「（分かりました。では後で……）」

そう言って別れ、先生達を俺の家に案内した。

～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

この後、先生の話しを聞いて予想が当たっていたことに気持ちが沈んだ。

……アイツ、一回マジでブン殴る！！

予想外の訪問者（後書き）

凪たちが現代語使ってるのは、二週間の間に真紅狼が武器作成の合間に教えました。以後使って行きます。

一刀が外道化していきます。

つーか、すでに分かってる方も多いかも・・・

保護の訳・・・（前書き）

次回から、反董卓編だー！！

ここまで来るのに寄り道ばっかしてたような気がする・・・

保護の訳・・・

～先生ｓｉｄｅ～
真紅狼君に連れられて来ましたが、真紅狼君の家はこの国では見られない家の形でした。
その時の表情を見た真紅狼君は「俺が前住んでいた国の形にしたんだよ」と言ってました。
……何と言うか古風で良いですね。

今、私達は“居間”と呼ばれる場所に居ますが真紅狼君は「ちょっと待っててくれ」といって消えました。
天和さん達は初めて見る光景なのか、キョロキョロしてます。

「…待たせたな、お茶ぐらいしかないが許してくれ」
「いえ、有難うございます。それで、真紅狼君……見慣れぬ姿してますね」
「ああ、これ？　俺が前住んでいた時の服っていうかそんな感じだよ。この家に居る時は基本コレでいるよ」
「……なるほど、真紅狼君は伝統を重んじるんですね」
「まあ……な」
「では、そろそろ話を……」
「待ってくれ、あともう少しで来ると思うんだが……」
「？　誰がです？」
その時、入口から『兄さん、来ましたよー』と言う声が聞こえました。

「入って来てくれ！！」
「曹操さん達を呼んだですか？」
「俺の一存だけでは決められないからな……その辺は勘弁してくれ」
「いえ、それもそうですね」
その後、曹操さん達がこの部屋に入って来た。
……大勢で。

「全員居るのかよ……」
「すみません、いつの間にかついてきちゃって……」
「隣の和室も使うか……」
そう言って和室の仕切りを開いてどこからか机を持って来て、お茶まで用意していた。

「じゃあ、天和。辛い思いかもしれないが何があったか話してくれないか？」
「……はい。」
天和さん達は辛そうな表情で話そうとしていました。
～先生ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～天和ｓｉｄｅ～
思い出すのも嫌だけど、話さなきゃ保護してもらえるか分からないから頑張らないと……。

「では、お話します。
……あの後、私達は平原にいる親衛隊達の方を討伐と言うより、追い払っていき無事に平原に平定しました。その後、桃香さんは平原

の相に任命されました。
そこから、桃香さん達はあの男と共に内政やらで忙しくて、私達は監視が付きましたが平和そのものだったんです。公演も何回かやらせていただきました。
だけど、しばらく経ってから、桃香さんと愛紗さんの様子が変わりました……今までは乱世を正す“仲間”だったのが“恋人”みたいな関係の距離感でした。
でも、気のせいだと思って気にしませんでしたが……その次の夜……あの男に……「一人で来るように」って呼び出されて……っ！！」
その後の言葉が言えなかった、言えば思い出すからだ。
あの男のいやらしい視線とか手つきが体を這い寄る感じで……。

「もういい、言うな。悪かったな、思い出させちまって…。雅、悪いが別の部屋に移してやってくれ」
「分かったよ。こっちにおいで……」
「……すみません」
私達は震えが収まるまで別の部屋で落ち着くことなった。
出る時、真紅狼さんの顔は恐かった。
～天和ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～先生ｓｉｄｅ～
震えが収まらなくなった天和さん達を別の部屋に移してくれた真紅狼君の表情は恐ろしかった、まるでこの世の者とは思えないほどの殺気がこの場を支配していた。
現に向こう側に居る三人が気を失っていかけるほどだった。

「真紅狼君、ここからは私がお話します。聞かされた範囲ですが……」
「ああ、頼む」
口数が少なくなってきてますね。

「……天和さんは次の日から、一刀君を見ると怯えていました。理由を聞いても「何もない」の一点張りで詳しくは聞けませんでした。次は地和さんも同じように怯えていましたので、これはもう何かあったに違いないと思い、一刀君に聞いてみたんです。ですが、「何もしてないよ」と答えられました。その日の夜、今度は人和さんが一刀君の元に一人で向かった後、少し経ってから人和さんが着衣を乱れたままで帰って来たんです」
「先生、もういいぞ。……あンのクソガキ！！　関羽と劉備はどんな感じだった？」
「……というと？」
「“女”の顔になってたか？」
「……ええ。あと、おそらくですが翠さんと蒲公英さんも……」
「手が早いにも程があるだろ！？」
「予想なので……」
話せることは話した。
後は、曹操さんがどう思うかですね。
～先生ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～真紅狼ｓｉｄｅ～
天和と先生の話しを聞いて、やはりゲス野郎は手を出しかけていたらしい。

「華琳、天和達はこちらで保護だが構わないな？」
「ええ、私も同意見です」
「有難うございます、本当に」
「住む場所は宮廷でいいか？」
「何故ですか？」
「俺の家でもいいんだが、あんな後だ。男と二人っきりなんて気が落ち着かないだろ？　なら、同性が多い方に住んだ方が安心できると思うしな」
「そうですね、それでよろしいですか、曹操様？」
「構わないわ、三人一緒の部屋に手配しておくわ。先生はどうするの？」
「私も宮廷の方でお願いします。ですが、同じ部屋ではなく、そこから近い部屋にして欲しいのですが……」
「安心して、ちゃんと手配しておくわ」
先生はそれを聞いて、ようやく安堵したようだ。
それにしても……アイツ自分の役目全く果たしちゃいねぇ。
むしろ、欲望に走りつつあるな。
最悪、殺すか。

「アイツに次あったら出会い頭、ブン殴ろう！！」
それも思いっきり盛大に。
角を出したら、死ぬんで出さずにやろうっと。
今死なれちゃ、この世界が崩壊しかねないからな。

『じゃんけん、死ねぇ！！』で有名なあの人の「フリッカーコンビネーション」でも叩き込もう、そうしよう。
全身骨折は免れないな……

「さて、腹が立つ男の話は止めにして、華琳は袁紹の所に何しに行ってたんだ？」
「話をばっさりと切りますね……」
「暗い話ばっかりも嫌だろう？」
「確かにそうですが……、あ、それとあの男をブン殴るのがすぐに出来ますよ」
「どういうこと？」
「袁紹からの知らせでは「都で悪政を強いて、民を苦しめている董卓を討ちますので皆さんにお声かけてあげました」と言っていましたよ？」
「へぇ、ちょうどいいタイミングじゃないか」
「しかもその場には私の他にも公孫賛、張勲、劉備もいましたので参加するんじゃないですかね」
おぉう、これは北郷君、全身骨折コース一直線ですね。

「で、何時集まるの？」
「三日後です」
「分かった、先生は悪いんだがついて来てくれるか？　軍医として来て欲しいんだ」
「いいですよ、私の腕が必要ならばどこにでも行きます」
「天和達はここに置いていく、ヤツに出会ったら手を出しかねない」
「そうした方が安全ですね」
華琳は立ち上がり、叫んだ。

「では、全員曹操軍は三日後反董卓連合に参加する！　全員準備にかかれ！！」
「「「「「「はっ！！！」」」」」」

春蘭達はぞろぞろと俺の家を出ていった。
この場には俺と華琳、秋蘭、雅、先生と天和達が残っていた。

「雅、先生と天和達を宮廷に連れて行ってくれ。あと各部隊準備を怠らないように言っとけ」
「うん、分かった。先生に天和ちゃん達ついて来てね」
雅についていく先生は出ていくときにこっちに振り向いて……

「真紅狼君、本当に保護してくれて有難うございます」
そう言って宮廷に向かって行った。

「……俺も“天の御遣い”らしいことしてるのかねぇ？」
「……してますよ、充分に」
「そうだぞ、真紅狼。自信を持て！」
「そうかい、そいつはよかった。さて、お二人さんは何故残ってるのかな？」
「そんなの決まってるじゃないですか」
「ああ、決まってるな」
「「一緒に寝るためですよ！！」」
「堂々と言うなよ……というか、お前達アグレッシブすぎるだろ。
……取り敢えず、夕餉作るか」
～真紅狼ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

その後結局三人で一緒に寝ました。

保護の訳・・・（後書き）

華琳・秋蘭がアグレッシブになりました（笑）

・・・どうしてこうなった?!

そして、一刀はラスボスコース一直線・・・

まあ、何人かは救出します。

要望があれば言ってください。

すでに一人は決まってます（作者の勝手で）

ただ、桃香と愛紗、鈴々、多分星は無理かも?

星は分かりません、予定ですので・・・

ちょいとアンケートを・・・

毎度この作品を読んでくれて有難うございます。
作者の大喰らいの牙です。

次回から『反董卓連合編』に入るんですが、話の構成を変える予定となっています。
理由はまあ、読んでいればご存じかもしれませんが、『まるで屑な種馬男』……通称“マクオ”（ケン様が命名）の扱いについてです。

そのため今回は皆様にアンケートに答えてもらいたくて書かせていただきました。

1，一刀をすぐ抹殺する

2，反董卓編が終わり次第に抹殺

3，どこでもいいや

の三つとなってます。

1の場合、洛陽に行く間に鋼糸で首をスパンッ！と行く予定です。
この場合、桃香たちが復讐者になります。言わばこのお話のボスと

してかな？

２の場合、蜀で救える女性を真紅狼が影で救いながら話しが進みます。

ちなみに当初の予定はこれで行くつもりでした。

３，の場合、反董卓編が終わってから蜀の武将を救って行き、一刀＋αがボスと言う事になります。

期限は五日程、取りますのでよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4958v/

転生先は“ネギま”じゃなくて真恋姫！？

2011年10月13日14時53分発行